

「幻想の市民参加型ジャーナリズム
～ネットは個を抹殺する～」

～バッシングされた私と私の家族の昨日今日、そして明日～

スポン

タ中村(中村厚一郎)

湯川鶴章氏「ブログがジャーナリズムを変える」(NTT 出版)への寄稿依頼をもとに作成するも、編集方針の変更により採用されなかった原稿です。脱稿は、2006年3月の時点です。

出版者とのコネクションがなかったため、とりあえず、ネットにて公開しております。

半年以上更新していないサイトですが、多いときには、100を越えるアクセスがあり、現在総アクセス12000を数え、いままアクセス数は増えており、ネットにおけるロングテールの例ではないかと、自負しております。

構成：=====

前書き

01_市民プロガーが市民ジャーナリストに…。 28/28

- ・いまさらながら恥ずかしい、ホリエモンを賛美する私
- ・個人ブロガー 2 年生だった私が...
- ・「ごくせん」最終回に憤る私...
- ・メディアの周辺にずっといた私
- ・私もデジタルデバイドの被害者かも
- ・有頂天で傲慢な私
- ・墮ちいていく私

02_バッシングされる市民

45/73

- ・名前をつぎつぎに変えていく私って誰?
- ・遅いブログ・デビューの私
- ・怒っている私
- ・2 ちゃんにあこがれる複雑な私
- ・叱られる私
- ・容疑者になった私
- ・インターネットについて考える私
- ・助けて。と叫ぶ私
- ・消せない過去を取り繕う私

03_市民参加型ジャーナリズムの誕生

54/127

- ・ホリエモン好きな私
- ・六本木ヒルズ森タワー 3 8 階な私.....2005.03.05
- ・人の話を聞かない年寄りの私
- ・ジャーナリズムについて考える私
- ・何はともあれ、私は私
- ・問いたです私
- ・インターネットビジネスを考える私
- ・市民記者の私
- ・私は市民記者なのか、それとも市民ブロガーなのか
- ・ライブドアをかたってはならぬ市民記者の私
- ・マスコミごっこをする市民記者の私
- ・市民記者の私は自らを語るべき

04_市民参加型ジャーナリズムの揺らぎ 37/164

- ・ 裏文化から表にしみ出してきた 2ちゃんねる現象
- ・ Wiki、そして、はてなの中の私
- ・ 市民記者の責任のありかは私
- ・ 記事に手を加えられても、没になってもへっちゃらな市民記者の私
- ・ 市民記者交流 BBS が開設される
- ・ 市民記者って、記事を書く特権を与えられたものなのか
- ・ はじめての市民記者を対象にした研修会
- ・ 市民参加型ジャーナリズムは、四流ジャーナリズムであってはならぬ。と力説する私
- ・ 編集者ならではの不満に納得する市民記者の私

05_自分たちのメディアをめざす市民記者たち 29/193

- ・ 巧妙な嘘よりも、下手な真実を選べ
- ・ 市民記者相互による投稿記事の編集システムを構築せよ
- ・ 記事管理システムを市民記者に向けてオープン化せよ
- ・ 既存のジャーナリストが見たライブドア PJ ニュース
- ・ テレビも注目するライブドア PJ ニュース
- ・ ライブドア PJ は日本の市民参加型ジャーナリズムの代表のひとつである...
- ・ ライブドアに反旗を翻す私
- ・ 最後の記事

06_日本でも、市民参加型ジャーナリズムは成立する。

73/266

- ・ ホリエモンとともにあったパブリック・ジャーナリズム
- ・ 市民記事の疵は、書く技術の拙さ
- ・ 民主主義は、言う技術・書く技術に秀でた人だけのものでいいのか...
- ・ ネットは新聞を殺すのかの湯川さん
- ・ ネット・ジャーナリズムの可能性
- ・ オ・ヨンホ氏は語る

- ・日本のエスタブリッシュは、市民参加型ジャーナリズムの実現を困難とみる
- ・日本に市民参加型ジャーナリズムが成立しない理由
- ・情報は民主主義の通貨である
- ・すでに成功した市民記者メディアは存在する
- ・和をもって尊としてとなす日本人
- ・日本社会の民族的同質性の高さが原因
- ・肩書きを捨てれば、誰でも市民記者になれる
- ・市民記者は自分の経験を書く
- ・個人ブログと市民参加型ジャーナリズムの違いは、オーソライズされているかどうかで

ある

- ・市民記者は妙好人
- ・市民記者はスーパーマンだ
- ・市民参加型ジャーナリズムのスタイル
- ・匿名は篤志のあらわれ
- ・マズローの説は疑わしい
- ・市民は何のために生きるか
- ・市民はニュースを提供できるのか
- ・市民記者は客観的になれない
- ・市民記者は私怨を公憤に高める
- ・市民記者は巨悪から取り組むことはできない
- ・市民記者は「平和の時の平和論」に参加してはならぬ
- ・市民記者が書く記事はトリガーである

07_市民参加型ジャーナリズムを成立させるもの。

50/313

- ・情報格差がマーチャントを成立させる
- ・市民参加型ジャーナリズムが必要とするシステムは、すべてのインターネット・ユーザーに必要なもの
- ・匿名が必ずしも悪とはいえない
- ・実名は、個の誠実を誘発するか
- ・トレーサビリティの確保
- ・技術に強い未来なんていない
- ・トレーサビリティの確保が重要なのは、ネットだけではない。
- ・守られるべき個は、ネット上にのみ存在するのではない
- ・インターネットといえども、個は単独で存在できない

- ・リアルワールドのニュースも開く個人情報エージェント
- ・個人情報エージェントは、セキュリティのためのフィルターではない
- ・フリーアドレスに信頼性を
- ・個の境界領域を拡大するな
- ・インターネットで必要な保険とは何か
- ・個人情報エージェントの必要性

08_コミュニケーションの時代の終焉

37/350

- ・コミュニケーションの世代
- ・コミュニケーションの基本は挨拶なのか
- ・日本語の意味の含有率は低い
- ・挨拶なんてくそくらえ
- ・オタクとは、個とコミュニケーションを両立させた文化である
- ・ディスコミュニケーションを理由に、個の対立を隠してはいけない
- ・コミュニケーションの場を開いていれば、個の意見を尊重しているとするのは、メディア提供者の欺瞞である。
- ・ベルリンの壁崩壊後、歴史は繰り返されるでいいのか
- ・情報の結節点の存在意義
- ・すべての個がゆるぎない個であり、それがひとつの角として成立することが重要
- ・企業ブログは、商品にまつわるコミュニケーションがコミュニティであることを露呈させた
- ・プロフェッショナルの時代の終焉
- ・エッジの立った多角形の未来...

真実の記憶などありえない。思い出すという行為を通じて、私達は過去のできごとに様々な手を加えている。同じように、現実の世界も主観で成り立っていて、全体ではないことを描きたい。
(ディビッド・クロネンバーグ)

一年前に起きたことをなるべく冷静に、客観的であることをつとめながら書いてきたつもりである。

だが、それは、あくまでも私という個から見た出来事ではないし、それを事実といってよいのかも疑わしい。

もし、私の文章を読んで興味を持った人は、私が紹介したサイトたちを巡っていけば、そのことを簡単に確かめることができる。

書いたものがずっと残っていることをインターネットの利点と見るか、欠点とみるか。それは、あなた次第である。

バッシングを受けた私としては、苦笑いをする他ないのだが...。
(スポンタ中村)

01_市民ブロガーが市民ジャーナリストに…。

01_01-----

【いまさらながら恥ずかしい、ホリエモンを賛美する私】

2005年3月25日は私の誕生日だ。その日の日経新聞にはゴマブックスの新刊本「堀江本」の広告が掲載されていた。発売3日で10万部突破、たちまち3刷決定。という惹句。ライブドアのニッポン放送株大量取得により、近鉄買収失敗、楽天獲得失敗の2連敗中のホリエモンとはいえ、彼の人気が決定的だったから、本が売れるのも当然と思われた。

その3段を使った広告の下には次のような書評が載っていた。

【ライブドア・PJニュース 03月20日】-最初に、この記事はPJ中村厚一郎の私見であ

ることをお断りしておく。(～中略～)ご飯を食べたり、人と逢ったり、旅行をしたり、散文的な彼の日常の中で、私の印象に残ったのは、彼が IR のために世界中の人たちと会っていることだ。こんなことに気づくのは、私が世界的企業のトップたちのふるまいを知らないだけで、驚くのに値しないのかもしれない。(～中略～)国境を越えて世界中の人と逢って飯を食い、酒を飲み、話をする。そういう人間関係・信頼関係があるから、世界中のお金が堀江氏のもとに集まってくるのだろう。国境は、人を信じることの障害にはならない。インターネットは国境を越えたツールだが、それはインターネットにつながっている人たちの心がつながっていてはじめて機能する。インターネットを支える人たちは暖かい。だれもがそう思える時代に速くなって欲しいものだ。

(http://news.livedoor.com/webapp/journal/cid__1041110/detail)

写真：

ゴマブックス刊行「堀江本 2004.1.1-2005.2.28」の本と、
日本経済新聞(2005.03.25)の堀絵本の新聞広告

46歳の誕生日のサプライズといってもいい出来事に私は狂喜乱舞した。米粒のような小さな文字だが、私の文字が活字になり、新聞紙面に紹介されたことに無上の喜びを感じた。

私が自慢げに紙面を見せると、妻と娘は「お父さんがあんなにうれしい顔をしたことをみたことがない」と驚いた。

テレビ番組のディレクターとして、番組のエンドクレジットに名前が流れていたこともある。かならずしもメディアと遠い存在ではないところの職業人である私が、そんな表情をみせてしまったことが、とても恥ずかったのを憶えている。

01_02-----

【個人ブロガー2年生だった私が...】

当時の私は NTT データが運営するドブログで個人ブログに日々の思いを毎日書き込んでいた。当時のアクセス数は1日に数百という単位。それが、その前日、前々日と千を越え、ドブログの人気ブログランキングでもベスト5に入る勢い。もちろんアクセス数が増えるとスパムなコメントもやってくる。

タコ、ボケ。ピング(ブログの新規記事や更新を知らせる信号)ばかりうちやがって迷惑だ。....etc.

だが、他人の反論をいちいち気にしていたら、何もはじまらない。私は素直にアクセス数の増加に喜んでいて。

無名な個人である私のブログにアクセス数が増加した原因を理解することは容易だった。なぜなら、約一ヶ月前に、私はライブドアが募集した市民ジャーナリズムのサイトに記者登録をし、記事を書き始めていたからだ。

私は、2005年2月。私はライブドアの市民参加型ジャーナリズム「パブリックジャーナリスト」の募集に応募した。

(<http://news.livedoor.com/webapp/project/>注:募集要項は研修登録費用など当時から変更されています)

一週間少したってから市民記者としての登録が完了。私はすぐさま記事を作成した。

ちなみに、はじめて書いた記事のID番号は33である。ID番号が記事のナンバリングだとするならば、33番目の記事ということになる。募集開始が、2004年11月18日とあるから、3ヶ月あまりで33本の記事。市民参加型ジャーナリズムという新しいメディアがはじまっているのに、月に10本しか記事がアップされないという開店休業状態だった。

私自身もアクセス数の伸びないホームページの制作者だったし、閑散としたさまざまなインターネットの諸相を見てきたから、自分が関わった以上、すこしでも賑やかにできないものかという思いに駆られた。勿論、研修で出会った市民参加型ジャーナリズムをはじめた人間に独特のクセはあるにしても、悪人には思えなかったという気持ちもある。

そして、もうひとつは貧乏人の血。研修に支払った8000円を捨て金にしたくない貧乏人の頑固さだ。

どちらにしても、投稿し始めた当時の私は、市民参加型ジャーナリズムが何であるのか、ブログとの違いは何なのか、そんなことを考える余裕はない。

ただただこのムーブメントを盛り上げたい。その一念だった...

その結果、私が投稿した記事は以下ようになる。市民記者としてのデビューからこのリストにあげている時期において、非掲載原稿はなかった。

3月09日17時28分 掲載 『主観・客観』パブリックジャーナリスト研修レポート

3月11日09時00分 掲載 インターネットはテレビを飲み込めない 中村厚一郎(スポンタ)

3月11日11時29分 掲載 インターネットは、人類の歴史を追って変化する。中村厚一郎(スポンタ)

3月12日12時00分 掲載「インターネット世界のトップを走るのは日本」中村厚一郎(スポンタ)

3月12日12時45分 掲載 テレビの進化した形がインターネット放送ではない 中村厚一郎(スポンタ)

3月13日06時50分 掲載 堀江氏よ。放送における第三者評価機関をつくれ。 中村厚一郎(スポンタ)

3月14日17時45分 掲載 堀江氏とニッポン放送の関係、楽観論。 中村厚一郎(スポンタ)

3月15日11時11分 掲載 社会 ホリエモンを高校生はどう見ているか。 中村厚一郎(スポンタ)

3月16日09時40分 掲載 森田氏落選で首都圏連携の行方は？ 中村厚一郎(スポンタ)

3月16日16時13分 掲載 PJニュース インターネットの将来とSNS 中村厚一郎(スポンタ)

3月16日16時29分 掲載 インターネット インターネットの問題は何？ 中村厚一郎(スポンタ)

3月17日08時03分 掲載 PJニュース ネットの問題を解決するのは誰？ 中村厚一郎(スポンタ)

3月17日08時05分 掲載 スモール・ワールド計画とホリエモン 中村厚一郎(スポンタ)

3月17日18時10分 掲載 PJニュース スモール・ワールド計画と既存のメディア 中村厚一郎(スポンタ)

3月18日16時20分 掲載 PJニュース ホリエモンとかっぱ橋道具街 中村厚一郎(スポンタ)

3月18日17時52分 掲載 インターネット パブリックジャーナリストになって感じるこ
と。 中村厚一郎(スポンタ)

3月19日07時20分 掲載 スモール・ワールド計画と個の時代 中村厚一郎(スポンタ)

3月19日10時20分 掲載 PJニュース ホリエモン革命と小沢征爾 中村厚一郎(スポンタ)

3月20日07時15分 掲載 TBS「買物大図鑑・感謝祭」の再放送を望む 中村厚一郎(スポ
ンタ)

3月20日07時45分 掲載 PJニュース 児童館の名称が「子育て・児童センター」に変
わる 中村厚一郎(スポンタ)

3月21日06時45分 掲載 PJニュース 書評・堀江本 中村厚一郎(スポンタ)

3月23日09時10分 掲載 PJニュース 提案・労働組合は職能のモジュール化に取り組
め 中村厚一郎(スポンタ)

3月23日09時56分 掲載 オープンソースと市民社会形成 中村厚一郎(スポンタ)

3月23日10時02分 掲載 35歳以上の再雇用市場の創出を 中村厚一郎(スポンタ)

3月24日11時55分 掲載 ヨン様公式サイトから始まる日韓親善 中村厚一郎(スポンタ)

3月24日 PJ ニュース オピニオン： 21世紀は消費者の時代 中村厚一郎(スポンタ)
～以降も続々と投稿はつづく…。

注：上記記事は現在(2006.01.25)でもライブドア PJ ニュースでごらんになれます。タイトルなどで検索をかければたどりつけるはずです。

ライブドアが提供した市民記者メディアには、トラックバック機能がついていた。だから、自分の記事の反応を知ることができる。とはいえ、読者の反応といっても書き手にとって気持ちのいいものばかりではない。市民記者になったばかりの私を襲ったのは、私の文章力・国語力の程度の低さを指摘するものだった。

曰く、日本語の不自由な記者。勿論、誹謗中傷にならぬような意図のもとにつくられた言い方。メクラという言葉も禁じて眼の不自由な方と呼ばば万事上手くおさまるなどというおかしな論理を振りまいている社会を嘲笑する修辞法にのっとっている。

01_03-----

【ごくせん最終回に憤る私…】

そんな私にも、自分でもうまくいったという記事もあった。

3月20日掲載の「ごくせん」最終回を論じた記事がそれ。

その記事は、テレビマンたちの視聴者を無視した傲慢な制作姿勢を指摘したもの。高視聴率を記録した番組スタッフの慰労をかねて、テレビ局がスタッフキャストを沖縄に慰安旅行を行うのはいい。だが、そのためにとってつけたような沖縄のシーンを最終回のドラマに盛り込むことは、視聴者無視である。…と。

(http://news.livedoor.com/webapp/journal/cid_1041096/detail でごらんになれます)

アクセス数も稼ぎ、周囲の市民記者の間でも好評だったと思うが、記事には、疑問・反論・不快表明らしきトラックバックが多くついている。(これも記事をたどれば、ごらんになれます)

当時の私はホリエモンのニッポン放送株大量取得という時代の流れの中で記事を書いていた。それを端から見れば迎合者ということになると思うが、私は私なりにホリエモンがつくろうとしている世界に感情移入した。ホリエモンが逮捕されたいまとなっては、同床異夢に他ならないが、当時の私は、新しくできた市民参加型ジャーナリズムが世の中を変えると信じていたのである。そして、問題は唯一つ。そのメディアがブレイクしていないこと。この記事も私の直情の現れのひとつで、ホリエモンが放送業界に参入することによって、硬直したテレビ業界に新風が吹き込むことを期待して書いたのである。

【メディアの周辺にずっといた私】

さて、消費者は文句があればクレームをいってくるが、商品に満足しているからといって賞賛を表明するものではない。顧客満足度はその商品の売れ行きを持って勘案すべきであって、商品について寄せられた手紙やメールによってすべきではない。だが、どんなにライブドアの担当者が一日2万アクセスとうそぶいたとしても、市民記者がそれを実感することはできないから、トラックバックの毀誉褒貶に一喜一憂するのも無理からぬことだ。

勿論、コミュニケーションは相手が決めるものであり、相手がそうだったのなら仕方のないことだ。誤字脱字・誤認識の類にしても、個人の限られたリソースの中で万全を期したとしても、間違いが起こらないはずはないわけで、それぞれの批判はもっともなものもある。

だから、私は頭を下げながらも、ひるまず書き続けようと心に念じていた。批判があること。それに耐えることはどんなメディアであっても当然だと思うからだ。

だが、六本木ヒルズに陣取った市民参加型ジャーナリズムのメディア側の人間たちは違っていた。トラックバックの内容について反応し、読者に指摘されたひとつひとつについて私にメールを送ってきた。インターネットに限らず、メディアで仕事をしていれば、叩かれることに慣れっこになっていると思っていたから、彼らの行動が私には意外だった。

トラックバックで批判されつづけていた私を勇気付けてくれたのは、私の心の中に残っていたあるラジオプロデューサの言葉である。二十年ほど前、私は有名女優で世界的にも意義のある慈善活動をしているタレントをキャストしたラジオの対談番組のディレクターをしていた。番組は、彼女の活動を支援していた財界人との関係から生まれ、番組制作費はその財界人のポケットマネーから捻出されていた。

対談番組のゲストは、そのタレントと彼女の恋人の間で決定される。タレントと恋人の関係は公然の事実といってもよいもので、日本の文壇の精神的な主柱、否、ある世代にとってダンディズムの象徴のような恋人がキャスティングするゲストの質はこれ以上のものとはいえぬ、知性の宝石箱だった。

だが、その恋人は番組に登場することはない。録音の現場にも、そのまわりにも彼の存在はどこにもない。

私はそのタレントと、彼女の事務所の関係者、私が勤めていた会社のプロデューサ、そして、局のプロデューサという、10人に遥かに及ばない体制の中で、どういう番組をつくったらいいのか、もがいていた。

勿論、番組を成立させているのは、番組のホステス役をつとめるタレントの個性である。彼女の指示にそって作業をしていれば問題なく作業はすすむ。だが、それだけでいいのか、

そんなことを漠然と思っていた。

番組の最後に「番組の感想を求める告知をしていた」。番組は平日の夜 8 時からの番組だった。テレビではゴールデンタイムだが、この時間にラジオを聴いている人はどんな人たちなのだろうか。その人たちの思いやニーズを汲み取らなければ、独りよがりの番組になってしまう。

50 通ほど集まったリスナーからの手紙を読んだ私は、収録収録後のスタジオで「お手紙の内容を番組に活かしていきましょうね」と放送局の担当プロデューサーに言った。すると、意外な答えが返ってきた。

01_05

【メディアの周辺にずっといた私】その 2

「ラジオを聴いている人たちは何万人、何十万人といるんだ。だけど、ここに集まった手紙は何通だと思ukai。ボクは、番組で感想を募集していたからといっても、ごく普通のリスナーがわざわざはがきや手紙に文章を書き、切手を貼って放送局に送るっていう訳じゃない。だから、ここに集まった意見もそれを書いた人たちもかなり特殊な人たちだと思うんだ。そんなものを間に受けて番組をつくるのがいいこととは思えない」。要は、リスナーの反応など気にせず、やっていきましょうという宣言だ。この番組は当ても隆盛だった若者向けの深夜放送のようなリスナーからののはがきで出来上がっている番組ではない。だから、ベテランプロデューサーの言うことも納得ができた。

マスメディアに対して発信する個は、特殊なバイアスがかかっている。そういえば、こうして市民参加型ジャーナリズムに応募して記事を連発している自分の奇異さを我ながら感じている。それは日常生活で他と打ち解けられない原因でもある。とはいえ、私はそれを自分の誇りやアイデンティティーの源泉にもしている。

市民参加型ジャーナリズムに書き続ける私を、男性タレントに自分の髪の毛の入った手作りチョコレートを贈るストーカーチックな女の子と自分を同類にはしたくないが、そういうことだと思う。贈られてきた手作りチョコレートを何の不安ももたずに食べてしまう。そういう時代はとうに終わっているのだ。

01-06 【私もデジタルデバイドの被害者かも】

さて、それ以上に市民ジャーナリズムのメディア側の人たちには驚かされた。

それは、彼らのインターネットとの付き合いの歴史がほとんどないと言っていいほど短いことだ。当事者からの批判を恐れずに言えば、原稿用紙に万年筆で原稿を書くのがマス

コミ人の誇りである。というような旧態然とした感じ。勿論、彼らが長らく新聞メディアやその周辺の人たちであり、市民記者メディアをはじめたその動機も、既存のメディアに対する憤りだったという事実に起因するのだから、考えてみれば当然ともいえる。きっと既存のメディアの一員だった頃、インターネットを馬鹿にして、ほとんど使うことなどなかったのだろう。

一方の市民参加型ジャーナリズムにあつまった市民記者の側はどうかといえば、ニフティサーブのフォーラムの時代からパソコンに親しんできた人たちも少なからずいたと思う。あの時代からすでに十年以上が経っている。フォーラムが荒れたとき、どうすべきかを多くのパソコンユーザーたちは学んだ。だが、そんなことをメディアの側の人間は忘れ去っているだろう。

昨今のビジネスシーンでは、モバイルコンピュータを携帯し、会議や講演などのちょっとしたメモも、ノートパソコンで入力する人も珍しくない。とはいえ、当時の私は六本木タワーの38階の住人がそういう人種であることに、逆に暖かみを感じていた。

仄聞するところでは、新聞業界ではコンピュータで検索することは手抜きとして軽蔑されるそうだ。

私はそんなことに片意地を張ってないで、便利だったら使えばいいし、敵視する必要はないじゃないかと思うのだが、現実はそのらしい。足で取材するのが新聞記者だ。そういうプライドが躍変してそのようになったのだろう。

インターネットの世界でも、インターネットで検索をかけることを「ググる」と若干揶揄した言い方をする。とはいえ、「ググりもしないで、教えて君じゃだめよね」との慣用句もある。情報のすべてではないにしても、情報源のひとつとしてはとても重要だと認知されているだ。

私は、既存のメディアから六本木の最新式のビルにやってきた人たちのことを考えると、映画がテレビに取って代わられた時代のことを思い出した。当時、テレビは電気紙芝居と言われ映画人たちから軽蔑されたという。だが、そういう蔑称がひかれ者の小唄程度の意味しかないことは時代が証明している。

01_07【有頂天で傲慢な私】

私の文章が新聞広告に載ってから一週間と経たない3月30日、1日のアクセスが千件を越えたので、次のようなブログを書いた。

タイトル：

個人ブログを書き続ける意味

本文：

通常、ブログというのは、自分の興味を限定してそのことについて書くというのが、通例だと思う。たしかに私の場合は、子育てや地域、芸術やメディアなどという興味の問題の 카테고리もある。しかし、私にとって一番重要であることは、自分が消費者であるということである。

地域においても、行政サービスの消費者という立場、学校においても、学校教育というサービスの消費者の立場。

消費者のプロであることが、私をささえるアイデンティティーである。これを自嘲気味に言い換えると、素人ということになる - - -。

村上ファンドの村上さんは、声無き株主を声ある株主にしたいと言って、活動をしているそうだが、私は、消費者の声を世間に登場させることを目標にブログを書き、ライブドア PJ ニュースに記事を書いている。

消費者が意見を言うというと、企業はクレーマーかと気色ばむ。しかし、それではいけない。私はさまざまな企業に提案をしてきたが、企業側の対応はすべてがクレーム処理。私が提案したことを建設的に取り入れて製品に生かしたという例はない。

私はこれから、消費者の立場で、企業に提案していこうと思う。アクセス数が 1000 を越えるならば、一定の効果も期待できるのではないか...

もちろんライブドア PJ ニュースにも記事を書く。こちらはアクセス数は万の単位。とはいえ、ライブドアにかけないこともある。そこで、私はメディアを駆使しながら、消費者にとってのよりよき 21 世紀に尽力したい。

もちろん、すべてにおいて読者にとって魅力ある記事をめざします。よろしくお願ひもうしあげます。

すべてが終わった今(2006.01.25)、10ヶ月前のこの記事を読むと、私の有頂天さが文章の間に忍び込んでいるのがよくわかる。読む人によっては、この有頂天さが傲慢さを感じられても無理からぬことだ。

そして、そのコメント欄の6つめには、次のようなエントリーがあった。

[nanashi] [2005/03/30 09:24]

<http://ex9.2ch.net/test/read.cgi/net/1111325257/150>

ここのせいでは？

01_08【堕ちていく私】

このコメントが、私にとって事件発覚であった。このスレッドは2005年03月20日に始まっていて、すでに1000件を越えているから、2ちゃんねるにお金を払わなければ過去ログを見ることはできない。

私は、それまでにも、BBSやブログでの経験から、インターネット上での感情丸出しの論争やスパムまがいの行為に私はある程度慣れていたと思う。また、インターネットで意見を言ったり、自分の身の回りのことを記すといっても、メディア的な世界とプライベートな世界の線引きは明確にしてきたつもり。

臼井吉見の川端康成の自殺にまつわる小説の裁判沙汰も知っているし、柳美里の最近のできごともおさえている。だから、名誉毀損で訴えられるようなドキュメンタリーという手法ではなく、小説的な手法を用いていた。

勿論、その裏には小説に対しての憧れもあり、インターネットは所詮バーチャルに過ぎないという諦念もあった。一世代の大勝負ならば実名もよしだが、それ以外は勘弁だ。

そういう思いは20年以上のテレビやラジオの制作の仕事をやってきた経験から培ったもの。だから、自分の中では破綻はないと決め込んでいた。だが、今回のバッシングは、その量と質が大幅に違っていた。

02_01【名前をつぎつぎに変えていく私って誰?】

02_バッシングされる市民

【名前をつぎつぎに変えていく私って誰?】

ライブドアの市民参加型ジャーナリズムは実名を基本とする。私はスポンタというネット上の名前をそえて、中村厚一郎(スポンタ)の署名で記事を書いていった。

固定ハンドルネームというのだそうだが、私はスポンタという名前を数年前から使っている。スポンタは英語の spontaneous から来ている。k; wfh イギリス人の友人が、私のことを「日本人には珍しく、思ったことをはっきり言う人だ」と形容したことだ。

思ったことをはっきり言うことは、けっして悪口ではない。イギリスから飛行機に乗って日本に来るときに、これから自分の思いを語らない日本人たちと付き合うのだと思うとうんざりするのだが、例外として私がいる。そう夫婦で語り合ったのだと言う。

2003年4月。私はそれまでの身辺雑記や、旅行やイベントで一緒だった人たちへの写真配布の意味しかなかった自分のホームページを世田谷消費者ギルドというサイトにリニューアルした。(http://sponta0325.hp.infoseek.co.jp/scg/scg-index.html)

当時の私はまだブログの存在を知らなかった。時代はメールマガジンが流行のトップで、掲示板も認知度を高めていた。その一方でクレーム被害を懸念した企業のホームページがインターネット上でのユーザーとの情報交換を拒む事態も発生していた。

その頃の私は、otto というハンドルネームを使っていた。ドイツの飛行家・オットー・リリエントールに対する少年時代の憧れを反映したものであったが、それは、妻の友人たちがやっているメイリングリストをキッカケに考え出したもの。なんのことはない、otto とは夫であり、濡れ落ち葉族を自虐しての命名だ。

当時の私は、ブロードバンド元年でインターネット番組のディレクターをやったものの、

何の成果も出せずに残念な思いでいっぱいだった。

そして、マスコミが、「インターネットが生み出したものは、出会い系サイトによる援助交際と巨大掲示板による殺害予告、そして、集団自殺だけである」という論調に反論したい思いでいっぱいだった。第一章の冒頭で紹介した堀江本の書評も同様な思いで締めくくられている。

そういう思いにかられた私は、仕事の合間を縫って、ホームページでムーブメントを起こせないかと、いろいろな計画を練っていた。

とはいってもインターネットだけの活動ではだめ。インターネットでのキーワードがクリック&モルタルであることは知っていたから、電車賃がかからずにモルタルが可能な、地元周辺をテーマにすることにした。

地域を話題すれば、当時小学校3年生だった娘も絡んでくる。これでは実生活に支障が出ることは必至だったので、スポンタという新しいハンドルネームを採用した。

【遅いブログ・デビューの私】

その約1年後、2003年4月、ブログをはじめることにした。デザインが気に入った京都の会社のブログである。

http://blog.drecom.jp/sponata/category_6/

そして、その約1年後 2004年5月、ドブログを主なるブログ活動の場にした。
(<http://www.doblog.com/weblog/myblog/12516>)

当時も今も、私がブログで扱うことは同じ。それは自らの経験だ。

映画学校時代の友人たちとの不毛な映画論争を経て、意見を言うことの虚しさを嫌というほど味わってきた。そして、それは自分の議論の相手をしてくれた他者にとっても同じであろうという申し訳ない気持ちでいっぱいになる。ならば、私はブログでは自らの体験を語ろう。

勿論、自らの体験は自らの解釈によって文章となる。実生活では摩擦を恐れて伝えられなかったことも、ブログ上の第三者に対しては気持ちを伝えることができるかもしれない。否、自分の気持ちを伝えることが目的ではなく、私の体験や私の解釈がネット上の他者にとって有益であれば、それでいいという態度。勿論、ブログに文章をつづることでの達成感はある。コメントがつけばうれしい。だが、そういう達成感やコミュニケーションの喜びでブログを書くのではない。だから、マスコミや他のブログに自分と同じ考えや意見が載っていたらば、記事はアップしない。勿論、似たような記事になることはある。だが、そのような場合でも、情報の発信者としては、それらとの差分を明確に意識している。

インターネットでの基本的なブログの読み方は斜め読みだろう。読み手としての私が興

味を持って読めるのは、1200字が限界。かといって、情報の送り手である私の筆力では、短い文章では微妙なところを伝えることはできない。ならば、スポンタという固定ハンドルネームで書き続けることによって、私の文脈を知ってもらい、たとえ短い文章であっても理解されるような読者との関係ができればいいと考えた。

私はテレビ報道をワンコメント・ジャーナリズムだと思っている。誤解を恐れずにいえば、その行為は本質的に、ピンポンダッシュとあまり変わらない。言ったもん勝ち - - -。

だが、インタラクティブを特徴とするインターネットではそれはできない。メディア特性を活用しないやり方だ。

そういう思いを心に秘めながら、こつこつとスポンタという名前でインターネットで書き続けていた。その成果物が1日に数百というアクセス…。だがその数は、真鍋かおり (<http://manabekawori.cocolog-nifty.com/>)は勿論、デビュー前の女性タレントの写真ブログ (<http://plaza.rakuten.co.jp/yashiro0minase/>)に遠く及ばない。

02_03【怒っている私】

何故私はバッシングの受けたのか？

妻の分析によれば、バッシングの直接の発端は、私が「日本語なんてクソ食らえ」というコメントを市民記者登録者の個人ブログに残したことだという。

そのサイトは現在も見られるので、引用する。
(<http://ameblo.jp/virtual-life/entry-10001308629.html#cbox>)

日本語なんてくそくらえ。

日本語がなってないとか、PJについて批判が集中している。だが、それは本質論ではない。

私は、世の中の問題に直面して、そのことを公にして世の中を改善したいと思う人がいた場合、その人が満足な国語力を持たなかったとしても、一生懸命その人文章を理解しようと努力する。誤植や語句の間違いがあっても、そんなことは気にならない。なぜなら、そんなことよりもその人の今の感情のすべてを受けとめたいからだ。

私の英語は長島茂雄と同じレベルである。しかし、私には相手と友達になりたい。理解しあいたいという意欲がある。

だから、強引にずけずけと喋る。

私が正直辛かったのは、まわりに英語が喋れる日本人がいる場合。娘の幼馴染のドイツ人のお父さんと日本人のお母さんと知り合いになった。家族同士のお付き合いで、通訳など介することはできない。お母さんは最初のうち、私の英語に疑問符をつけていたが、私が彼女の夫と友達になりたい、理解しあいたいという気持ちを知って、次第に英語の間違いを指摘しなくなった。

もちろん、国語力があるにこしたことはない。だからといって、国語力のない人に発言を認めないという意見に私は納得できない。

もっと記事を精査せよという意見がある。これも私は納得しない。インターネットはさまざまな意見を載せるべき。だから、それを吟味するのも読者であって、まずい記事だから市民参加型ジャーナリズムを批判するというのでは、わざわざインターネットで記事を見る必要はない。

テクニックかナイフか。演技か真実か。これは芸術論であり、演技論であり、表現論である。

人が何かを表現することは、典型的な自己韜晦(自分の存在を隠すこと)の所作である。だが、そこにおいて、自分を表現したい気持ちとの格闘は必要だ。

私は、記者が記事を書く作業が自己韜晦を肯定する作業になってしまっただけはおもしろくないと思う。記事を書くことにおいても自己韜晦の世界に安住してはならない。

私は記事を書くことは、恥をかくことだと思っている。署名記事を書くことで自らを晒し、大多数の面前で恥をさらす。自分が笑われることの代償として、相手に自分の気持ちを伝えることが許されるなら、こんな幸福はない。そういう勇気が市民記者には求められていると思う。

署名記事とはそういうこと。インターネットでの書き込みが、便所の落書きと言われるのは、その内容の愚劣さではなく、情報発信者への検索性が確保されていないことだと思う。

勿論、ライブドアの市民参加型ジャーナリズムにもペンネームでの記事もあがっているが、その場合にも編集部という組織を通じて、情報発信者にトレースできる。

私はサイト上でなるべく返事を書くことにしているが、トレースできない情報発信者に対してはその範囲ではない。それは、人が名乗っているのに自分は名乗らない無礼な奴だ。という意味だけではなく、情報発信者固有の文脈の中で、その人の発言を吟味しないと意味がないと考えるからである。

とはいえ、600 に及ぶ私のブログ上の記事を読めと強制するわけではない。私は、私という文脈を知っていただくことで、誤解の可能性が減るのではない。そのように期待するからである。

書くことの勇気。

わたしは同胞の市民記者諸氏に訴えたい。

spona (2005-03-26 07:57:00)

誤植

X 誤解の可能性が減るのではない。

O 誤解の可能性が減るのではないか。

いやいや偉そうなことを書いても間違える。

どうしようもない私です。

許してください。

私のコメントの前にも、そして、その後にも、私に対する批判のコメントが踊っていた
…。

02_04*****

02_04【怒っている私】…その2

私は映像やイベントを演出するのが仕事だが、そのための文章も書く。だから、そういう業界向けの文章修行はしてきたと自負している。そして感じるのは、仕事によって文章のスタイルを変えなければ顧客を満足させられないこと。新しいメディアについても同じことがいえるのではないか。

だから、新たに書き始めた市民記者たちの国語力が批判されることは間違いだと思っている。

勿論、記者の国語力への批判は、編集能力の低さの現れでもある。編集部から私にやってくる事実誤認を指摘するクレームメールは、彼らの責任逃避の気持ちを感じさせた。

とはいえ、編集は勿論のこと、採用不採用を決める権限のある人たちを批判する気持ちに私はならなかった。

新しいメディアのあるべき文章スタイルはこれから、市民記者たちが記事の文章スタイルの多様性から導き出されるものであって、旧来のメディア観にとらわれた部外者の批判によって形成されていくものではない。そう私は考えていた。

02_05【2ちゃんにあこがれる複雑な私】

記事の内容ではなく、誤字脱字や文章力が批判されることで、市民記者たちが記事をアップしにくくなる状況。ライブドアは実名で記事を書くことを市民記者に強いていたから、このままでは書く者がいなくなる....。

その考えの裏で私は、2ちゃんねるのことを猛烈に嫉妬していた。彼らが当て字を使うのはワード検索に引っかからないための修辞法である。だが、そうして編み出された手法は、文章の形而下にとらわれることなく、その内容をダイレクトに味わうべきであり、感じるべきだということを実践している。

私のコメントは火に油を注ぐ結果となり、同僚市民記者の個人ブログを飛び越え、インターネット上のいろいろなところに飛び火していった。はじめて2ちゃんねるを覗いたとき、すでに私のハンドルネームを google で検索すると、検索結果は3万件をゆうに越えていた。

2006年1月現在でも、スポンタで検索すると1万2千件を越えている。
(<http://www.google.co.jp/search?sourceid=navclient&hl=ja&ie=UTF-8&rls=GGLD,GGLD:2005-13,GGLD:ja&q=%E3%82%B9%E3%83%9D%E3%83%B3%E3%82%BF>)

そして、そのほとんどの記事が私を嘲笑し、批判するものだった。

・2ちゃんねる

【基地外】スポンタ【ライブドアPJ】

【スポンタリズム】PJを見守るスレ【ヘタレマスタ】 これは、タイトルを変えつつ、いまでも存続している。

・はてなダイアリー

中 村 厚 一 郎 と は
(<http://d.hatena.ne.jp/keyword/%C3%E6%C2%BC%B8%FC%B0%EC%CF%BA?kid=102189>)

・Wiki

pjlinks@wiki(http://www2.atwiki.jp/pj_links/pages/29.html)

上記は当時から自己増殖を加えられているものもあり、当時の様相を必ずしも証明するものではありません。

私がバッシングされた状況は、いまでもインターネット上に散見されるからあらためてここで開陳する必要もないのかもしれないが、要約すれば次のようなものである。

- ・私が行った障害者とのバンド活動における仔細
- ・私が体罰肯定論者であるとの誤解
- ・表現者としての厳しさと社会の悪意を娘に伝えるために、インターネットでの配信動画を見せたこと

勿論、それぞれについて、私の人生の文脈の中では破綻ないできごとであって、それがいかなる反響をよぼうとも披露したことに後悔はない。

とはいえ、私の行動の表面をなぞることで私を批判し、それにより2ちゃんねらーたちが自らを肯定する道をひらいたことは事実であり、私としても反省すべきとは思った。

だが、反省の思いとはまったく別に、インターネットに綴られていく私の批判や無理解に無性に腹が立った。かといって、個人ブログ同様、各種の掲示板にコメントを書き込むと新たに火に油を注ぐことは分かっている。私はやり場のない怒りを癒すこともできぬからと、掲示板をなるべく覗かないようにつとめた。

だが、私の頭の中で自己弁護の思いが広がっていく。曰く、私が書いたことは私の真実だし、インターネット上に自分のことを晒したことに後悔はない。私は今村昌平の映画学校で表現とは自分を晒すことだとの薫陶を受けた。自分のいいところばかり晒して自分の醜いところを晒さないのは卑怯であるという美意識もある。

それまでの10ヶ月間、私がブログで500件におよぶ記事を書いてきた理由が明確にある。それは、私がそれまで実生活に関わりのある人たちに直接、心得違いや誤りを指摘してきたからだ。そうした場合のすべては、過激に反発されたり、自己弁護に走ったり、無視されるだけだった。現場の職員たちの仕事はある意味、現場での顧客のクレームを上司のレベルまで上げないことであるといっても過言ではない。そして、ほとんどの場合、その後のコミュニケーションに支障をきたした。これでは何の解決にもならない。

私はあるべき明日のことを説いているのに、それを今日への批判だとして現場の人たちから反発されるのだ。相手から反発されてしまったら、あるべき明日は訪れない。だから、私は注意深く固有名詞を書かなかった。まるで小説を書くように、自分の日常をつづったつもりでいた。だから、どんなに私が叩かれようと、それは思想信条の問題であって、表現者の勲章だというような屈折した思いもあった。

+++++

02_06【叱られる私】...その1

だが、そのように楽観視している状態ではないと妻が怒っている。

彼女は、自分のことではないから、冷静に2ちゃんねるを見続けることができた。彼女

はただでさえ忙しい年度末の丸二日間をぼうにふって、丹念にリンクをたどったり、検索をかけながら、ことの発端と全貌をつかんだ。

私は自宅の住所をインターネット上には一切掲載していない。それにも関わらず自宅住所の詳細が明らかになっていった。どうも地域系の掲示板などで、私のことを話題にして、地域の掲示板ユーザーが書き込んでいるようである。

考えてみれば当然だ。私がよく行く豆腐屋は住所を載せてある。お店の宣伝効果をねらったから当然のことである。そのお店に行くということは大体の生活圏が分かる。そうやって調べていけば、娘の通う小学校の固有名詞を知るのは簡単だ。類推していけば、わたしが話題にしている児童館も、どの児童館であるか調べるのは簡単だ。巨大掲示板には、そのようにして、私の家のおおよその場所を記した地図が張られ、娘の通う小学校のホームページのリンクが貼られた。娘の遊ぶ行動範囲もしめされる。そして、スポンタという人間は社会悪の権化だから、攻撃せよ。攻撃者を募るとの文言が躍っていた。

そのスレッドはライブドア市民ジャーナリズム関連にとどまらず、ご丁寧にも、人権擁護、児童虐待、DV、子育て支援、地域限定スレッドにまでコメントがあったり、リンクが貼られていた。

ライブドアの市民参加ジャーナリズムは、実名での投稿が原則だった。かつて既存のメディアの住人だった主宰者には、実名で記事を書くことが報道の基本であると考えていた。

一方の私は、実名で書くことで表現の幅が狭められてしまうならば、実名や固有名詞にこだわっても意味はないという意見。とはいえ、実名で書くことが誠実であるとも感じていた。そこで、実名の横にハンドルネームを添えることで、ブログの読者にも私の記事である表記にした。

勿論、市民記者メディアの読者たちが、記者である私に興味を持ってもらい、個人ブログを閲覧してくれるとうれしいという気持ちもあった。だが、その結果として現実となったのは、私の名前を手がかりにすれば、我が家を襲撃することも不可能ではないということだった。

妻が2日をかけてあさったエントリーは3万件以上。彼女は、この脅迫を警察に訴えるか、2ちゃんねるの運営者に削除依頼を出すかを案じていた。そして、事態を楽観していた私にメールを送ってきた。

++++
+++++

02_07【叱られる私】...その2

厚一郎くんへ。

ベ・ヨンジュンが自らを「公人として発言し、文を書かなくては。行動も然り」と言っています。今や厚一郎くんは「公人」になってしまったのです。ある意味メジャーになったというのでしょうか？そうかも。

であれば、貴方自身を誤解されないように、きちんと身の回りの誤解されやすいことをチェックしませんか？ ブチギレキャラは、今後厚一郎くんにはして欲しくありません。それは娘のためです。

あなたは見たくないと言うので、私が2chをチェックしたところ、次のことをやってほしいと思います。

1.mixi(他のこの種のものからの脱会も検討してください)を脱会できますか？脱会しないのなら、年をさば読むなんてアホなことやめましょう。貴方はそのままの年齢でもとても素敵です。若いです。自分が生きてきた年月を自負してください。私は更年期障害の婆と書かれています、
「じゃあ実際会って見る？惚れんなよー」とフンと思っていますよ。

後注：芸能人が年齢にサバを読むように、ミクシーで、私は年齢を詐称していた。相手が想定する年齢によってコミュニケーションの質が変わることを言い訳にしておく...

気がついていると思うけど、あの関係者から内輪話が漏れているようです。

2.アフェリエイトサイトは、どうも削除されたようですが、厚一郎くんが自分でやったの？あなたのアフェリエイトサイトの詳細は以下のようです。こうして見ると「ウイルス」が沢山やってくるのは当然という意見に納得しました。

消された sponta 違法広告サイトのメタタグキーワード

mp3, 壁紙, yahoo, スクリーンセーバー, アイドル, 藤原紀香, linux, チャット, 優香, 着メロ, ftp, アダルト, FF8, コギャル, 占い, 下着, 地図, ICQ, アイコン, 出会い, 水着, midi, フォント, 制服, 広末涼子

<title> お金が手に入る情報 ほんまかいな? </title>

こんなの登録してた日にゃーそりゃスパムもウイルスもバンバン来るでしょ

*****以上 2ch から。

後注：これは私にはまったく見覚えのないことで、メタタグのキーワードなどをいじるほどの技術はない。キーワードとして広末や紀香にパワーがあるのは理解するが、FF8

や ICQ など、単語の意味するところも分からない。

どうも個人ブログで論争をしたときの人に関わっていて、その議論に加わっていた私もこのバッシングと無縁ではないことが分かりました。

後注：1年ほど前に個人ブログにおいて、紙オムツに関する論争が私のブログで展開したことがある。私のブログの目的は、自分の娘の子育てを通じた経験をブログで語ることで、世の中に散見する子育ての問題を提示することだった。だから、一番最初のエントリーは、「こどもを怒るな、叱れ」という子育て論は間違っているとの指摘だった。コメント上での論争は、10人以上のネットワーカーたちの中で続けられ、賛成派・反対派・傍観派に分かれて議論が続いた。そして、反対派の中には、私のブログ以外のBBSやメールで情報交換をしあう人たちもいたようだ。

3. アドレス変えますか？

4. ブログの引越しも検討しませんか？

過去の記事は財産ですが、ここまで誤解されて引用されてしまうと、将来に影響が出てしまいます。ドブログのおかしな連中がアホなことを2chでやっているのなら、ドブログから引越しませんか？ 私もちよっと考えます。

5 教えてgooの貴方のコメントを削除できますか？ あなたは真面目に回答していますが、部分的に悪用されています。

後注：教えてgooの恋愛のカテゴリーで、高校生の恋愛問題についてスポンタの名前で回答をしていたことがある。教えてgooの質問者たちはとても誠実に自らの悩みを打ち明けていたので、スポンタの名前で回答をしていた。その誠実さに、あいまいに答えている回答があると、それでは質問者たちの誠実に答えていないとの思いがひろがって、かなりの回答をしていた時期があった。

もっとも、これに関してはあなたがあまりにも偏ったカテゴリーに回答しているので、面白がられていると思います。

6. エッチサイトへ行くのはやめましょうね。何だかしらないけど、貴方がエッチサイトへ行った記録まで2chにのっかっています。これって、ある種のハッカーみたいなのかしらね？ 恐らく貴方のアドレスから、記録を全部一生懸命拾ったみたいですが。あなたのアドレスからのアクセス記録がどうやったら調べられるのかは？ですが、出来る人には出来るのでしょ。

後注：インターネットのエッチ部門のアクセスランキングのトップ10に入るような、と

ても健全な?無料サイトを覗いていたのです。映画学校時代、ピンク映画でアルバイトをしたこともあるし、ピンク映画から一般映画の映画監督に上りつめた親しい友人もいる。私にとっては、エスカレータで手鏡を操るよりも、きわめて正常な男性の行為なのであって、そういうことで性的なりビドーをガス抜きしておいたほうが、植草教授のような事件を起こさないですむ。そういう考えであって、一方では、そういうことでりビドーをエスカレートさせる場合もある…。自分の場合は前者であると信じたい。ただ、まァ、それを妻から指摘されたのは、ちと辛い。…返答に困った。

+++++

02_07【叱られる私】…その3

今回の2ch事件は、

- 1 .ドブログの紙おしめ論争にはじまった。反対派(オフでも交流がある人たちらしい)が、「スポンタ攻撃隊」を作った。この団体が1つ。
- 2 .mixi 関係の人がPJジャーナリストの未採用記事投稿者をそそのかした。この団体が1つ。
- 3 .この2chにスレッドが一番最初にたったのが、3月22日。
この日のライブドアニュースが何かのきっかけになった。その結果、1, 2以外の人々が扇動している。この団体が1つ。
合計3団体です。スレッドに対する、レスは1000を越えています。

ということで、あまり知りたくないことでしょうが、あのベヨンジュンは自分へのバッシング記事も冷静に読んでしっかりと判断しています。あなたもそうあって欲しいと思います。見たくない、知りたくないではなく、自分の文章の書き方の工夫も考慮に入れて欲しいです。あなたはとても素晴らしいのですから。もったいないです。

関係者のひとりが、バッシングのきっかけになった心情を書いていました。いかにコピペします。

**

長くなるので、私があのコメントを残すきっかけとなった原因を箇条書きで書いてみます。

- 1 .sponta氏がページビューアップの目的で、記事を新着で上げまくっていたことを誇らしげにしていて、さらにまたやる予告をしていた
- 2 知人がsponta氏の記事にトラックバックしたにもかかわらず、その記事に対してsponta氏を擁護するがごとく意見を述べていた(しかも必死に)のは妻だった
- 3 .どの記事も『自分の記事はすべて読んでいる人』に対して書いているようで、1記事で

前後関係がさっぱりわからなかった

4.書いてあるテーマについては興味はあったものの、非常にステレオタイプでそれを読者に押し付けるような書き方をしていた

5.ページビューアップで得意になってあのポータルの運営を左右させる存在になるということを、あちこちのBlogのコメントに残しまくっていた

6. ついでに自分の文章作成能力が高いと自慢し、コメントを残しまくっていた

...というのが重なって、つい、ぷちっときてしまったんです。(爆) あほなことしたな、と自分でも思います。

が、彼に対して不信感を持っていた人たちが結構我慢をしていたということもあの件で、わかったので、まあ、よかったのかなと。(よかったのか?)」

この人も、今の事態を見てちょっと焦っているはずです。だって、私達家族の家から、あなたの仕事先まで侵害し始めた人がいるからです。それこそ人権侵害。犯罪に加担している状態になりつつあるからです。つまり、興味をそその内容なんだけど、理解できない。それで質問したのだけど、論点がずれている。

この点をちゃんとわかってよ。もう少し、分かりやすい文章を書こうよ。他の記事にコメントするのはやめようよ。恐怖に感じているようだからね。

以上、長いですが、ちゃんと読んでください。

+++++

02_09【容疑者になった私】

ホリエモンを逮捕した検察庁と同じことを自分のメールボックスでやってメールを採録した。

あのとき、妻のメールにしっかりと眼を通したかどうかはあまり憶えていない。なぜなら、現実の世界で彼女が私に訴えてくる危機感の方がもっと大きかったからだ。

彼女は、インターネットを探っていき、私専門の過去ログの保存庫を発見したという。

なぜ、そんなことになったのか。

スポンタは犯罪者である。だから、後に事件を起こした時の証拠として提出できるように残しているというのだ。当事者の私にしてみれば濡れ衣も甚だしいが、彼らにとってみれば、社会貢献であり、善意の行動なのだ。

彼らは、何人もの同行の士を募って、連絡網をつくったり、役割分担をして作業をしていた。掲示板の投稿者の中には、他の投稿者の記事に対して書きすぎだと指摘するものもいたし、私に向かって、家族を守れよ。と、促すものもあった。そして、2ちゃんねるの削除依頼の方法を検討もしてくれた。だが、私も妻もブログを運営しているので、削除依頼が却下される可能性が高いという。

警察に訴えるかベキか。その半年前に外国人の相談に乗り、一緒に地元の警察におもむき、警察官の真摯な対応に接していたから、警察への不審感はわたしたち夫婦にはなかった。その後のモナーに関するエイベックス経営者へのネット上の脅迫が事件化された事例の後ならば、当時の私のケースでも警察が介入してもおかしくない。そういうレベルの脅迫まがいの文章がインターネット上に踊っていたのだ。

しかし、わたしたちは、いま警察に相談に行っても気休めにはなるかもしれないが、実効はともなわない。逆に警察官に自宅周辺をパトロールしてもらうことのほうが、地域で生活する自分たちにとってマイナスだと思えた。

バッシングにあった次の日。私はフリーランスのシステムエンジニアたちを束ねた組合の事務所を訪れた。2ちゃんねるバッシングを受けている私が何をすべきなのか。そのことをインターネットに詳しい旧知の知り合いに尋ねたかったのだ。

「概ね好意的な書き込みじゃないですか」

前もって電話をしておいたシステムエンジニア氏は、にやりとしながら言った。

彼の発言は、私の自尊心を刺激した。なぜなら、彼の発言が私の市民記者活動に対して受けた、当事者・関係者以外の初めての社会的な発言だったからだ。

+++++

【インターネットについて考える私】

インターネットの弱点にバーチャル性があると指摘された時代があった。

それを克服するために、クリック&モルタルという標語も出来た。ネット上で素晴らしいシステムを構築しても、リアルな世界がないと信頼性を持たずに、ビジネスとしてヒットしないこと。

その数年前には、バーチャルモールという架空商店街(インターネットショッピングモール)をビジュアル的に表現するムーブメントもあった。それらは、三次元CG制作会社の技術披露の場であって、スポンサーやユーザーに利益ももたらさなかった。数年後を経たずして、フラッシュのブームが来る。ここでも、目新しさはあったものの、ウェブデザイナーやホームページ制作会社の受注金額を高めるだけ。その評価はgoogleというシンプルな画面構成の評価が上がることに比例して収束する。結果として、スポンサーやユーザーに

は利益ももたらさなかった。

インターネット上の e-ラーニングに関しても同じことがいえる。ウェブ上に展開する有料 e-ラーニングサイトの惨憺たる状況は眼を覆うばかり。これも、e-ラーニング制作会社とソフト会社の一時的のぎ的な利益を生み出したにすぎない。

とはいえ、最近では企業教育などで e-ラーニングは堅調な伸びを示している。その理由は、研修と試験という実体をともなった企業の人事考課システムのひとつとして採用されたからである。スポンサーである全国的に展開する大企業にとっては、移動費用を削減するメリットがあったし、ユーザーともいえる社員にとっても、人事システムの公平性を期待できたし、労働時間の効率的活用も実現された。勿論、教育専門業者たちも新しいビジネスフィールドを得ることができた。これなどは、クリック&モルタルの思想が活きた事例だと思う。

考えてみれば、インターネットの技術革新と時代の変遷は、広告やマスコミが爛り立てる技術革新が単に技術の進歩でしかなく、それが社会にとっての有用性とはまったく関係がないことを証明する歴史だった。

だから、現在の地上波放送の再編成や映像や音声を使ったマルチメディアにしても、所詮やっていることはバーチャルモールと同じで、将来を約束されているわけではない。

そういえば、テレビ番組をつくっていたときは勿論、ラジオ番組をつくっていたとき、仕事と関係のない知人や友人たちに自分が関わった番組の話題をすると、「あ、それ知っています」とか、「観たことがあります」という反応が返ってきた。20 代の私はそのことがこの上もなくうれしかったし、自分のアイデンティティーをくすぐる出来事だった。舞台をやっているときは観客の数は限られる。それでも、街中にポスターが貼られるし、何よりも観客たちが足を運んでくれることで、手ごたえや充足感を得ることができた。

それに対してインターネットはどうなんだろう。

2000 年は東京メタリック通信が目されるなどブロードバンド元年といわれた。インターネットがビジネスになる時代がようやく到来したと言われていたがまだまだ ISDN の時代。ほとんどは ADSL であり、光のインフラが整備されつつある時代だった。その年の秋、私はインプレス TV でインターネットのストリーミング番組を作っていたが、関係者以外に番組をインターネットで見ている人はいなかった。そして、私が「やっているよ。観てね」と行った場合でも、「みたよ」といつてくれる人はほとんどいなかったし、感想を述べる人など皆無だった。

当時のストリーミングは操作も複雑で、パソコンに与える負荷も大きかったから「見たい人」でも見れなかった人も多かったのは事実である。とはいえ、高度情報化時代というキーワードは死語になり、インターネットの時代が来ていたと思う。

それなのに、そのメディアでの発信者が感じる社会からの手ごたえ・感じる浸透度とはとても脆弱であり、それまでのものに対して変わっていないと思えた。それはどんなにインターネットが社会に浸透しようとも、インターネットがいかにマスを志向しようとも、

ブルのメディアに変わらない厳然たる事実。インターネットとマスメディアの間には、桁違いのスケールサイズの乖離がある。そして、それは劇場の熱気のように、集まる人たちは少なくとも、その熱気が世の中に広がっていくことを感じさせないものようだった。

+++++

02_11【助けて。と叫ぶ私】

「いやぁ、たいへんなんですよ...」

自分のさまざまな思いをのせて短いセリフをはいたつもりだったが、その通りに伝わったのだろうか。とりあえず、自分のうろたえを隠すのが大人の態度でしょ。との思いから、私も苦笑いで返した。そして、深刻な悩みについて、打ち明けていった。

彼は、プログラミングの仕事の合間に、スポンタで検索をかけ、いくつかの2ちゃんねるのスレッドを斜め読みしただけのようだった。

「何で、あんなに叩かれているんですか？」

彼は叩かれている事実は把握しているが、叩かれている原因については分かっていないようだ。

その仔細を説明するには、500 を上まわる私のブログの記事を読んでもらわなければならないし、それぞれ口頭では伝わらない内容だからブログで書き始めたのだ。私は口を濁すしかなかった。

「別に2ちゃんねると言っても悪い奴らじゃないし、きちんと説明をすれば納得してもらえることもある。私はそういう事例を見てきましたから」

私はさまざまな経緯から、2ちゃんねるで発言することは火に油を注ぐことにしかならないと確信していた。ほとんど無名の私が同業と言うのはばかられるが、シナリオライターの野沢尚氏がインターネットでの議論により精神的にまいってしまい将来を嘱望されながらも自殺してしまったことも記憶に新しい。

「降臨というんですよ」

私はコアな2ちゃんねる愛好家ではないから、2ちゃんねるについての質問を彼に浴びせた。そもそも、2ちゃんねるブラウザというのも分からない。モリタポというのもどういうことなのか。私は、「逝ってよろしい」「お前もな」という屈折したダンディズムに共感していたが、それは文学としての文脈であって、情報工学的にはほとんど無知だった。

それにそのとき、そして今でも、ほんとうのところを言えば、私は私に対する罵詈雑言のすべてを把握している訳ではない。あくまでも妻からの間接的なものであり、彼女なりのやさしさと冷たさのフィルターが加味されたものだった。その意味では私は当事者でありながらも、当事者である資格を持っていなかった。そして、私のことを心配そうにして

くれた彼の同僚である女性プログラマーに私の妻の相談に乗ってくれることをお願いして、事務所を去った。

女性プログラマーは親身になって、妻の話を聞いてくれ、相談に乗ってくれた。

+++++

02_12【消せない過去を取り繕う私】

その結果に行ったのは、個人ブログにおける関連記事の削除。プロフィールの削除。ホームページ上のアドレスの変更。掲示板の閉鎖。等々である。勿論、そういう作業を行っても、検索エンジンにキャッシュは残るから、不毛な作業でもある。そして、何よりも私専用のデータベースが、私の知らないところに完成しているのだから意味がないのかもしれない。

ただ、その行動には明確な意味づけがあった。どんなに批判や抽象が起きようと、メディアの信頼性がなければ、その言説は評価されないということ。つまり、噂の真相を飾った記事が4大新聞の紙面を飾ることはないし、そういうところの発言を引用することは、その引用者の信用も汚すということ。その文脈で、私がブログの中で意見を述べた対象の人たちが批判を浴びることを阻止したかったのだ。偉そうに言えば、罪を憎んで人を憎まずということか。なかなかそういうことの実践は難しいし、私のそういう微妙なニュアンスが伝わっていなかったのがすべての原因でもあるのだが...

あれから1年近く経ったいるが、いまだに我が家は襲撃されていない。もちろん、インターネット上の私に関する記載もその多くが残っているし、ある意味状況は変わっていないのかもしれない。だが、今になって考えれば、何万という記事の多さに比べれば、書いた人間の数は比べるほどでもない程少ないと理解できる。どんなにヒートアップしたといっても、所詮インターネット上のバーチャルなできごとであると、気を静めることもできる。

だが、その一方で、当時も、そして今でも、インターネットに犯行予告があることは珍しいことではない。そう気を引き締めて日々を暮らすべきなのだろう。

03_市民参加型ジャーナリズムの誕生

【ホリエモン好きな私】

私は、ブロードバンド元年の2000年から週刊アスキーを読んでいる。インターネットを扱った週刊誌に週刊アスキーがある。私とその雑誌をはじめて読んだのは、ストリーミング番組「インターネットウォッチプラス」のディレクターをしていた頃だ。インターネットウォッチはインプレスTVというサイトで発信されていた。勿論、その仕事は麹町のインプレスのビルで行われていた。インプレスでは、インターネットマガジンという月刊誌を発行していたが、通信技術に詳しくない私にとっては敷居が高かったので、エンターテインメント性を加味した週刊アスキーは、わたしのインターネットへの扉をひらく入門書として機能していた。

その雑誌に歌田明弘氏が連載する仮想報道というコラムがある。(彼は現在、そのコラムを歌田明弘の『地球村の事件簿』というブログに採録している。
<http://blog.a-utada.com/chikyu/>)

2005年ライブドアのニッポン放送株大量取得騒動のまっ最中、彼はひとつのサイトを話題にした。それは、2月7日にライブドアPJニュース上に発せられた文章だった。もちろん、それは、ライブドアのメディア戦略の一環として市民参加型ジャーナリズムがあるという指摘である。

当時、ホリエモンは、メディアに対して挑発的な発言を繰り返していた。

ニュースなんて買えばいいし、市民から安く集めればいい。そして、アクセス数によって記事の人気ランキングで、メディアにニュースを並べることがいいと主張する。

新聞出身のテレビコメンテータたちは、それでは調査報道は成り立たない。と反論する。

その流れの中で、オウム報道で有名になったジャーナリストの江川紹子さんが、前年末にホリエモンにインタビューした感想を自らのホームページにアップしていた。

http://www.egawashoko.com/menu4/contents/02_1_data_40.html

そのあたりの事情はガ島通信(2005.02.23付)でも、うかがうことができる。
(<http://blog.livedoor.jp/zentoku2246/archives/14914413.html>)

パブリックジャーナリスト宣言。

(http://news.livedoor.com/webapp/journal/cid_976981/detail)

いまでもその文章を検索できるが、その小項目を拾ってみる。

- ・市民参加型ジャーナリズムの出現
- ・『マスコミ』というジャーナリズム界の異質者

- ・「プレスはパブリックのもの」
- ・パブリック・ジャーナリズムというレコンキスタ
- ・パブリック・ジャーナリスト宣言

当時も、そして今も、私はジャーナリストというものにある種の胡散臭さを感じている。その直接の原因は、インプレス TV での出来事である。企業の新製品発表会やイベントに記者と同時取材をすることが多々あった。映像ではすべてを語ることは難しい場合が多かったし、その映像を受けてスタジオでフォローするのでは臨場感に欠ける。そこで、私は記者たちにカメラの前に立って、自分の感想を述べて欲しいと依頼した。

だが、そのほとんどは拒絶された。私は、その理由を、取材対象への意見を明確にしないことが客観報道であり、職業モラルに反することという意識が働いていたのではないかと推察する。まあ、現場で取材協力を拒否されたディレクターの私怨といってしまうまでもういいが...

とはいえ、今話題のライブドアである。研修費用の 8000 円はちと辛い、回転ドアが男の子を死亡させた六本木ヒルズもまだ見ていない。社会科見学と考えればけっして高価ではない。ライブドアという旬の企業と知り合いになれば、インプレス TV のときのような仕事の発注が舞い込むかもしれない。その営業経費とも捉えることもできる。

私は、ライブドアに 8000 円を振り込み、パブリック・ジャーナリスト研修に参加した。

+++++

03_02【六本木ヒルズ森タワー38 階な私...2005.03.05】

3 月とはいえ、薄ら寒い朝だった。六本木ヒルズのビルは入館手続きが厄介である。入館ゲートに程近い喫茶店の前に立っていると、私と同じく研修目的に集まったであろう人たちとであった。

その感想は、その直後にアップされた私の最初の市民記者としての記事で今も読むことができる。(http://news.livedoor.com/webapp/journal/cid_1020849/detail)

その中で、今も色あせず、そのときの私の気持ちを語っているのは次の一節である。「インターネットの未来を構築したい人間と、今の従来のメディアの腐敗を許せなくなった人が手を組む。それがとりあえず 2005 年 3 月のパブリック・ジャーナリズムということなのだと思うのです」

編集部様へ：筆者が書いた記事とはいえ、全文引用に関しては、引用元(ライブドア PJ)への転載許諾が必要かと思いますが、数行の引用については、その限りではないという判断です。

そして、最後を次のように締めくくっている。

「問題はビジネスとして成立するかではない。いかに個として 21 世紀に生き、社会とどう関わっていくかだ。21 世紀は傍観者であることを許さない。そういう厳しい時代がやってきているのだと思う」

そう書いたのには事情がある。研修時の質疑応答では、記事に関する責任の一切をライブドアは保障しないし、記事に対する報酬も、ライブドアマネーで支払われる。ページビューが伸びたとしても、その金額は 1000 円以下。これでは、セミプロのライターたちが市民記者として記事をアップするはずもない。そのことを知った多くの参加者は落胆の色を隠さなかった。そして、ライブドアが提示したジャーナリスト規約の同意書にもサインをせず、会場を去っていた。

+++++

03_03【人の話を聞かない年寄りな私】

当日の講師は、先のパブリックジャーナリスト宣言を出した P 氏である。P 氏は、アメリカの通信社で活動をした後、東京大学の大学院で新聞学に関わっているそうだ。

もうひとりの講師は、ライブドアニュースセンターのセンター長である S 氏。

ライブドアニュースのトップは、通信社の写真部デスクをつとめあげた佐藤氏で、そのもつとで、ニュースセンター長補佐の肩書きを持つ P 氏が市民記者メディアを担当しているようだ。P 氏は、大学との関係もきれいでないようだから、ライブドアの社員でないのかもしれない。

講義ではまず、新潟中越地震のときに市民ブログ「たむぎやま日日新聞」が、被災した十日町新聞に代わって、地域紙としての役割を果たしたことを紹介した。

つづいて、パブリックジャーナリストの定義やシステムに関する説明がつづく…。

人に何かを学ぶことから離れている私にとって、一日をかけての講義は苦痛だった。隣の席には体育大学の講師という青年が坐っていたが、彼を相手にノートに講師の論理に突っ込みを入れて溜飲を下げていた。

そのときのノートを見ると、私が一番に感じた疑問が書いてあった。

「パブリック・ジャーナリズムというが、パブリックとは、パブの…、という意味だろう。それを日本語では公のと翻訳するのもかもしれないが、所詮イギリスのパブのということだ。つまり、パブで繰り広げられたのは市民ではなく、パブに行くだけの余剰資金を持ち、生活時間にも余裕のあった都市市民の…、という意味しかもたない。

その意味では、ライブドアが提供するパブリック・ジャーナリズムにおけるパブリックという概念も、8000 円を払う経済力があつた人たちのという意味しかもたぬのではないか。

すべての市民を記者にするという志があつてこそ、パブリックのタイトルを冠する資格

があるのだろうが、果たしてこのメディアにパブリックを名乗る資格があるのか…。

もうひとつの疑問は、ジャーナリズムについてである。

市民とは自らを語るものであって、他者を語る市民がいるとしたら、それは不誠実である。と。もし、市民が他者を語るとしても、それは他者の悲しみさえも、自分の悲しみとする市民の心根の暖かさゆえのもの。

取材対象との独立などという禁欲主義で市民たちが世の中を語るようになれば、たとえ市民たちが中立を意図して行ったとしても、それは読者にとっては傲慢に感じられるだろう。

大学で新聞学を学んできた講師の論点は、私のそうした思いとはまったくかみ合わない。彼が主眼たる論点は、権力の検閲機関としての機能がジャーナリズムに期待されているが、それが果たされていないことだった。彼は、14世紀のグーテンベルグの活版印刷の発明からジャーナリズムと言論、そして、新聞、報道に関する変遷をかいつまんで紹介していった。

そして、ジャーナリストの目的や行動原則、追うべき責任、守るべき規律を紹介することで結論づけた。

その日に私が印象付けられたものは、ジャーナリストにはいかなるものからも独立することが重要であること(不偏不党の原則)。そして、どんな場合でも真実であらねばならぬということ(事実性の原則)。もちろん、独立性の保持は難しく、記者であることは否応もなくひとつの立場であるのだから、究極の意味では客観報道はありえないとの補足も加えていた。

+++++

03_04【ジャーナリズムについて考える私】

私はあの時、ライブドアの会議室の一番後ろの席で、つべこべと考えていた。今村昌平の映画学校にいたときも授業でドキュメンタリー映画についての講義を受けた。

当時「マザーテレサとその世界」で国内のドキュメンタリー映画の各賞を独占していた千葉茂樹監督である。

そのときに読んだ松本俊夫の「映像の発見」は、いまも心のバイブルのひとつであると思う。

そして、そのときにも話題に上った飢餓に瀕した少年の死を待つ、ハゲタカの写真のことを思う。このカメラマンは高名な賞を受賞しながらも、社会的な批判を浴び、人生を台無しにした。後日、このエピソードについて湯川さんに尋ねたことがある。そのときの湯川さんの答えは明快だった。私はジャーナリストである前に市民でありたい。だから、ま

ず、その少年を助けます。その行為の中で写真を撮るかもしれないし、それは分からない。

ジャーナリストの良心を指摘するのは重要だろう。だが、市民記者なのである。市民として恥じない言動をすれば、何もジャーナリストとしてどうかなどということはたいしたことではないのだ。逆にいえば、ジャーナリストとして活躍をしたとしても、それが市民として恥ずべき行為であるなら、社会的に糾弾されるのである。そして、何よりも、その対価をライブドアは支払うつもりがないと、同意書で宣言していたのだった。

一番後ろの席で、批判的に講義を眺めていた私と違って、最前列にすわり、黒いテングロンハットと赤い服装で目立つ人がいた。KNN という個人メディア活動をしている神田敏晶氏(<http://www.knn.com/>)だ。

私はインプレス TV で仕事をしているとき、ストリーミング番組の提供を神田さんが行っていたので、その存在を番組プロデューサーを通じて知っていたので、親近感があった。一時期、週刊アスキーに、セグウェイの逮捕騒動から獄中日記を披露した後、消息知れずになっていたから、ご無事で何よりとの感慨もあった。

すでに自分で情報を発信し、プレスルームではある程度の知名度を持つ神田氏が市民記者になろうとしている。既存のメディアで活動するプロのジャーナリストの多くが、神田氏のように個人の立場で記事を書き始めたら、日本はどうなる…。

そう考えたら身震いがした。

だが、そんなことは土台無理な話だったのだ。プロ記者が別メディアで記事をあげるには、所属会社の許可が必要になる。一方、ライブドアは市民に実名で書くことを要求している。

とすれば、たとえプロ記者が市民参加型ジャーナリズムで筆をとろうとも、彼の所属する会社の存在を侵さない無難な記事しか書くことはできないだろう。それではプロ記者がわざわざ市民参加型ジャーナリズムで記事を書く理由もない。

また、社会を揺るがすような記事がそこから生まれるはずもない。

後述することにもなるだろうが、私はインターネットの特徴は、個を切り刻んでいくことだと思っている。

かつて、田中康夫長野県知事は、県庁の職員の人たちは、ふつうのお父さんたちといえ、それはとても素晴らしい人たちの集まりなのだが、県の職員になるとおかしくなると語っていた。

雪印は不祥事を繰り返し、社会的な糾弾を受け、グループ全体の再編成を余儀なくされた。私はあの頃、こどもを連れて、横浜の「こどもの国」を訪れたことがあった。そこには、乳搾りの体験コーナーがあり、その近くにアイスクリームを売っている売店があった。採りたての牛乳でつくったアイスクリームを期待して頬張った私は、その期待を大きく裏切られた。妻とこどもはその直前に、千葉のマザー牧場で採りたての牛乳でつくったアイスクリームを食べていて、私と同じ感想をもらした。どちらにしても、デパートの地下で

立ち食いするようなアイスクリームとは比べるべくもない最低な出来だったのだ。

そのとき私は次のように思った。

あの大企業・雪印の社員は沢山首都圏には住んでいるはず。ならば、彼らの一人もこの場所でこのアイスクリームを食べなかったとは考えにくい。きっと、彼らは自分の会社が作ったアイスクリームのまずさを理解しながらも、自らの社員としての安逸を優先して口を閉ざしたのだ。

もし、個人を切り刻んでいくことができたらどうだろう。

つまり、雪印の社員であることは、雪印製品の生産者でもあるが、雪印製品の消費者でもある。だから、本来は、生産者であることと、消費者であることは矛盾しないのだ。

落語では、夜鳴き蕎麦の主が、仕事のすえに腹が減ったと嘆いた。すると、知り合いが、商売ものの蕎麦を食べればいいじゃないかと、言う。すかさず、その主は、「こんな汚いものが食べれるかい」と…。

そのようなものであってはならぬのだ。

そして、乳製品の専門家である雪印の職員の舌は、アイスクリームのまずさの原因を分析的に感じ取り、その生産工程での不備を指摘するはずだ。

+++++

03_05【何はともあれ、私は私】

講義は次第に具体的な話にすすんでいく。

取材の仕方。記事作成の基本。魅力的な記事の作り方。写真の撮り方、創作実習など、内容は盛り沢山。あっという間に 37 階の六本木ヒルズからみる景色は暗闇が支配していた。

私は、昼食や休憩をとともにし机をとともにした参加者と、市民記者として登録するかどうか意見を述べ合った。

企業の IT 研修を個人事業主としておこなっている 30 代の男性は、経済的にメリットはないし、すべてが自己責任というのも気になるから登録しないという。

20 代後半と思われる体育大学の講師の頑丈な体つきの若者は異業種の空間を楽しんでいる趣だった。彼は登録するのかもしれない。

もう一人、ご主人が開業医という品のいい奥様は、気分を害するでもなく、私の感情露な言説を受け流してくれていたが、彼女は登録するのだろうか。もし登録したとしても、記事を犯すような危険なマネはしないのかもしれないと感じた。

+++++

03_06【問いただす私】

研修で私はふたつの質問をしている。ひとつは、インタビューをしたときに、取材対象への謝礼品はないのかということ。私はテレビやラジオ、インターネットなどさまざまな媒体の仕事を経験してきたから、取材対象に出演料を支払ったり、交通費などの経費を負担した経験がある。予算がない場合でも、放送局のボールペンやタオルなどノベルティーを渡すことは当然のことと思っていた。

事実、インプレスTVのときも、インプレスのマークの入ったストラップを取材で協力してくれた人に配っていた。

私はその質問をすると、ふたりの講師は眼を吊り上げた。それはジャーナリストとして一番やってはいけないことであり、何よりも報道の中立性を脅かす行為なのだ。と。

二つ目は写真に関する質問だった。

ライブドアの受付の壁にはライブドアの社名のロゴが打ち込まれている。そして、待合スペースの傍らには、等身大のホリエモンが弥生会計のパッケージを持ったサインがある。

効果的な写真にするためには、ホリエモンのサインを受付の前に移動して撮影するのがベストだと思うのだが、それは市民記者としてやっていいのだろうか。と。

この質問も、通信社で写真記者として長年のキャリアを持つ講師から、そんな当たり前のことを聞くなどとも言うような口調で一笑に付された。

この章の冒頭を彩っている写真は、そのとき、ジャーナリストとしてはけっしてやってはいけないことを犯して撮影したものだ。堀江氏が逮捕され、ライブドア本社にすることができなくなった今、ホリエモンのサインは、ケンタのおじさんのように、ライブドアへの来訪者を迎えてくれる。ホリエモン逮捕を報じるテレビニュースをあきれるほど見たが、さすがにどの民放テレビ局も、私のようにジャーナリストとしてのコードを踏み外していないようだ。

研修のスケジュールがすべて終了したあと、数百円の会費を集めての懇親会がひらかれた。缶ビールと乾き物だけの立食形式だ。研修の半分ぐらいの人数は残っていただろうか。

研修の最後に、記事の責任のありかと報酬について厳しい質問をしていたフリーライターとおぼしき人は当然のように参加していない。ただ、私の隣の席に坐った登録しないと明言したIT研修の講師氏は、気持ちを切り替えたのだろうか名刺交換会として参加していた。

+++++

03_07【インターネットビジネスを考える私】

とりあえず、8000 円を無駄にしたくない理由から、同意書にサインをしてきてはいた。

現場で活発な質疑応答をしていたフリーライターと思しき人たちと同じく、私も経済的なメリットがないものに原稿を書き続けるような余裕はない。ただ、伊藤穰一(Joi 伊藤)氏の言葉が引っかかっていた。

インターネットで儲けようと思っても上手くいかない。だが、辛抱よくインターネットユーザーに奉仕しつづけていれば、インターネットはそれを見殺しにはしない。そして、ある日突然、ご褒美をもらえる。そんなものだ、と。

たしかにそうだ。それまでのインターネットの歴史でビジネスとして成功したものがどれほどあるのだろうか。その年にインターネットの広告費の全体がラジオの広告費を上回ったという。個人でもアフィリエイト広告での成功譚が書店を賑わしている。だが、インターネットのビジネスで成立しているものの殆どが広告という、他の媒体での利益を食い尽くすビジネスモデルだった。

もうひとつ気にかかっていたのは、市民参加型ジャーナリズムという概念はともかくも、それをインターネット新聞という形でやることに意味はあるのかという問題だった。

私がインプレス TV でやっていたのは、インプレスの人気サイト「インターネットウォッチ」(<http://internet.watch.impress.co.jp/>)のストリーミング版であった。インターネットウォッチというサイトは、数名の記者がインターネット上で情報を捜していく。このサイトの魅力は、インターネットをこよなく愛するインプレス社の記者の選択眼の高さと、情報元とリンクを張ることによって、読者もダイレクトにニュースソースにたどり着くことができることだ。つまり、インターネットウォッチというサイトは、新聞でありながらも検索エンジンでもあるのだ。

つまり、新聞がコンテンツだとすると、インターネットウォッチはコンテンツでありながら、インデックス機能も兼ね備えている。同様なサイトには All About(<http://allabout.co.jp/>)というのがある。これは、アメリカの About.com の日本版である。日本語のアバウトには、いいかげんという語意があり、当初は All About Japan と名乗っていたと記憶するが、テレビコマーシャルの他、大量宣伝をした現在は All About になっている。

すでにご存知だろうが、All About の特色は 380 余名におよぶガイドの存在である。サイトのトップページには、チャンネルインデックスと称して、生活、仕事、趣味、人生と 4 つのカテゴリーがある。そのいずれかをクリックすると、さらに詳細な項目になる。たとえば、生活 グルメ・クッキング フレンチ フレンチの専門家のガイドのページという具合。ガイドは專業ではなく、いわばその分野に詳しい市民ボランティアがゲストに情報を提供するという感じ。市民といっても、アマチュアである必要はなく、その分野の専門知識があれば、プロフェSSIONナルでもかまわないようだ。

2000年にインプレスTVをやっていたときには、All About Japanのガイドの募集とオーディションの報道がなされたと記憶している。ガイドには応募者が殺到し、ガイドになるのはかなりの狭き門だったと記憶している。そして、その報酬もそれだけで生活を成立させるのは無理としても、副業のこずかい稼ぎとしては恥ずかしくない金額だったと思う。それを2006年のいま調べてみると、啞然とした。ガイドの報酬がなんと月額3万円になっている。それにアクセス解析などによる歩合給が加算されるといっても、それではボランティアもいいところだ。そして、ガイドの記事の内容も、情報サーチャーのサイトというイメージからは明確にコンセプトの変更がなされていて、個人ブログとの違いがほとんど見当たらない。

2000年頃からの5年余の間に何があったのかは分からないが、さまざまな試行錯誤の末の形である。そして、それは個人ブログの勃興の中で変質した結果であることは確かだろう。

さて、そのとき私の頭の中にあったのは、検索ワードによる自動検索の筆頭であるgoogle。そして、Yahooなどのポータルサイトの存在である。不勉強な私は、そのときまだ市民メディア・インターネット市民新聞のJANJAN(<http://www.janjan.jp/>)の存在を知らなかった。

そして、合理的に考えて行き着く先は、市民記者を名乗ることに何の意味があるのだろうか。いまの個人ブログだって、フレームを工夫すればシームレスで市民記者メディアとつながることができる。と。

だが、私の結論に一番の影響を与えたのは、テレビで流されるホリエモンに関するニュースだ。そういえば、ライブドアのニュースサイトは1日に何万というアクセス数を稼いでいるという。私の個人ブログのアクセス数は、数百だ。ということは、2桁違う人たちに自分の意見や主張を伝えることができるのだ。ならば、書いてみよう。

確かに、講師はインターネットに詳しくないようだから、前途多難かもしれないけれど、それだけにインターネットで騙されるようなことはないだろう。

私は講師あてにメールを打った。この章の冒頭で紹介した研修の内容をレポートしたものだ。記事のアップは3月08日。研修日が3月5日だから、心の中の葛藤に関わらず、ほとんど即決で記事を書き始めたことになる。

+++++

03_08【市民記者の私】

2005年3月、私は38本の記事をライブドアPJニュースにアップしている。そのことはpj_links@Wiki(http://www2.atwiki.jp/pj_links/pages/29.html)で追認することができる。

私は、そのサイトに私は一度も書き込んだことはないし、私とは一切関係ない。だから、そこに書いていることを私は否定も肯定もしない。そこに書き込んだインターネットユーザーに映った私という意味しかない。だから、ここに紹介したからと言って、私がそのサイトをオーソライズしたというニュアンスは一切ない。

記事のほとんどは、真っ最中だったホリエモン騒動のテレビ報道に対する私の無邪気な反応である。私はあのムーブメントのことをホリエモン革命と呼んでいた。堀江氏本人だけでなく、ライブドアの役員たちも逮捕された今、わたしなりの過去を清算しなければならないのかもしれない。とはいえ、M&A や株取引の仔細について、あのときも今も私は門外漢であり、言うべき言葉はない。

いま冷静に記事のラインアップを眺めていると、言論人ごっこ・新聞人ごっこをしていたと感じる部分もある。

テレビが登場したとき、言論界の重鎮・大宅壮一氏は「一億総白痴化」と評したという。

それはそれで至言なのだろうが、あの大宅壮一氏にしても、新しいメディアの登場に対して否定論を展開するばかりで、その有効活用について、論じていないのは不備である。

もし、大宅氏が、テレビ映像のアングルが記者の肉眼と比べると桁外れに狭いこと。

具体的には、記者のアングルは上下 360 度×左右 360 の全天周だが、ビデオカメラのアングルはそれぞれ 30 度程であり被写界深度の浅い、マイク特性によって音声も極めて限定的な情報だ。

そして、そのような機材の特性により、仕方なく限定的に切り取られた情報は、カメラマンやディレクターたちの極めて恣意的なものである。

問題は、テレビがそのようなバイアスのかかったものであるにも関わらず、あたかも現場にいるかのような錯覚を視聴者にもたらすからだ。もし、そのようなことを大宅氏があのときに指摘したら、その十数年後のできごととはあったのだろうか。

1972 年。ときの総理、佐藤栄作氏は、「テレビは真実を伝えてくれるので私は直接テレビから国民の皆さんにご挨拶する。テレビはどこだ？ 偏向的新聞は大嫌いだ」と発言したという。そして、反発した新聞記者達が退席後、一人テレビカメラに向かって演説を行った。私は、閑散とした記者席に向かって退陣表明記者会見をする佐藤栄作総理の写真を憶えているが、きっと総理の傲慢な態度に反発した新聞の写真だろう。

当時中学生だった私は、そのときのテレビ映像を憶えていない。だから想像の範囲でしかないのだけれど、首相の撮影をずっとやってきたビデオカメラマンなら、いつも撮影の邪魔をされて迷惑に思っていた新聞記者たちがいなくなって、せいせいした気分になっていただろう。とすれば、ビデオカメラマンが選ぶアングルは、総理のアップ、もしくはバストアップでしかありえない。

プレスルームに複数のカメラがあれば、ガランとした記者席を捉えたアングルも選択されるだろうが、野球中継ならともかく、首相の会見に2カメ・スイッチングをすることなど、あるはずもない。

もし、そのような陣容でプレスルームの映像が御茶の間の観客に紹介されていたなら、一国の首相が権力の座にのぼりつめ、そして、彼の傲慢さから、まるで裸の王様のようになって退陣を余儀なくされたことが、より印象づけられたと思う。

きっと、大宅氏の「一億総白痴化」発言で、プライドを傷つけられていたテレビマンたちが、首相の言葉を追い風にして、意気揚々と、首相のアップの映像を垂れ流しにしていたに違いない。

だから、私はインターネットの登場に際して、その登場を批判するような言説は好まない。勿論、それは無名人だから、時代に抗っても意味がないという理由もある。だが、それ以上に、あるべきインターネットの姿、利用法というものを提示することが重要であり、必要であると感じているからである。

私がライブドアPJに応募した理由も実はそこにある。私は、業界の片隅ながらも、イーコマースの現場や、ストリーミング番組の現場にいた。そこで感じていたのは、世の中が「インターネットは出会い系サイトと自殺系サイトなどの社会悪しか社会に提供していない」という批判。

そんなことはない。生まれっばなしのイノベーションを育てることもせず、ほったらかしにした社会のほうが悪い。勿論、私もその社会の一員だから、何かの機会があれば、インターネットのあるべき方向について、また、インターネットの弱点の克服法についての助言を行いたいと願っていたのだ。

勿論、それは私の考えが正しくて、世の中が間違っているということを声高にいいたいのではない。問題があるのなら、それを嘆いてばかりいないで、積極的に行動しようよ。と、訴えたかったからである。

+++++

03_09【私は市民記者なのか、それとも市民ブロガーなのか】

ライブドアに支払ったのは8000円だが、一本の記事は数百円。とてもじゃないが、仕事として成立しない状況は明らかだったが、私は仕事の合間を縫って記事をあげることにした。ジョイ伊藤氏の言うとおり、最初から見返りを求めるのは、ご都合主義だと思えたからだ。

とはいえ、研修で多くの参加者が指摘していた問題が解決しているわけではない。記事によって起きた問題の責任はすべて記者個人がとる。それは、論争の火種になるような部門に近寄らなければ済む。だが、とりあえずの問題は実名で記事をあげることだ。

私は表現の世界に身をおくことは、道端ですっぽんぽんで立つことだと思っている。いまは、岡本かの子や林芙美子などの時代より、世の中は寛容になっているから、偉そうなことを言ったところでたいしたことはない。

ただ、同僚の市民記者がどうどうとペンネームであることを宣言して記事をアップしたことに違和感をおぼえた。

「男の魅力はカネか」と題した、2005年3月12日づけの記事である。
(http://news.livedoor.com/webapp/journal/cid_1028368/detail)

たしかに記事はよくかけている。堀江氏の書評のきっかけに夫婦の会話をもってくるころなど、私の手法とも共通点がある - - -。だが、原則、実名ではなかったのか。私がメディアに問いただすと、その市民記者は会社を営んでいて、実名で記事を書く仕事に影響がでるから、ペンネームを許したのだという答えが返ってきた。

そんなことが…。背水の陣ともいえる切実な思いで記事をあげていたから、なんだか拍子抜けした思いだ。

いま市民記者なりたての頃の記事を振り返って読むと、鼻白んでしまう。それまでブログにこつこつと書いてきた思いが市民記者メディアという発表の場を得て、濁流のように流れ出してしまった。そんな感じ。もちろん、自分の人生を振り返るとは、そういうやるせなさとは無縁ではない。そして、その行為は、私をバッシングした人たちが感じたなんとなく嫌な感じを追認することでもあった。

一番の問題は、自分をさしおいて他者を評することが、傲慢な態度であること。だから、自分のことを捨象して批評記事を書くとは反発を食らう。職業記者は、生活のためという大義名分があるから、その嫌悪感は許されるものかもしれないが、市民記者においては、読者の反発をもちにかぶってしまう。それは、「逝ってよろしい」との言に、「お前もな」と入れてしまうと、反論の余地がないということだ。

この場合の市民記者の立場は読者としての立場であり、それは容易に肯定できる。そして、ライブドアの市民記者という立場だから、ホリエモンのことを賛美するのも、迎合主義という批判も受けるけれど、何故この本を取り立てて論じるのかという理由も分かりやすい。

+++++

03_10【ライブドアをかたってはならぬ市民記者の私】

パブリック・ジャーナリスト規約の条文には、次のような文言がある。
第6条(その他の遵守事項)

(2)ライブドア・ニュースの内容を無断転載しないこと。

(3)パブリック・ジャーナリストはあくまでも個人ストリンガー・ジャーナリストであり、又、ライブドアは、パブリック・ジャーナリストの取材報道に関する事項の責任を一切負わない。したがって、取材活動にあたっては、ライブドア・ニュースの肩書きで行わないこと。

この条文をつくったであろうP氏が、自分の記事をアップする前に自分の個人ブログに記事をアップさせていたことを私は後に知ることになる。初出掲載でないものが、メディアにとってコンテンツの価値を下げることを知っている私は唖然とした。初出掲載が自分の個人ブログであれば、ライブドアニュースに採用された自分の記事の転載にライブドアの許可を取る必要はない。それは、編集権を持つものの特権なのだろうか。自分を自分でオーソライズすることは当然。だから、記事をオーソライズするメディアの側にいる人間には、その価値を見失ってしまう。その結果、P氏は記事は個人ブログで初出掲載でも問題なしと思ったのかもしれない。一方、市民記者というメディアの外側にいる私は、ライブドアニュースのオーソライズの力を認めていたので、律儀にも初出掲載を続けていたのだ。

編集部さま：「この条文...続けていたのだ」が、P氏への名誉毀損と細君の指摘あり、筆者はそう考えていませんが、ご検討お願いします。

ライブドアニュースを語って取材してはならない。これは会社の責任逃れで生まれた条文かもしれない。だが、市民記者に突きつけられたこの厳しさこそ、市民記者の誇り源泉でもある。この一文があるゆえに、何物にも拘束されぬ個が存在できるともいえるのだ。諧謔的な言い方ではあるが、この項目においてのみ、市民記者は職業ジャーナリストに対して優越性を持てるのである。

人生とはおかしなものだ。小学生のとき、NHKの「海外特派員ニュース」を見て、ジャーナリストにあこがれていた私が、四半世紀以上経ってジャーナリストを批判している。もちろんそれは、脆弱な市民記者の立場を擁護するために、無理やりこじつけた結論かもしれない。だが、自分の頭の中で次の言葉が浮かんだとき、理由なき反抗は、明らかなる確信に変化した。

「取材対象との焦点距離を必要とするジャーナリズムは、市民の感情とあいられない。なぜなら、他人の悲しみさえも、自分の悲しみとするのが、善良なる市民だからだ」

具体的な事柄との心理的・時間的距離がないと、まともな表現ができないのは、メディアに限ったことではない。ふつうの生活をしている人たちも同じだ。だが、市民参加型メディアの場合は、対象との距離が重要な要素となる。つまり、対象との距離が近ければ近いほど記事は魅力的になる。だが、自分に起きた出来事の場合、あまりにに近すぎれば独

りよがりを感じられるだろうし、他者の場合は、そこまで近寄る権利がお前にはあるのか。いけずうずうしい奴との批判をあびる。

情報をリリースすることの社会的な重要性や社会貢献と自らに論理武装をしたところで、現場の記者を動かすものは、個人的な好奇心だったり、功名心だったりする。そういうものを隠したり、一定の制限を加えるのが良質なプロ記者ということになく。逆にいえば、そういうものがない人は記者失格だし、読者にとっては、そうした記者たちの巧まずしての情熱が記事の魅力だったりするのだ。

03_11

そのことを私に考えさせたのは、4月25日に関西在住の市民記者があげた JR 福知山線脱線事故の写真記事だ。

(http://news.livedoor.com/webapp/journal/cid_1101698/picture_detail)

たぶん、この市民記者は現場近くに住んでいたか、通りかかったのだろう。マスコミの一員でもないのに、現場で救助活動に協力するでもなく写真を撮っていたのだから、やじ馬でしかない。カメラポジションから判断すると、関係者以外立ち入り禁止であろう場所に立ち入っていることも容易に判断できる。

事故の悲惨さを前にして、人間は何かの衝動にかられる。自分の目の前に起きていることの重要性を感じ、一刻も早くそれを情報として社会に発信したいと思うのは当然のことだと思う。彼の情報で自分の身の回りの人の安否を尋ねるキッカケになったと思うし、その後の JR 西日本への批判を見れば、いち早く社会悪を指摘したことにもなるだろう。

私は大西氏が、やじ馬が写真をとっているという冷たい視線に負けずにデジカメで写真をとった勇気を讃える。それは間違いのないし、それが市民記者のやることなただけ…。という思いが滓のように残っている。

だが、阪神淡路大地震のときのテレビ報道を思うとあれでよかったのだと思えてくる。

東京で暮らしている私は、あの大惨事をいまもって実感できていない。あの前に神戸に行ったこともあるし、最近も大阪に出張でいく。だが、あのとき、6000 余名の人命が失われたことがいまだに実感できない。その理由を考えると、ビルが壊れたり、道路が破壊されたり、避難場所で苦しい生活をしている人たちの映像がテレビを賑わせていたが、犠牲者の葬儀に関わる映像があまり紹介されなかったことが原因ではないかと思われてくる。

勿論、壊れたビルや現在も苦しんでいる人たちなど、魅力的で刺激的な映像がたくさんあったことも理由のひとつだろう。だが、犠牲者への追悼の気持ちや遺族や参列者への配慮から、関西地区のメディアや現場のカメラマンが自分たちのコミュニティーのそうした現場を取材することをためらったからではないかと思うのだ。

私は、北海道南西沖地震のときの奥尻島の映像を鮮烈に憶えている。それは、フェリーボートに乗せられた何十という棺である。きっと火葬能力の低い孤島では火葬することができず、かといってそのままでは遺体が腐乱するので、北海道本島に運ぶのだろう。その映像をテレビで見た私は、たくさんの方が亡くなったことを実感できたし、きわめて深い鎮魂の思いにかられたのだ。

問題は、取材者にとって、取材対象が他者なのかどうか。自他の境界領域はどこにあるのかということだと思う。

毎年開催される御巢鷹の尾根での追悼行事の取材映像にしても、取材者の側に追悼の思いはあるにしても、それは他者への思いであって、自らのコミュニティーの一員に対しての思いではないのではないかと、思うのである。

そして、はやくも結論を言ってしまうえば、取材対象を自分の境界領域の内側と認識してしまったら、ジャーナリストは取材対象を批判したり、告発できなくなる。そういうジレンマが、ジャーナリストとジャーナリズムをとりまいて存在する。

一方、市民とはその逆で、自らを、それも自嘲を交えながら謙虚に語るのが、善良なる者のやり方だ。他人様を批判するなんてもってのほか。コロナブトップが政治家や世相を批判して拍手喝采をえていたのは、遙か昔だ。

いまは、たとえ他人様を批判しても「...切腹っ」と、自虐ネタをつけないと受け入れられない。なかには、ヒロシのように自虐だけの芸人もいる。なんとも、やさしい時代なのだ。

03_12【マスコミごっこをする市民記者の私】

批判や告発とは離れたところで市民記者活動をすれば、こんなに楽しいことはない。いま考えるとマスコミごっこといってもよいだろう。

私のマスコミごっこの最初は、アパッチけんこと中本賢氏に取材したことだ。
(http://news.livedoor.com/webapp/journal/cid_1052577/detail)

自嘲気味に語ってしまったが、当時の私にはある思いがあった。それは、市民記者活動でもここまでできるんだということ、同僚の市民記者たちに具体的に示したかったのである。

取材交渉において、ライブドアニュースの肩書きをつかってはならない。取材に関して取材対象に謝礼を支払うことはタブー。そんな状況であっても、取材は可能でなのだ。

インターネットによって、誰とでも出会うことが可能。それは社会的に知名度を持つ個人や団体ほど確かだ。

私はビジネスの営業について、よく言うのだが、コネクションを駆使して出会ったとしても、その人は、その分野で日本でトップの人である可能性は低い。だが、インターネットで調べれば、その分野の日本のトップクラスの人と簡単に会うことができる。価格コムがやってみせてくれたことは、きわめて汎用性が高いのだ。

それを援用すれば、インターネットでなら一流の人と会うことができる。たしかに一流の人を使うとギャランティーは高い。でも、一流の人は経済的には困っていないから、自らの意図を説明し納得してもらえたならば、ノーギャラでも協力が得られる。多くの方は社会的な立場で仕事をしているから、社会貢献をいつも心の中においている。だから、本人が社会貢献のひとつであると認めてくれるならば、協力はえられるのである。

市民記者がその立場で単独取材は可能。そのことを実証して、市民記者たちに自らの可能性を示す。そのために、コネクションも何もない中本賢氏の所属プロダクションに、私はアポイントの電話をした。

所属プロダクションは本人に連絡をとり、ラジオ・ニッポンでの生放送終了後に取材をすることになった。

PJ インタビュー：中本賢 3/26～/27

(http://news.livedoor.com/webapp/journal/cid__1052577/detail)

取材場所が決まったとき、私はうかつにもニッポン放送とラジオ・ニッポンを混同していた。ラジオ・ニッポンは、横浜関内にあるラジオ局で、フジテレビの親会社であるニッポン放送とは関係がない。彼がもしニッポン放送で番組を持っていて、その局舎内でインタビューができたらもっと衝撃的だったろう。

謝礼金もノベルティーもない私は、この日のために拵えた自家製スモークチーズを手土産に横浜・関内に向かった。

記事は6本書いたが、後半の2本は没になったので、個人ブログに載せることにした。

(<http://blog.livedoor.jp/sponta0325/archives/2005-04.html#20050408>)

我が家の数百メートル近くを多摩川が流れている。中本氏は、松竹映画「釣りばか日誌」のレギュラーメンバーとして知られる俳優である。

彼は俳優以外の活動、ガサガサという河川の自然観察活動をテレビ朝日の「ニュースステーション」で紹介されたことでも知られている。私が住む地域の環境調査の団体のイベントが彼を招待していたのが直接の契機かもしれない。そのイベントに私は参加できなかったので面識はなかったが、彼の活動に興味を持っていたのだ。

03_03【市民記者の私は自らを語るべき】

とはいえ、市民記者が本来語るべきは、自らの市民としての生活である。他者を論じることは既存のメディアに任せておけばよい。

その思いから生まれたのが次の記事である。小学校4年の三学期を終えた娘が持ってきた通信簿に関する、親としての素直な疑問を記事にしたためた。

通信簿のつうしんぼ 3/25

(http://news.livedoor.com/webapp/journal/cid__1050378/detail)

記事の論点はふたつだ。ひとつめは国語の評点の分かりにくさ。評点が分かりにくいと、対策を立てにくい。

ああせい、こうせいといたい父親としては、まったくもって不都合なのだ。

そうひとつは芸術系の教科について。

図工の評点の第一に、「学習の準備や後片付けができ、表現することに意欲をもつことができる」とあること。

これなどは、授業の円滑な運営が、教員の主たる仕事であるという明確に表示だと思えてならないこと。

それに協力した子どもだけが、高い評価をあたえる。これでは教育効果どころか、子どもどうしの人間関係にも悪影響を及ぼしかねないし、そもそも芸術教育とは無関係のことが主眼におかれているかと呆れるばかりと、指摘した。

通信簿のつうしんぼと題したのは、子どもたちが評価の対象になっているならば、教える側の教員たちも評価の対象になってしかるべきだということ。同じ教室の空気を共有するものどうし、御互いが切磋琢磨してこそ、すばらしい教育が成立するということを伝えたかったのだ。

そして、これは自分の生活を綴ったものではないが、以下の記事をあげた。

5年生から特殊学級を勧められています... 3/29

(http://news.livedoor.com/webapp/journal/cid__1056782/detail)

この記事は、「教えて goo」の次の質問を題材に書いたもの。

質問：五年生から特別学級を勧められています・・・。

(<http://oshiete1.goo.ne.jp/kotaeru.php3?q=1229019>)

小学校4年生のこどもを持つ父親が、新学期から息子を特別学級に行くようにすすめられた悩みを、教えてgooに相談していた。寄せられた回答の始めのほうのものは、教育関係の専門家や精神医療やカウンセラーなどの専門家に任せるべきであるという回答が続出していた。

勿論、それは当然のことだろうし、それに従うのも親としてのつとめかもしれない。だが、親だからできることはもうひとつあると思えてならなかった。つまり、合理性などというのではなく、愛するものとして、自分の息子のためにジタバタする。端から見れば馬鹿げてみえることも、親としてどうどうと行う。それが親の情愛であると指摘したかったのです。

専門家などというが、プロとは対象を他者(お客様)として扱うことである。そのようなものに、愛する家族の人生を託してしまっているのか。

私は、家庭内暴力の息子を撲殺した父親のことを思い出していた。彼も、その妻も東大卒だった。インテリの硬直した思考は、アマチュアである自分の考えよりも、専門家の意見を正しいと信じ、その言葉に盲目的に従ったのだろう。

勿論、その過程は、自分の一番愛しい人間のうちの一人を殺すことに至ったのだから、それまでの筋道は平板ではないに決まっている。だが、父親としての最大の愛の表現が、殺すことだったというのは、悩み苦しんできた父親を思うと、あまりに残酷で、あまりに悲しい出来事と思えてならない。

そして、そういうことを引き起こした専門家たちが反省したのかといえば、どうだろうか。

勿論、その事件に直接関わった人たちは、自分の非力を恥じ、断腸の思いでいるかもしれない。だが、その同僚たちや、その仕事に携わる人たちにまで、そういう反省が広がっていったのかといえば、そんなことはないと思う。

なぜなら、そういう事実があったことを多くの人は憶えていないし、そういう無責任な専門家たちの姿を私の日常においても散見するからだ。

同じことを繰り返してはならない。私は、執拗に教えてgooに回答を繰り返した。そして、自らの問題を多くの人に共有することで、同じ悩みをもつ人たちの役に立とうと思う質問者の思いを痛切に感じて、ライブドアにも記事をアップしたのだ。

既存のジャーナリストたちが自らの職業的規範やモラルの存在を鼓舞するけれども、それはあくまでも他者を論じる傲慢さの対価としてのもの。そして、そのスキルにしても、どれほどのものがあるのかといえばはなはだ疑問である。

たとえ癌の専門医の知識だとしても、癌を宣告され、自らの死と向き合いながら必至に病気のことを調べた患者の知識にはそうそう勝てるものではない。というのが私の論理だ。

記事がアップされたのが3月29日。その翌日が、忘れもしないバッシング発覚の3月30日である。

04_01

04_市民参加型ジャーナリズムの揺らぎ

【裏文化から表にしみ出してきた2ちゃんねる現象】

2ちゃんねるの独身男性板(いた)で、電車男とエルメスが出合ったのは、2004年3月14日。その内容が2ちゃんねるをはみ出して、インターネット上で話題になりはじめたの

はその年のゴールデンウィーク明けぐらいだろう。

(<http://allabout.co.jp/computer/comicalsite/closeup/CU20040607A/>)

それが新潮社から出版されたのが、同じ年の秋の10月22日。

同じく東宝で主演に中谷美紀をエルメスに迎えて、映画化され封切られたのが、翌年の6月4日。

人気絶頂の女優・伊藤美咲がエルメスに扮して、フジテレビのドル箱枠の月9ドラマとして登場したのが、映画封切り直後ともいえる7月から9月である。

私は、一連の電車男の他メディアへの変換が、一般社会の社会的認知度を2ちゃんねるがに獲得させたと考えている。

2ちゃんねるのことを最初に知ったのは、佐賀のパスジャック犯が犯行声明をした時

(2000.05.03)だから、すでに5年の歳月が流れている。

私がバッシングを受けた当時は、電車男の本が出版されただけの時期で、2ちゃんねるはまだアンダーグラウンドのメディアとして存在していたと思う。

それが、電車男ブームの登場で一変する。

それまで裏文化として、社会からある種のバイアスを持って眺められていたものに、スポットライトが当たるとともに、既存メディアの住人たちも、それをオフビジネスで眺めて、ひそひそ噂話をしているだけでなく、オンビジネスの場でも、堂々と話題にする習慣になってきたのだ。

その結果でもあり原因でもあるのが、電車男の出版であり、映画化であり、テレビシリーズ化だといえる。

今後、ギョーカイ人たちの行動は、若い人たちを原動力にまたたくまに社会に浸透していくだろう。すでに、人に隠れて2ちゃんねるを見たり、その話題をすることがある種のタブーになっていた時代は終わっているのかもしれない。

数年前にさかのぼるが、私はある団体の広報宣伝戦略に関わっていた。そのとき2ちゃんねるの書き込みを、ターゲットの考えを知るためのリファレンスのひとつとした。無論、鵜呑みにはしないが、考えるヒントにはできる。

もっとも、これは私に限ったことではない。一流企業が2ちゃんねるの運営者に抗議したり、訴訟を起こすのは、企業が2ちゃんねるの存在とその社会性を認めていることの証しとも考えることができるからだ。

とはいえ、2ちゃんねるの運営者は、インターネット上のコミュニケーションで世の中を盛り上げて、社会を活性化をするためにこのメディアを創設したのであって、アンダーグラウンドな言説の巣窟にするつもりはまったくなかっただろう。

私のバッシングのステージになったのは、実は2ちゃんねるだけではない。それが、Wikiであり、はてなである。

04_02

【Wiki、そして、はてなの中の私】

pj_links @Wiki 中村厚一郎

(http://www2.atwiki.jp/pj_links/pages/29.html)

ネット上の IT 用語辞典によれば、wiki は次のように定義される。

Wiki : 電子掲示板(BBS)に近いシステムだが、BBS が時系列に「発言」を積み重ねるコミュニケーションツールであるのに対し、Wiki は、内容の編集・削除が自由なこと、基本的に時系列の整理を行わないことから、誰もが自由に「記事」を書き加えていくコラボレーションツール、もしくはグループウェアと言える。

私は、それまで Wiki をコミュニケーションツールとして使ったことはなかった。知っていたのは、ウィキペディアである。

(<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A1%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%9A%E3%83%BC%E3%82%B8>)

これは、無名の市民たちが、それぞれの知を結集することで、百科事典をつくろうとしたものだ。

このムーブメントの思想は、リナックスを生み出したものと同じ。リーナス・トーバルスはオープンソースの考え方を提唱し、その考え方に共感した世界中の技術者たちが協力して、新しい OS を作り出した。

日本のパソコンやインターネットに関心の低い人たちには知名度は低いようだが、もともアメリカに対する対抗心や、マイクロソフトに対する不信感の強いヨーロッパでは、すでに無視できない勢力になっている。

無名の人たちが報酬も省みずに、力をあわせてひとつのものを作る。そんな素晴らしいことはない。勿論、試行錯誤の状態がネット上にあるわけだし、無責任のメディアだといってしまうえばそれまでかもしれない。だが、企業がつくる OS でもバグやバージョンアップは日常茶飯事なのだから、五十歩百歩だと思う。

私自身、ウィキペディアで検索をして、その内容の充実さにほれほれとすることもある。

私が親しんできたウィキペディアと、自分が槍玉に挙げられているステージの@Wiki は同じ思想のもとにつくられたツールである

心のどこかでは、よくどこまで調べてくれたとの思いがあることを否定しない。だが、その行動の背後にあるものは何だろうか。と、考える。

そして、はてなダイアリーに書かれた私に対する怒りの文章を見る。

「はてな」は、「へんな会社のつくり方」という本も出している、ベンチャー系の会社である。「はてな」と聞いて、2ちゃんねるのようなアンダーグラウンドなメディアだと感じる人は少ないだろう。青少年へのフィルタリングのリストに入っているかどうか確認していないが、まずは入っていないだろう。

とすれば、そういう表文化なところで糾弾されている私は、悪の権化であり、社会的に抹殺されなければならない。

その直情を次の記事に見る。

[障害]ライブドア記者中村厚一郎を糾弾する！

(<http://d.hatena.ne.jp/rir6/20050329/1113813530>)

この記事を書いた人はきっと2ちゃんねるなどから、さまざまな情報を得て、それをはてなで開示することで、自らの正義をつらぬいたのだと思う。そのようにして裏の情報が表に流出してくる。それ自体は悪いことではないし、建築構造書偽造のアネハ事件の告発の裏にも、そういう力が働いたと聞く。

上記は直情型の記述だが、ネット上に私が披露した経歴と糾弾すべき記事を並べることで、私の全人格をさとすように否定しているものもある。

はてなダイアリー 中村厚一郎とは

(<http://d.hatena.ne.jp/keyword/%C3%E6%C2%BC%B8%FC%B0%EC%CF%BA?kid=102189>)

いま、この400日間のアクセス統計を見ると、2005年4月に突然バッシングが起こったことがよく分かる。

(<http://d.hatena.ne.jp/keywordstats/%c3%e6%c2%bc%b8%fc%b0%ec%cf%ba?type=accessrank&range=400>)

04_03

【市民記者の責任のありかは私】

「この原稿はパブリック・ジャーナリストとしての独立した私見であることをまず断っておく。」

ライブドアの市民記者として、そう書くことをなかば義務づけられて記事を書いてきた人間は、バッシングされた悩みを誰とも共有できない。

妻のように、深く2ちゃんねるやその他を読み込んだ人間ならともかく、私のバッシングの表層だけを見ればそれほどの被害でもないと思えることもできる。だから、アクセス数の量や言及の数で、うらやましく感じることも仕方のないことかもしれない。

ただ、あの時に私と私の家族においていたことは、その約半年後に起き、犯人が逮捕された事件とまったく同じ。音楽出版社が2ちゃんねるの人気キャラクター「モナー」そっくりのキャラクターを勝手に商品登録したことが発覚すると、ネット上で話題になった。2ちゃんねらーの中には過激な人たちもいて、襲撃予告をするものがあった。

音楽出版社の社長はガードマンを雇う経済力もあったし、社会的注目度もあったから、警察に捜査を依頼できた。

無名のわたしたちは途方に暮れながら、ただただおびえながらちごこまっている他なかった。

04_04【記事に手を加えられても、没になってもへっちゃらな市民記者の私】

私が記事を書いた当初は、P氏に直接メールを送っていたが、市民記者としての正式登録を経て、投稿システムを使うことになった。

市民記者それぞれに配布されたIDとパスワードを使って、記事の管理画面をひらき、投稿画面に行く。

記事を書き終わったら、記事のカテゴリを選択して、確認ボタンをクリック。すると、確認画面に行く。

私の記事の分量は、どうしても長くなってしまっていた。記事の分量は800字程度とされていたが、P氏自身がその決まりを守っていなかったから、その決まりは、有名無実といえた。だが、さまざまな記者がエントリーをあげるにつれ、そうも言ってもらえない状況になり、私も、最大でも1200字程度を目安に記事を書くようにするとともに、それを越える場合は、連続記事の体裁をとった。

確認画面でエントリーを確かめてから、投稿ボタンをクリックする。すると、投稿した記事は自分の記事管理のページにアップされる。

投稿直後の記事は、リストにはチェック前という表記がある。投稿後時間が経過していても、チェック前という表示がある場合は、市民記者は記事に再編集を加えることもできるし、投稿を取りやめることもできる。

だが、いったん掲載・非掲載の決定が下ってしまうと、市民記者は、編集することも記事をリストから削除することもできない。

スタート当時の私は、30本近くになるまで、投稿記事が非掲載になることはなかった。だから、このシステムへの不満はあまりなかった。だが、いったん非掲載の断が下されると、自分が投稿した記事を見ることもできないというのは、なんとも理不尽に思えてきた。

もっとも、当時の私にそれほどの憤りがあったわけではない。なによりライブドアニュースセンターは、私の試験答案を鑑別する試験官であって、受験生が試験官を批判することは不遜であることは勿論、自らの受験生としての立場を危うくすると感じていたからだ。

私の記念すべき没原稿の第一作は、3月24日に投稿した「ホリエモン、今度はソフトバンクに敗れる?」というものだった。

手元に残っていた記事のドキュメントを採録する。この原稿が没記事に値するのか、没ならばその理由は何なのか、考えてもらうのも一興だろう。

記事タイトル：ホリエモン、今度はソフトバンクに敗れる。

本文：プロ野球参入で楽天に敗れたホリエモンが、フジテレビ買収でもソフトバンクに敗れる---。そういう記事が翌朝の新聞に踊ることは容易に想像できる。だが、私はそうは思わない。これでインターネットの世界は確実に変わっていく。一度動き出したムーブメントはもう止まることはできない。

...と、思っていたら、新聞には、「白馬の騎士かトロイの木馬か」という記事が踊っている。

ライブドアがニッポン放送を獲得しただけで大成功という意見がある。ライブドアがニッポン放送に参画することにより、ライブドアはインターネット事業者としてはじめて記者クラブに加盟することができる。そのことでいまのインターネット報道のあり方が大きく変わる。と。

今回はライブドアのニッポン放送の株式大量取得をキッカケに、ソフトバンクがフジテレビに請われることで筆頭株主になった。

ソフトバンクとはYAHOOである。インターネットの一番手であるYAHOOも著作権などの問題で一人前扱いされないインターネットの現状に不満を持っているはず。その現状をフジテレビとYAHOOが知恵を絞って改善していくならば、インターネットにおけるエンタテイメント系情報発信のネックだった各種の著作権問題が整備されていくだろう。

それらの問題にライブドアは直接手を下すことなく、ソフトバンクとYAHOOが格闘してくれることになる。

そこで出来上がるビジネスモデルを利用して、ライブドアも躍進が期待できる。

情報ポータルとしてフジテレビを利用することは難しくなったのかもしれない。しかし、インターネットへうねり始めた潮流の中では、たいしたことはない。

逆に、フジテレビに見習って、インターネット会社と協力関係を築こうという地上波テレビ局のムーブメントがおきないとも限らない。

投資会社のトップは、これは投資行為であって、孫氏とは関係ないと言っている。金融投

資関係に詳しくない私は、その背景が分からない。ということなんだろう。
また、新聞やテレビで勉強をしなければならない。【了】

04_05【市民記者交流 BBS が開設される】

4月4日、市民記者どうしの意見交流のための掲示板がつくられた。市民記者として登録した人には、共通の ID とパスワードを入れれば誰でも閲覧と書き込みが可能である。

個別の ID のログインでなければ、荒れることも予想はできた。勿論、匿名で投稿する人もいたが、あまり問題はなかったと思う。

ただ、運営者を怒らせたのは、そういう問題ではない。BBS がの情報は勿論、BBS 内が存在することさえ市民記者登録者意外に漏らさないで欲しい、運営者の願いが聞き入れられなかったのだ。

それまでのライブドア PJ ニュースから市民記者の連絡事項はメールによってなされていた。だが、メールで投稿に関する決まりなどを送られても、プリントアウトするのであれば、メールの山の中に埋没してしまう。

その点、BBS に留意事項がまとめて書いてあれば、気になったときに参照することも可能だ。当時はまだ、記事の投稿数が二百を越えた頃だったから、メディアの側も私のような市民記者の側もまさに暗中模索だったと思う。

たとえば、ひとつの記事に対して、複数の写真を添えることは可能なのか。その場合のレイアウトは指定できるのか。私はニュースセンターに問い合わせることを自らの禁忌要件にしていたので、記事を送りながら、その様子を見て自分なりに判断していた。

そのようにして、市民記者が責任を持つことの但し書きや、記事の分量、写真の解像度やキャプションの体裁などが、判例法よろしく並べられていった。

運営者は、シリーズものの特集を組もうというテーマを開陳した。私は少しでも記事を書く登録者を増やそうと、国語力に左右されない、花見の写真を記事として募集したらどうかと BBS 上に提案した。

また、インターネット上のニュースメディアでありながら、土日に記事がアップされないのではメディア特性にもとると指摘。編集側のヒューマンリソースが足りないのならば、平日の記事のうちで休日に相応しいものをプールしておいて、土日にリリースしたらどうだろうと、提案した。これには同僚市民記者にも賛成の声があがったが、そのことが運営側で検討されることはなかった。

同僚市民記者は、運営側の誰かが管理者としてホスト・ホステス役をつとめなければな

らないのに、その役目をする人がいない。それが、この BBS のコミュニケーションをとげとげしいものにさせていると、私にメールで不満をもらした。当時の私は、市民記者交流 BBS の他に、研修会で出会った市民記者をはじめとする数人の市民記者と同報メールのやりとりをしていたのだ。

インターネット以前のパソコン通信の時代から BBS は存在した。日本にはじめて登場したパソコン上のコミュニティであるニフティーサーブのフォーラムでも、いわゆる荒れる現象が起きていた。そういう 20 年近い経験の中から、コミュニティの管理者であるシスオペのハンドリングが重要であることを、多くのインターネットユーザーは経験として共有していた。シスオペの役割を果たすべきだったのは、運営の責任者だった P 氏だと思うが、彼にはその資質も意欲もはなかったようだ。

そういう不満が噴出したせいかどうかは分からないが、果たして PJ 交流 BBS の内容が外部に流れていた。

どうやらこの時期、私と同様なバッシングに P 氏も遭遇しているようだった。インターネットに慣れない彼は、2ちゃんねるに降臨して議論をふっかけ、火に油を注ぐとともに、自らもヒートアップしてしまった。

その頃、私の未熟な文章力と運営側の編集リソースの不備もあって、記事についてのさまざまな苦情がニュースセンターから私にやってきた。その指摘のいくつかは、読者から寄せられたメールや、記事つけられたトラックバックからだけではなく、2ちゃんねるの内容をニュースセンターが閲覧して、私にクレームを言ってきたものではなかったのかと、推論している。

いまでも2ちゃんねるにおけるライブドア PJ ウォッチは現在でも続けられている。ニュースセンターは、いまだに2ちゃんねるの指摘のいくつかを無視し、そのいくつかを平然と修正している。

勿論、記事の責任は市民記者にあってライブドアにはないのだから、市民記者には、どんなことをされても文句をいえる立場などないのであるが...

04_06【市民記者って、記事を書く特権を与えられたものなのか】

5月10日に、情報の外部漏洩を理由に市民記者交流 BBS は閉鎖された。

どういう記事を書けばいいのか。どうしたら沢山の市民記者が記事を書くようになるのか。それが交流 BBS のテーマだったと思う。その議論が中途半端になったまま途切れてしまったのは残念だった。

5月16日、BBS は機能をアップして再開されたが、6月6日に再度閉鎖された。

この一連の対応を見ていると、運営者にとっての境界領域がどこにあるのかと疑問になってくる。「誰もが記事を書く時代」を模索するのが市民参加型ジャーナリズムだとするならば、ニュースセンターが使ったような「外部」という概念はそもそも存在しない。P氏が行った講義の内容が教室からそのまま2ちゃんねるにアップされるようなこともあったというから、それは異常な状態だったのかもしれない。だが、ライブドアが提供したメディアは、それだけの注目に値するステージだったのだともいえるのだ。

04_07【はじめての市民記者を対象にした研修会】

前後するが4月13日、市民記者を対象にした研修会がひらかれた。費用は無料で、講師はテレビ局の解説委員を予定していた。講義内容は、日本とアメリカにおける、新聞とテレビのジャーナリズムについて、だという。

ジャーナリズムなんて...。と、思っていた私だったが、同僚の市民記者たちに会えることは魅力だった。そして、実名を強いることで、バッシングされ、襲撃予告をされ、個人ブログを閉鎖しなければならなかったこと事実を知っているのかと、ニュースセンターの人たちに聞いたかった。

勿論、記事の責任は自分が負う。そう同意書にもサインしている。そんなことは先刻承知。だけど...。そういう愚痴っぽい気持ちの私は、斜めに傾きながら、六本木森タワー38階の人となった。

その日のことを、私は次のような記事にまとめ、PJニュースに掲載されている。

(http://news.livedoor.com/webapp/journal/cid_1084181/detail)

「始まって数ヶ月。パブリックジャーナリズムの抱える問題が見えてきた。しかし、実は、それらは新しいものではなくて、ひとりの個人が社会と対峙したときに必ず通らなければならない永遠の課題だと思われる。」

いまとなっては、何を偉そうに...。と、思うのだが、あのときも、そして今も、私の思いは変わっていない。

ライブドアが言っていることはべつに特別なことじゃない。

責任をメディアがとらないことは、インターネットでは当然だし、匿名じゃないことも、実世界では当たり前だ。

思えば、ロッキード事件の「蜂の一刺し」で有名になった榎本三恵子さんにしても、雪印の企業腐敗を暴いた西宮冷蔵の社長にしても、匿名は許されなかった。そして、いかなるメディアも、その後の彼らがそれまでの安逸な生活を取り戻すために力を貸さなかった

…。

だが。だが、である…。

インターネットがあるから、無名の市民たちも記事を書こうと思えたのだし、ここに集まっているのだ。

研修は、予定されていた講師の都合がつかなくなり、運営上のトップである P 氏が講義することになった。

はじめての市民記者向けの研修会とあって、大阪や和歌山から出席した市民記者もいた。私は、登録時の有料研修会で顔見知りになった体育大学の講師の青年を見つけたから、彼と並んで坐ることにした。

講義の内容は、日本におけるジャーナリスト教育の歴史や、結果として根付いていないジャーナリスト教育。また、諸外国のジャーナリスト教育の現状について。わたしは、自分が立ち上げたメディアの有効性を強調するだけの講義内容にやりきれなさを募らせた。

私は連日記事をあげていたが、まだまだ一日にアップされる市民記事の数は少ない。多くても5本ぐらいだっただろうか。記事が少ないことは、自分の記事が目立つことで、プライドをくすぐられるが、そのままでは、市民参加型ジャーナリズムがメディアとして成立しない。

ここに集まった市民たちは、自己責任を承認し、小額の報酬にも不平を言わずに記者活動をしようという奇特な人たちだ。だが、その大部分はまだ記事をあげることができない。

勿論、彼らがまだ市民参加型ジャーナリズムに対して様子見を決め込んでいる部分もある。だが、私には、これから彼らが本気で記事を書き始めたときに、私と同じような状況が訪れることが予測できる。

ここに集まった人たちは、薄々私の状況に気づいていて、そういう危険があるのならば…。と、記事を書かないでいるとも考えられる。ならば、その対策をねらなければ、この市民参加型ジャーナリズムの繁栄は永久にない。

だが、講師には、そのような危機感はまったくないようだ。私の記事は、講師が「個人の連帯」と「勇気」が大切であると語ったことに感銘を受けたと書いてある。だが、実際の私は、もっと具体的な対策を練るべきだと考えていた。勇気だけで突っ走れというのなら、神風特攻隊と同じ。玉砕するほかない。

市民記者が連帯できるコミュニケーションツール。そして勇気の源泉になる、安心して記事が書ける制度がどうしても必要だと考えていた。

一時間ちょっとの講義が終わると、懇親会になった。アルコールがはいってしまったら、有効な議論などできない。私は、まわりの参加者たちと差しさわりのない話をして過ごした。

とはいえ、どこかタイミングで P 氏をつかまえて、わたしを取り巻く状況と、それに対

するメディア側の対応などについて意見を交換しようと思っていた。

だが、当日の参加者にとって P 氏は話題の中心人物であって、一人占めするのは、大人気ない。最多掲載数を誇り、市民記者交流 BBS でも多くの発言をしている私だったが、P 氏を遠くから眺めるほかなかった。

04_08【市民参加型ジャーナリズムは、四流ジャーナリズムであってはならぬ。と力説する私】

P 氏はかなりの時間、ある女性市民記者につかまっていた。そして、ようやく懇親会も中締めになろうとしたとき、彼女は P 氏を背後におさえながら、当日の参加者に向けて力説した。

曰く、ライブドア PJ は、メインストリームから拒絶されていた赤瀬川原平を見出した読売アンデパンダン展のようなものをめざせ。と。

私は、その考えに納得ができなかったので、彼女の言葉をさえぎった。すると、彼女は最後まで話を聞かないのは非礼であると指摘したので、私はしばらく待つことにした。

彼女の論理をささえる感情は何なのか。きっと何物かへの劣等感なのだろうが、そのときの私には理解できなかった。とはいえ、彼女の高説は基本的な間違い。というか、私の考えと大きく隔たっていたので指摘しないではいられなかった。

私の主張を端的にいえば、「市民参加型ジャーナリズムは、四流ジャーナリズムではない」ということになる。

つまり、三流にもなれなかった人たちの受け皿として、市民参加型ジャーナリズムが存在するのではないこと。

プロとアマチュアという違いはあるが、そこに優劣はない。プロスポーツや将棋の世界では、プロとアマチュアの実力の差は歴然だが、それが一般的なことでもない。たとえば、音楽の演奏家などでは如実だ。プロの技量を超えるアマチュアの存在など枚挙に暇がない。

もし、市民参加型ジャーナリズムが四流と捉えられたらどういうことになるのだろう。四流ならば、三流、二流、一流と、トップを目指していくことになる。だが、そんな既存のジャーナリズムのお尻を追っかけることに何の意味もない。

P 氏は一貫して、権力の検閲機関としてジャーナリズムは期待されているのに、既存のジャーナリズムのほとんどは墮落してしまっている。だから、その補完的なものをパブリックジャーナリズムで成し遂げるのだ。というようなことを述べている。

だが、私はその考えには否定的だ。だったら、一緒にやらなきゃいいじゃないかとの声

も聞こえてくるが、同床異夢は世の習いである。

私の考えは、カウンターカルチャーじゃしょうがないでしょってこと。あるべきはサブカルチャーでしょ…。

メインのカルチャーがないと、カウンターカルチャーは存在しない。ならば、そのメディアが存在根拠は脆弱だ。

一方、サブカルチャーは、メインがどうなろうとも独立して存在する。だから、時代が変遷すれば、サブカルチャーが注目され、表舞台に登場することも無きにしもあらず。電車男でブレイクしたアキバ系文化はそういうことだ。

一方のカウンターカルチャーはどうか。こちらは、メインがないと存在しない。できない。

このたとえ話が妥当かどうかは疑わしいが次のようになる。

巨人ファンは野球ファンだが、アンチ巨人（ファン）は野球ファンではない。巨人ファンは東京ドームに足を運ぶが、アンチ巨人ファンはわざわざお金を払って東京ドームで野球を見るような人たちではない。だから、そのような人たちがいたとしても表層的な現象に過ぎず、時代を生み出していく動力にはとうていなりえないのだ。

私はそこである編集者の女性と出会った。彼女が紹介したアーツフィアのイベント「踊りに行くぜ!!」に興味を持ったのが、彼女の存在を知ったきっかけ。その後、市民記者交流 BBS でも、彼女の発言を読んでいた。

だから、初対面といっても、顔を知らないだけで、旧知の間柄といってもよかった。

彼女自身、インターネットでバッシングにあった経験ももつから、私の状況を理解してくれてた。どうやら、私の個人ブログの記事のほとんどを読んでくれてもいるようだった。

身から出た錆以外の何物でもない話だから、私も自嘲気味だし、彼女のほうも私の感情を害さないことに注意深かったし、どこまで足を踏み入れていいのか案じていた。だから、すぐにことの核心をつくような話にはたどり着けない。

ようやくふたりが打ち解けて本題にはいるかなという頃に、先ほどのアンデパンダンの女史が割り込んできて、彼女と名刺交換をはじめた。

割り込まれてしまえば、私にはなすすべもない。女同士のパワーに勝てるはずもないし、私に起きていることは、3人で語り合うには、あまりにデリケートな問題を含んでいる。

新幹線の終電に乗り遅れるので、仕方なく会場を後にする人たちと一緒に、私も会場を後にした。

その翌日。私は学生街にある彼女のオフィスを訪れた。書籍や雑誌を手がける出版社の共同経営者でもある彼女は小さな事務所を学生街に設けていた。

04_09【編集者ならでの不満に納得する市民記者の私】

私よりもいくぶん年下の女性ではあるが、高校時代から文章を発表し、編集者としても豊富な経験が彼女にはあった。そして、私よりインターネットに詳しかった。

私はシナリオライターとして原稿も書くし、ディレクターとして映像もつくる。だが、私がそれらの現場で培ってきた職業感覚と、彼女のそれは明確に違っていた。

私は、倉本聰や橋田須賀子ではないから、自分のシナリオを一字一句変えてもらっちゃあ困るというような見はない。さらにいえば、シナリオは所詮机の上の論理であり、それが俳優という肉体を得て変容する。その変化がおもしろいのだし、楽しみたいと思っている。

それは、シナリオの不備で現場の人たちに迷惑をかけたくないという、無名の私にとっては今後の仕事の発注にも関わる重要な問題も含んでいる。

だから、ライブドアの編集部で原稿を直されても、文句をつけられようと平気の平でいられる。

ディレクターをやっているれば、役者から文句を言われることもあるし、プロデューサーから無茶な要求をされることもある。集団作業とはそんなもんだと思っているし、逆に、自分から出て行ってしまった言葉たちを直すのなら、自分のいないところで勝手にやって欲しいという無責任な輩だ。

だが、彼女は違う。自分でも文章をしたためるし、他人の文章を構成することもある彼女には、ライブドア PJ ニュースセンターの杜撰な作業が許せないのである。

彼女の専門分野は演劇や舞踏だった。

終わってしまった過去を自分勝手に表現する私の記事と違って、彼女の手がけるのは、未来のできごとだ。だから、記事のつまらない数字の間違いであってもあっても、観客に無駄足を食らわせたり、主宰者に迷惑をかけることになる。

そういう職業柄の責任感を持つ彼女は、最終的な校正を終えた原稿を見ることができないのでは関係者に対する責任がまっとうできないし、リンクが確実に機能しているかを市民記者が確認できない。このシステムを早急に改善すべき。そう考えた彼女は、ニュースセンターに出向き、問題の解消を訴えた。

それでも尚、記事のすべての責任を持つのが市民記者だとするならば、誰も市民記者として記事をあげなくても当然。

ライブドア PJ ニュースの惨状をみて、日本に市民参加型ジャーナリズムが成立しないと考えるのは、早計なのだ。

05_01【巧妙な嘘よりも、下手な真実を選べ】

05_自分たちのメディアをめざす市民記者たち

【巧妙な嘘よりも、下手な真実を選べ】

私の尊敬してやまない映画監督にロバール・ブレッソンがいる。彼は言う。

「演技とは大いなる嘘である。ならば、わたしは下手な真実を選ぶ」。

彼は素人俳優しか使わなかった。

彼はドミニク・サンダを自分の映画に起用したが、その時の彼女はファッションモデルであって、演技には素人の十代の女の子だった。

歌手であり俳優しても知られるシャルル・アズナブール氏は、「なんとしてもあなたの演出を受けてみたい」と彼に言った。だが、ベテラン俳優だった彼の名前が、ブレッソンの映画のクレジットを飾ることはなかった。

ブレッソンは、プロフェッショナルになってしまうと、何物かが失われると感じていたのだろう。

確証はないが、大量の素人俳優を起用した「影武者」の黒澤明監督は、ブレッソンの影響を受けていると、私は考えている。

そして、同じことが市民参加型ジャーナリズムについても言えると思う。

市民記者になることは、市民が市民であることをやめて、ジャーナリストになることではない。市民が市民のまま筆をとり、自分や自分のまわりの情報を発信することに意義があるのだ。わたしは、そのことを花屋が花屋のまま、花屋の現実を語るのが市民ジャーナリズムであると表現した。その耽溺が鼻についた同僚の市民記者は、花屋を魚屋に言い換えた。私もその意見に激しく同意する。

さて、私も含めて、すべての市民記者は、事実誤認は勿論のこと、誤植や語句の使い方について破綻のない文章をめざしている。しかし、個人の限られたリソースでは、文章力のなさや、調査不足で、アップした記事に疵があることは避けられない。ひとつ言い訳が許されるなら、記事の新鮮さはニュースバリューのひとつでもある…。

私はかなり経ってから、同じく市民メディア・インターネット新聞のJANJANに登録、記事をアップしたことがあるのだが、そこでの編集部とのやりとりとはかなりの差がある。JANJANに記事を登録すると、担当編集者の名入りで、記事に関するチェック済み原稿がやってくる。

事実に関する確認は勿論だが、文章そのもののチェックは推敲に近い。そして、その推敲の理由まで担当編集者が言及してくれるので、とても勉強になる。私はそのようなメールを送ってくる担当者の国語力・分析力を尊敬するとともに、編集部と市民記者の間に、よい記事をつくっていきこうという一体感・連帯感が生まれるのを感じた。

とはいえ、勉強になるなどとは公言してはいけない。担当編集者に稚拙な文章でお手をわずらわせたことを詫言しなければならぬのが、私の立場だ。

一方のライブドアといえば、一端投稿してしまったら、市民記者は蚊帳の外。来るのは、記事の間違いに対する読者たちからのクレームばかり、そして、味方だと思っていたニュースセンターからのお叱りだ。

堀江氏が逮捕され社長を解任された今にして思えば、彼がインタビューでメディアを語り、市民参加型ジャーナリズムについて過激な発言を繰り返したのも、自社の株価をあげることだけが目的だったとの解釈も成立する。

市民参加型ジャーナリズムという今までにないメディアをスタートさせると発表することで、その日の自社株が少しでも値を上げればよかったので、それ以外はどうでもよかったのかもしれない。

勿論、資本主義における経営者の本質はそんなものなのだが、それを補佐する役員たちもホリエモンと思いを同じくしていたのだろう。

結果、こっちは水は甘いぞとばかりに、六本木の高層オフィスに集まった若者たちに人生を貫くような哲学はなく、事業は実体をともなわないまますすめられていく。買った株は売り抜けてしまえばそれでいい。そういう思想が現場にも滲んでいたのだろうから、市民参加型ジャーナリズムの運営をつかさどるニュースセンターのリソースが決定的に不足していたとしても、なんら不思議ではない。

不足したリソースを埋めるために市民記者たちができるのは、自分たちの文章作成能力を高めるための自主運営の塾であり、もうひとつは、記事管理システムの市民記者へのオープン化を前提とした自主編集システムの構築だ。

05_02【市民記者相互による投稿記事の編集システムを構築せよ】

編集者でもある市民記者の彼女は、P氏にそのあたりの提案を粘り強く交渉した。だが、取材記者活動においてライブドアの名を語ってはいけない市民記者は、自分たちが集まる場合もライブドアの名前を使ってはいけないと宣言される。

ライブドアの市民参加型ジャーナリズムの名前が広がるのが悪いことではない。当時の日本的なライブドアの知名度を考えれば無理もないのかもしれないが、どうなんだろう。P氏は、独立したジャーナリズムのためには、いかなる経済活動とも無縁であることが必須だと強調していた。だが、NPOといえども、組織自体が利益を貪ることは許されないが、協力した人たちに人件費を支払うことは許される。

原則論ばかり言っているのは、ホリエモンの抜群の知名度を使って市民参加型ジャーナリズムを一気に成立させてしまう千載一遇のチャンスを逃すことになる。

だが、市民記者同士が交流するためのBBSも閉じられ、ライブドアの名を使って自主活動もできない市民記者たちになす術はなかった。

05_03【記事管理システムを市民記者に向けてオープン化せよ】

記事管理システムへの市民記者へのオープン化の提案は、個人事業主として企業の経営コンサルタントをしている女性市民記者が行っていた。

彼女は、市民記者交流BBSにしても、もうすこし上手いやり方があると、メールで私に語っていた。BBSが閉鎖されたときも、リソースがないのなら、自分がボランティアで作ってあげるとも提案していた。彼女の手にかかれば丸二日もあれば掲示板の構築などたやすいものだそうだ。

さすがにIT関係で仕事をする彼女。ネット上のさまざまなところで情報を得ている。彼女は、試写会に足しげく通い、その映画紹介をライブドアPJニュースにたびたびあげていた。個人事業主として日常業務に追われる毎日の中で、週に2~3回試写会出向く彼女のバイタリティーは敬服に値する。

そんな彼女も、2ちゃんねるの書き込みで自分の記事の不備を発見し、心を痛める。彼女は自分の記事の誤りを修正することに誠実に対応した。ニュースセンターにメールを打つとともに、電話をかける。だが、彼女のように積極的にニュースセンターに働きかけて

も、ニュースセンターの対応は鈍い。彼女は自分のブログに弱音を書く。すると、それをおもしろがって2ちゃんねるが書く。そのどうどうめぐりが続いていく。

彼女は実名で映画評を書いていたし、個人事業主の営業拠点としてホームページと個人ブログを持っていたから、そういう2ちゃんねるによる風説の流布も彼女のビジネスへの影響は必至だった。彼女は、P氏に対してだけでなく、ライブドアニュースのトップにも交渉を挑んだが、状態は何ら改善することもなかった。

このままでは、試写室に呼んでくれている配給会社にも迷惑をかけるし、本来のビジネスへの影響も必至。彼女は、はじめての登録辞退者となった。

私はそのことを8月19日の個人ブログに書いた。記事のタイトルは、「同僚PJ撤退す」である。

(<http://blog.livedoor.jp/sponta0325/archives/30458771.html>)

私も含めて市民記者たちは一時的に、ネット上の有名人になったのかもしれない。だから、さまざまなバッシングを有名税だと指摘する人がいる。だが、妻は私に不平を言う。

あなたが有名になったメリットが何かあるというの。メリットもないのに、デメリットしかない。そんなメディアで記事を書くことの意味がどこにあるの。

私は彼女に明確な反論ができなかった....

05_04【既存のジャーナリストから見たライブドアPJニュース】

4月22日。TBSラジオの「アクセス」という金曜日夜の番組にP氏が出演した。

パーソナリティーは麻木久仁子。スタジオにつめたジャーナリストが二名。下村健一氏と江川紹子氏。

編集様注：出演ジャーナリストについては要確認

P氏は電話での出演だった。私は、当時の個人ブログに次のように書いている。

(<http://blog.livedoor.jp/sponta0325/archives/19771443.html>)

```
<table border="2" bordercolor="olivedrab" bgcolor="mintcream" cellpadding="10pix" cellspacing="0pix"><tr><td><b><font color="olivedrab">一般の視聴者からの電話を入れながらの番組なので、話が過激になっていかないという構造。
```

私が気になったのは、メディアリテラシーとは、正しい情報と間違っている情報を見分け

ることだという純朴な考え。

メディアリテラシーとは、メディアの都合を読み解くこと。

そして、多くの人はそのメディアに流れているコンテンツから判断しようとするが、その非効率性に気がついていない。

なぜ、そのメディアはそういう論陣を張るのか。それは、そのメディアが置かれている立場や状況を考察するほうが、余程分かりやすい。

そして、そのようなメディアとしての文脈を明確にすることが、受け手にとって情報を受け取りやすい状況に導くと思うのです。

たとえば、スポーツ報知に巨人軍の記事が満載なのは、同じ読売グループだから…。

PJ ニュースにおいて私が、しつこく小5の娘の父親であるとか、東京都民と書いているのは、そういう情報の送り手のバイアスを受け手に感じされることが、読み手の情報リテラシーの向上に貢献すると思うから。

無名な私の署名など、ほとんど匿名と同じという判断から…。

発信者が匿名な情報というのは、発信者のバイアスを受け手が推論できない。そこに問題がある。

発信者が匿名記者でも大マスコミのオーソライズがあれば、それが大マスコミという文脈で、受け手も受け取る。

PJ については、そういう PJ ニュースという文脈をつくるのか、それとも、各 PJ ライターという文脈を尊重していくのか。

編集方針には、さまざまな道があるのだと思う。

</td></tr></table>

実は、P 氏はこの番組で、江川紹子氏の問いに答えるかたちで、報道被害についてのメディアの責任を語っている。

ライブドアが市民記者に書かせた同意書に反して、彼は、報道被害が起きたときには誠実に対応するとこたえている。

また、彼が市民記者にその存在を明かさないうと欲しいと懇願した市民記者同士が交流する BBS についても、その存在を自ら明かし、市民記者同士が円滑に交流しながら、メディアが運営されていることを印象づけている。

すでにいろいろな問題が露見していた市民参加型ジャーナリズムだったのだが、それが外からは何も見えない。

本来、外も中もあるべきでないのが、市民参加型ジャーナリズムのはずで、理想とはは

るかに遠いところで彷徨っていた。

05_05【テレビも注目するライブドアPJニュース】

4月26日、日本テレビの夕方のニュースショーで、ライブドア市民参加型ジャーナリズムのことが特集で紹介された。番組に登場したのは、和歌山在住の市民記者である。

そのときのことを市民記者本人が記事を投稿している。

(http://news.livedoor.com/webapp/journal/cid_1100614/detail)

この市民記者に、私は研修会で会っている。柔和な印象の男性で、私と年齢は同じくらいだろうか。

彼はさびれていく地方都市をなんとかしようと、地域活動に精を出してきた。研修会のときも、名刺代わりに自分の活動を紹介した地方誌の切り抜きをプレゼントしてくれた。

彼がP氏との間に何らかの摩擦を生じたのは、この取材がきっかけだったようだ。仔細はあえて書かないが、ライブドアのネームバリューに力を得て、地域の活性化に一役買おうという彼の思惑と、そういう売名行為や経済活動を許さないP氏の姿勢のへだたりが根っこにあると感じている。

私は企業に属する団体が名前を売ることや経済活動を否定するのは愚の骨頂だと思っている。

P氏は経済活動と決別することがメディアの独立性を保つための条件とし、それが情報の信頼性を生み、結果として、読み手の情報リテラシーにも貢献すると考えているようだ。

私はそうは思わない。

どんなメディアであれ、組織の経営や存続に関わる固有の問題は存在する。ならば、それぞれのメディアがそれぞれのメディアの事情を公にすることによって、受け手はメディアリテラシーを得ることができる。

報知新聞に、巨人を賛美する記事ばかりでつまらないと文句を言う読者はいないだろうし、デイリースポーツで巨人のことを悪く書いていると文句を言う読者もない。もし、本当のことを知りたければ、利害関係のない第三者の立場の新聞を読んで対照すればいいのだ。

地方在住市民記者は、ニュースセンターとの摩擦に疲弊し、自ら休筆宣言をすることになる。(5月17日)

彼は誤解を招いた個人ブログを閉鎖したが、きっとこれらもインターネット上のどこか

の保管庫にログとして保存されているのだろう。

書きたいことがあれば、個人ブログに書いてもいいし、JANJAN だってある。その後、同じような状況に陥った私の記事と彼の記事がなかよく JANJAN でならんだこともあった。

スポンタの記事

(<http://www.janjan.jp/living/0507/0506298936/1.php>)

05_06【ライブドア PJ は日本の市民参加型ジャーナリズムの代表のひとつである...】

市民記者にとって八方塞がりというお先真っ暗状態の中で、6月24日、次のような記事がライブドア PJ ニュースを飾った。

PJ 招待され、ソウルで世界市民記者フォーラム開かれる

(http://news.livedoor.com/webapp/journal/cid_1230169/detail)

ライブドアに、韓国のオーマイニュース社から、自社が主催する国際フォーラムへの招待があった。

ニュースセンターは招待の存在を市民記者に知らせることもなく、独断で市民記者を選び派遣した。

同じく招待を受けた JANJAN は市民記者登録者に希望者を募り、その中から派遣者を選んでいった。

JANJAN とライブドアの市民記者を兼ねている人も少なからずいたから、てっきりライブドアは、オーマイニュースから無視されたのだと思っていた。それが...。である。

私は、そのときの思いを個人ブログに書き込み、ライブドア PJ ニュースの該当記事にトラックバックを打った。それは私にとっては初めてのニュースセンターへの反旗であった。

(<http://blog.livedoor.jp/sponta0325/archives/26222968.html>)

05_07【ライブドアに反旗を翻す私】

タイトル：PJ が招待されて、M 氏がソウルに飛んだ。

本文：PJ ニュースに、「PJ 招待され、ソウルで世界市民記者フォーラム開かれる」という記事が載っている。

本文を書いた PJ 氏は、記事本文でそのことを語っていないから詳細は明らかではないが、市民記者活動で世界的に有名なオーマイニュースがライブドア PJ に注目し、市民記者の派遣を呼びかけたのだろう。

私は、PJ として人並み以上の記事をあげてきた自負がある。そして今、さまざまな提案をしながら、パブリックジャーナリズムを盛り上げようと、PJ 有志とコミュニケーションを図っている。

PJ 有志たちと練り上げたプランを運営者側に提案していくことで、巨大掲示板などで指摘されている問題の多くを、運営者側のリソースの欠如といった要因に左右されることなく、PJ 側の知恵と努力によって改善できると信じている。

今、PJ の記者同士が互いに情報交換をする掲示板は閉鎖されている。

したがって、個々の PJ が意見交換することもできない。

そして、疑問や相談などが生じたときには、個別の PJ 記者は運営者にメールを打つなどしてコミュニケーションをとっている。

そうした場合の運営者の対応はほとんどが冷たく、「体制に文句があるのならば、記事を書かなくてかまいません」などと、暗に退会を促すような言動にぶち当たる。

パブリックジャーナリストと銘打ってはいるものの、実際は、発案者が市民記者たちの上に君臨し運営しているにすぎない。

もちろん、これまでに沢山記事をあげてきた人間として嫉妬もある。私よりも記事をあげていない人間が推薦を受け、ソウルに行った。そのことに私の感情が乱れていることは否定しない。

しかし、それよりも尚、私が危惧するのは、いま、六本木のビルの中で行われていることが、あるべき日本の市民記者運動とは程遠い存在であるにもかかわらず、それが日本の市民記者運動であると誤解されること。

今、オ・ヨンホ氏は市民記者活動を世界的に広げようとしている。

そのムーブメントを支えるアライアンス先として、もし、我らがライブドア・PJ ニュースを選んだならば、日本の市民記者運動について致命的な打撃を与えかねないということで

ある。

下卑た言い方もかもしれないが、今、六本木で行われている編集活動は、透明性もなく、編集指針もなく、運営者個人の独裁体制によって行われている。

つまり、パブリックという冠はしていても、その実は絶対主義。それが、世界的ムーブメントのなかで日本の代表のように外国から捉えられてしまうと、まるで、金日成をオーソライズした北朝鮮のような形になってしまう。

わたしの記事が掲載されないことはそれでかまわない。しかし、市民記者運動の渦中にいる人間として、今起こっていることを知ってもらうこと。そのことが市民記者としてなすべきことだと信じている。

いま、日本の市民記者運動に何が起きているのか。

わたしに取材を申し込んで頂ければ、わたしは誠意を持って回答します。みなさまからのご依頼を待っております。

私の個人ブログに興味を持った、この本の著者である湯川氏も、6月28日、自らのブログで、「ライブドアPJに不協和音」とのエントリーをあげた。

(<http://kusanone.exblog.jp/2054522>)

中村さんは、ライブドアPJの中でも積極的に記事を書かれていた一人だ。これまでも外部との衝突が何度かあったライブドアPJだが、ついに内部からも批判が出た。

参加型ジャーナリズムは一般市民の多くの支持を得て、既存ジャーナリズムを超える存在になるのだと思う。ここまで多方面と衝突しながら目指すパブリックジャーナリズムとはどういうものなのだろうか。

私とP氏ならびに、ニュースセンターとの対立が表面化した7月。

その7月5日に、ホットワイアードというサイトが、P氏にインタビューをしている。

(http://hotwired.goo.ne.jp/original/sasaki_it/050705/)

よせばいいのに、最後通告とばかりに私はコメントを残している。

(<http://hotwired.goo.ne.jp/webvoter/index.html?id=6&p=4#comment>)

sponta/46 歳/男性 投票 7月 20日

Q:パブリックジャーナリズムに期待しますか?: [YES]

コメント:

ライブドアPJの暴挙は、情報をオーソライズするための機構だということ。問題は、そのオーソライズする基準に透明性がないこと。これでは、パブリックを名乗る資格はない。自然増殖が可能なインターネットで、オーソライズなどという馬鹿げた考えを実行したPJには、先見性があり、この暴挙から新しい何かが生まれると信じる。(研修会に出席したときに、私はブログをリンクすればいいじゃないかと思っていた...) 私がYesに投票したのは、P氏が去った場合のこと。とはいえ、後継者が既存のメディア人だったら、未来はないが...

05_08【最後の記事】

私の記事が最後にライブドアPJニュースをにぎわせたのは、7月17日の記事である。

夏祭り早くも始まる、東京・世田谷の喜多見団地祭り

(http://news.livedoor.com/webapp/journal/cid_1285947/detail)

「あなたが批判するメディアに投稿するのは何故ですか？」この頃、P氏との間で、掲載・非掲載の基準について、何度かのメールのやり取りをしている。

私は、ギター侍のように、他人を批判するなら、自分のことを批判してみせることが身だしなみだと考えている。

「逝ってよろしい」「お前もな」という2ちゃんねるの定例句もまさにそれで、人間の心の道理を踏まえた、とてもリアリスティックなやりとりだと思う。

自分たちに対する批判を乗り越えてこそ、他者を批判するに足る資格を得るし、そのことがその批判の説得力につながる。

ライブドア批判は許容するが、ライブドアニュースセンター批判は許されない。それでは、パブリックジャーナリズムという輝かしい名前は有名無実だ。

その後も、堀江氏が衆議院議員選挙に出馬したり、獄中の人となるたびに、私はライブドアPJニュースに投稿している。

何故なら、ライブドアに関わる状況は極めて流動的であり、ニュースセンターの体制も変化しているかもしれないと期待していたのである。ホリエモンが選挙に出る。国民の意見を代弁する立場になる。ならば、国民の意見を吸い取るために、自分のメディアの改革に乗り出すことを期待するのは、当然のことだろう。

だが、一度も記事が掲載されることはなかった。その理由は明らかであり、それが市民参加型ジャーナリズムのメディアとして失格であることは疑いようもない。

とはいえ、ライブドアPJニュースは日本の市民参加型ジャーナリズムの未来を語るうえで、貴重なソーシャル・トライアルでもあった。

その重要性は、日本のジャーナリズムの歴史にとっての金字塔であり、かならずしもP氏の不名誉を意味しないと考えている。

----- (以上、5章)

06_日本でも、市民参加型ジャーナリズムは成立する。

〔ホリエモンとともにあったパブリックジャーナリズム〕

2005 年のはじめ。

東京の老舗ラジオ局の株の大量取得をきっかけに、ライブドア&堀江貴文氏が注目を集めていた。ほとんど同じタイミングで、ライブドアが運営するインターネット上のニュースサイトが市民参加型ジャーナリズム・パブリックジャーナリズムというのを始めている。

3月上旬、私はその組織に登録、市民記者をはじめめることにした。市民参加型ジャーナリズムはあるが、1日2万アクセスを集めるのはライブドアしかない。

開始当初は記事が少ないこともあり、最多記事掲載数を記録。さまざまな問題をわが身を持って経験しすることになった。

まず最初に起こった現象は、トラックバックおよびトラックバック先のブログのコメント欄で展開する記事への国語力バッシング。

次に現れた現象は、裏サイトを中心にはじまる市民記者個人に対するバッシング。個人ブロガーでもある私やパブリックジャーナリズムの提唱者であるニュースセンター長補佐がまっさきに標的にされた。ゴシップ、批判、中傷、そして、私に対しては襲撃声明もあった...

そして、裏サイトの影響かは分からないが、既存のジャーナリストからの蔑視も...

ライブドアの市民参加型ジャーナリズムは批判すべきレベルにも達していないという

いう評価。それは、ホリエモンへの社会的注目度があったからの出来事で、本来ならば無視されておしまいただろう。

文芸春秋(2005.5月号)の平成ホリエモン事件という特集で、立花隆氏は「ネットはメディアを殺せない」というタイトルで、ライブドアのパブリックジャーナリズムに言及している。これは湯川氏の前著を意識したタイトルに違いない。文面では、ライブドア PJ ニュースの現状を詳らかにし、予想される当然な未来を語っていた。

06_02〔市民記事の疵は、書く技術の拙さ〕

プロフェッショナルであるべきライブドアの編集能力に問題があるのはこちらにおいていくとしても、一般の市民は本格的なジャーナリスト教育を受けているはずはないし、文章作成能力も素人であることは自明。それでも、トラックバックされたブログや掲示板などのコメントのバッシングは容赦がない。

ライブドアは、記者が実名で投稿することを基本としているので、記者活動が市民生活に影響を及ぼしかねない。

だが、市民記者活動がただただ批判にさらされるだけで、記事を書くことが批判の対象にしかならず、尊敬を集められないならば、市民記者は百害あって一利なしだ。

これでは、開始早々市民記者であることをあきらめ、個人ブロガーに戻っていく人も現れるのも当然だ。

世の中には多様な意見が存在してあたりまえ。だから、いかに正当な理論を記述しても、必ず反論は出るもの。また、文章術に関しても、文章のスタイルというのは人それぞれだから、批判の対象からは逃れられない。

一方、クレームする方はたとえその数は少なくとも、何度もトラックバックしてコメントをすることができる。そして、市民記者の側の良識や思想はインターネット上で精査されていくのに、匿名である場合がほとんどのクレームする側の良識は精査されない。私は批判にさらされることは表現者として避けられないことだから、書くことをやめない。だが、私のような考えの持ち主は皆無といってよく、一般の人はなかなか市民記者を続けられない。結果、記事は集まらなかった。

06_03〔民主主義は、言う技術・書く技術に秀でた人だけのものでいいのか...〕

文芸春秋を読みながら私は思った。

日本を代表する英知の塊である立花隆氏は、自らの高みにおいて、市民記者たちを鑑別したといえないだろうか。あの圧倒的な知の持ち主にしても、市民記者の誕生を喜んでいない。

自分たちが市民記事の拙さを補い、擁護することで、国語力・論理力エリートたちの牙城となっている言論界を是正しようと、どうして考えないのだろうか。

勿論、私の推論の根拠となった彼の文章は、平成ホリエモン事件という特集の中のコラムであり、特集の主旨はセンセーショナルリズムであり、現象を批判する文脈で貫かれている。ただ、自省的でもある彼が、「ライブドア記者制度の失敗」などと小見出しをつけて、早々と結論を出し、文の最後を、「堀江が豪語したような、いずれインターネットが旧来メディアを全部死滅させるなどという日は当分来そうもない」と結んでいる。その言葉の底にある立花氏の激情の度合いというものを私は感じるし、無名のジャーナリストならば、そのような抵抗はもっと強いと確信する。

06_04〔ネットは新聞を殺すのかの湯川さん〕

7月20日。私は、「ネットは新聞を殺すのか」ブログを通じて交流のあった湯川さんと時事通信に訪ねた。

「湯川さんのブログにたくさんの書き込みをしています。アラシと感じていないですか」
私はまず、湯川氏に謝罪した。

「いやあ、あなたの書き込みには沢山反論が書き込まれますよねえ」と湯川氏は苦笑した。そして、「どうしてライブドアって、あんなに叩かれるのかなあ」と続けた。

湯川氏は彼のブログで、参加型ジャーナリズムという形で論じているが、それは記者というよりも、ジャーナリズムという言葉の方が、書きたい人たちの意欲をかきたてるだろうという理由だけの話であって、インターネットが市民社会に完全に浸透したあとのポストジャーナリズムが、旧来の定義のジャーナリズムを継承しているからは保証しない、と白状した。

インターネットのなかった時代では、マスコミにしか情報発信ができなかった。だが今、ブログや掲示板をつかって、誰でも簡単に情報発信ができる。そのような時代では、アクティビズムとジャーナリズムの垣根はなくなると、湯川氏は言う。

いままでは、既存の報道機関がメディアを牛耳っていたので、アクティビストたちはジャーナリズムに入っていけなかった。だが、インターネットの発達とともに、今後はアク

ティビストもジャーナリスティックな活動をするようになる。

私の語感では、アクティビストは主観者であり、ジャーナリストは客観者。そこに問題があるのではないか。

JANJAN はライブドア PJ と双壁ともいえる市民参加型ジャーナリズムだが、私には、そこが、アクティビストたちの主観で覆われてしまって収拾がつかなくなり、読者を想定していないメディアに陥っているのを感じている。

本来、アクティビストはジャーナリスティックに自説を語るべきであり、ジャーナリストはアクティブに読者に働きかけるべき。それがいまは、アクティビストたちがようやく自説を語るメディアを得たことに狂喜乱舞してしまって、そのメディアを覆い尽くしている。それが結果として、彼らをメディアから排除するキッカケになるとともに、サポーターを増やすことにもつながらないことを理解もせず...

私は、彼に尋ねた。

ジャーナリズムが保持すべき取材対象との客観性・中立性というモラルは、ジャーナリストに冷酷さを強いるのではないかと。

「私はジャーナリストである前に、一人の人間でありたい」と彼は即答した。

06_05 [ネット・ジャーナリズムの可能性]

ライブドア・パブリックジャーナリズムとの雲行きが怪しい私が惹かれていたのは、韓国のオーマイニュース、オ・ヨンホ氏だ。

私は、「MSN 毎日インタラクティブ」の1周年を記念した、国際シンポジウム「ネット・ジャーナリズムの可能性」(6月7日・東京・神保町・学術総合センター)に、行くことにする。

(<http://pcweb.mycom.co.jp/news/2005/06/08/003.html>)

シンポジウムの基調講演は、コロンビア大学情報通信研究所所長のエリ・M・ノーム氏の「メディア経営におけるインターネット・ジャーナリズム」と題するものだった。

ノーム氏曰く、ネットによって新聞の領域が侵されているのではない。そもそも、若い世代がニュースを読まなくなったのであって、紙媒体からデジタルヘユーザーが流れているとの分析は間違っている。と。

そもそも、既存の情報関連産業が破綻の兆しを示しているのは、新聞だけではない。音楽やテレビ、ラジオも例外ではない。

そういう業界はそもそも固定費が高く、利益率が低いものだったが、それを大量生産・大量消費することでビジネスとして成立させてきた。だが、世の中の情報のコモディティ(日用品)化の流れの中で、特権的立場が失われ、デフレ現象を起こしている。

ノーム氏は、講義の最後に、マードック氏がやろうとしたような垂直統合的なメディアのアライアンスは古いとし、これからはジャーナリストもネットワークにもっと参加しなければならないし、そういうインテグレートしたジャーナリズムのモデルが重要だと結論づけた。

ノーム氏は図らずも、「垂直統合の利点は過大評価されやすいこと」と指摘していたが、ホリエモン逮捕の今、この指摘を振り返ると、まさにそのとおりだ。

企業買収の話題はマスコミを席卷し、ホリエモンは時代の寵児としてもてはやされた。だが、それが過大評価であり、ネットワークをインテグレートしていく地道な作業とは別なものなのだ。

株式の専門家が、ライブドア株の暴落は株価全体の凋落につながらないとの意見を述べているが、ノーム氏の意見はそれを裏付けるものでもある。

06_06〔オ・ヨンホ氏は語る〕

「市民記者とネットジャーナリズム」という演題で、オ・ヨンホ氏は登場した。

「すべての市民は記者である」。それがオーマイニュースの基本コンセプトである。

新聞が登場する前の地域のコミュニケーションは、情報の送り手と受け手はそれぞれを兼ねていた。それが新聞記者の登場によって、隔てられることになった。

だが、インターネットの登場によって、情報の送り手と受け手を隔てるものはなくなった。さらに、新聞後も存在した時間も空間といった隔たりもなくなっている。

さらに、受け手の中の乖離もなくなっている。つまり、こども、学生、公務員、教授など、どんな立場の情報の送り手であっても、平等に情報の送り手になりうると示唆した。

航空事故に関して、元パイロットが記事を書き、評価された。日本同様、韓国でも航空事故に関する記事は、航空評論家が書いていたのだろう。だが、そういう執筆者は専門家であってもアウトサイダーに過ぎず、ものを書く人であっても、飛行機を飛ばす人ではない。

この場合は、元パイロットが言い、それを聞いて専門記者が書いた。それでもいい。ラ

イブドアのように、署名であるとか、個人記事であるとか、その責任は個人に帰するだとか、そんなことを気にする必要はあまりない。

市民がそれぞれの専門分野の記事を書く、オピニオンを述べることで、既存メディアにはできない市民記者媒体としての価値が生まれる。

オ・ヨンホ氏は、韓国での自らの成功の理由を次のように分析している。韓国は未曾有の経済危機に際して、インターネットインフラを整えることを起爆剤にすることにより、復活をめざした。ADSL ではあったが、社会への普及度は高く、小さな国土という個別の事情もあって、インターネットが国民の生活に深く浸透した。

彼は言う、テクノロジーは社会を変えられない。彼にとって重要だったことは、テクノロジーを仕える人たちが韓国社会に沢山いたことだ。

だから、オーマイニュースの成功は、民主化のムーブメントとテクノロジーが結婚して生まれた子供であると。そのコアな部分は386世代が担った。386世代とは、30代であり、80年代に大学生活を過ごし、60年代に生まれた人たちを指す。彼らは、1980年に光州事件が起こり、その後、沈黙か死かを迫られ、辛い沈黙を強いられてきた。そうした若き日に民主化運動に身を投じたひとたちが、いままた、ネット上で民主化運動を再燃させているというのだ。

いま紙媒体の新聞は、時間や空間の限界を持つ特性に縛られて苦悶している。ジャーナリズムが時間や空間に縛られなくなったインターネットのジャーナリズムにおいて、価値ある記事とはいかなるものなのだろうか。

オ・ヨンホ氏は、そんなことをまったく気にしていない。彼が気にしているのは、民主化の流れ。韓国の民主主義の質を高めるためには、市民が積極的に参加すること。そのためには、市民参加型民主主義をネット上の中ですすめていくし、そのムーブメントを世界に広げていくと宣言した。

つづく、マイクロソフト株式会社執行役 MSN 事業部長は、オ・ヨンホ氏の講演に触れ、日本には韓国のようなアグレッシブなニュースサイトが登場するにはまだ時間がかかると感想を述べた。その理由は図りかねるが、アグレッシブ(攻撃的)という語を使ったことに、彼女の意図が読みとれる。

オ・ヨンホ氏は、民主化のツールとして市民参加型のニュースサイトを構築していったのであって、既存の社会を攻撃するためのものではない。

エスタブリッシュに特有な、急激な変化が自分の領域を侵すことに対する漠然として不安。見知らぬものたちが意見を発することに対する危惧。そういう漠然とした不安が彼女の言葉から感じることができる。

06_07〔日本のエスタブリッシュは、市民参加型ジャーナリズムの実現を困難とみる〕

同じく、日本人は和を持って尊となしという民族性を持つから、ネット上で有効な議論が交わされることは将来にわたってないと指摘する講師もいた。シンポジウムで、ライブドアのパブリックジャーナリズムのことが具体的に指摘されることはなかったが、彼らは、日本には市民参加型ジャーナリズムは定着しないという意見で一致していた。

だが、どうだろう。ほんとうに日本人は、自分の個性を発揮することよりも集団の和を重んじ、集団の中に個を埋没させることに満足する民族性を持っているのだろうか。

パネルディスカッションの最後の質問コーナーで、私は客席から質問をオ・ヨンホ氏にぶつけてみた。

「私は、市民記者をやっているが、日本では、個が集団の中に埋没するのが好む傾向にあるのでなかなか難しい、韓国での市民参加型ジャーナリズムの成功の要因は何なんでしょうか...」

私が確認したかったのは、韓国の葬式の泣き屋・泣き女などにみられるように、自分の感情を周囲にみせることを憚らない民族性が市民参加型ジャーナリズムの成功要因のひとつとしてあげられないだろうか。ということである。

だが、オ・ヨンホ氏は、オーマイニュースの成功の原因を、「インターネットの普及」「言論弾圧などによる市民意識の高さ」「国土が狭い」と答えるにとどまった。

たしかに集団の中に個を埋没させることが、日本人のコミュニティーでうまくやりすぎひとつの方法だった。

しかし、最近では若者たちの間に、キャラクターがダブルことを嫌う風潮がある。芸能界の力学をこどもや学生たちが自分たちに適応したのがキッカケだと思う。

簡単にいえば、ドリフターズには、デブキャラは高木ブー人でいいということ。同じグループの中に、自分とキャラクターが同じものがあることを嫌うのだ。キャラクターがかぶると、いじめの対象になりかねない。そうした若者たちの傾向の深層心理には、他人とは違う自分を表現したいという気持ちがあるはずだ。

そういう思いをすくいにとってあげること。それがインターネットならできるはずだ。

何も市民参加型ジャーナリズムの将来も悲観的に考える必要はない。いまはただ、市民参加型ジャーナリズムの仕組みに不備があるだけで、日本人がより多くの人に自分の意見を伝えたいと思っていない訳ではないのだ。

考えうる一番の問題は、情報を発信する個の責任の問題。韓国では北朝鮮のスパイ事件をきっかけに、国民番号制度が実施されている。国民番号を記入することによって、市民

記者は自説に責任を持って発言することを強られるし、それはコメントする側、トラックバックする側についても同様と思われる。

国民番号制度は、韓国のインターネットにおけるコミュニケーションの阻害因子の排除に一役も二役もかっているに違いない。

NII 国立情報学研究所情報基盤研究系教授の曾根原登氏は、「デジタルコマースの展開」という講義の中で、e-コマースを考えるとときの重要な視点として、利用の競合性と所有の排他性を指摘した。簡単に言えば、インターネットでは無料が当たり前であり、無料でなくても顧客を得ることができるのは、利用の競合性も所有の排他性がある場合に限られる。

だから、有料サイトをつくっても、利用の競合性をユーザーが感じられなければ、対価を支払う気にはならない。

ネットジャーナリズムはその理論を越えられないから、なかなかビジネスとしては成立しにくい。事実、民主化のツールとしては大きな役割を果たしたオーマイニュースだが、それがビジネスプランとして有効かどうかは、疑わしい。

06_08〔日本に市民参加型ジャーナリズムが成立しない理由〕

このシンポジウムに限らず、日本に市民参加型ジャーナリズムは根付かないとの意見はメディアに溢れている。

- ・日本人は、聖徳太子の「和をもって尊しとなす」精神が人々の心に根付いており、議論そのものを嫌う傾向がある。
- ・日本のジャーナリズムがさまざまな問題点を抱えているといっても、市民参加型ジャーナリズムがないとその問題を解消できないという程に危機的状況ではない。
- ・日本には巨大掲示板やタウンミーティングなど、市民の不満のガス抜き装置がたくさんあるので、市民参加型ジャーナリズムに書き込む人は少ない。
- ・日本の市民記者は暇な時間をつかって記事を書くのだから、既存のジャーナリズムとの質の差は歴然であり、そのようなものを社会は評価しないのは当然である。
- ・日本の市民記者は自らの楽しみと自己実現のために記事を書くのだから、独りよがりのものが多く、読者の支持を得にくい。

一方、私が市民記者をして感じた市民参加型ジャーナリズムの問題点は、以下になる。

- ・日本は同一性の高い社会なので、発言することで自分の存在をしめさなくても、社会の構成員として認められる。逆に、自らを主張すると、異分子として自分の属する集団から弾き出される可能性がある。

- ・公平中立であるべきというジャーナリズムの概念が、他者の悲しみも自分の悲しみとする善良なる市民感情と乖離している。
- ・誹謗中傷であるかどうかは、司法機関によって事実性・真実性が争われることによって決定する。一般市民には、裁判に関わる費用(経費・時間)を支払う余裕はないから、市民記者が世の中の物事を批判するためにはかなりの覚悟が強いられる。
- ・実名で記事を書くと、掲示板やコメント欄にさまざまな反響がある。なかには市民記者を喜ばせるものもあるが、市民記者を怒らせるばかりでなく、市民記者本人や家族の生活を脅かす場合もないとはいえない。ネット上のできごととはわりきれないような危機的事態もある。そういうものにひるんでしまって、市民が記者を書きにくい。
- ・実名・匿名など署名に関わる混乱。トレーサビリティの確保および、複数人へのなりすましなどへの対策の不備。
- ・運営に関する透明性の確保がなされていないので、市民記者が媒体にたいして疑心暗鬼になっている。
- ・編集権が権力として機能し、市民記者が運営システムなどに意見をいづらい。
- ・市民記者同士の横のつながりができにくい。(多様な意見の並立が難しい。日本人は無意識のうちに、合議や合意を求めてしまう。)
- ・市民記者が参加型ジャーナリズムに加わって記事を書いても、受け手の側は旧来の読者のままである。つまり、読者のほとんどは記事に対して賛成も反対もしめさない。TB やコメントをつける機能はあるが、反応する人のほとんどは、記事に意義を唱える人だ。

ネガティブな分析の進行である。

だが、その一方で、市民参加型ジャーナリズムが日本に必要でないと言断する人は一人として、いないのである。

ならば、問題点を解決し、市民参加型ジャーナリズムが日本社会の有効なツールとして機能するようなシステムを作り出せばいい。私は、「インターネットは、無責任な日本人を続出させる」などと、大宅壮一を真似て、したり顔をするのを好まない。

06_09〔情報は民主主義の通貨である〕

ラルフ・ネーダー氏は「情報は民主主義の通貨である」と語ったという。法律家からスタートし、消費者運動、市民運動、はては大統領選出馬まで、彼の活動の幅は広い。

彼の言葉を私流に解釈するならば、「民主主義のすべての構成員が情報を発信することによってのみ、健全な民主主義が運営される」。

現実には、物を言いたくない人もいるだろうし、ITリテラシーはおろか、国語力さえもたない人もいる。破綻のないメディアの文章になれた人には素人以前の文章と感じられたり、テーマや切り口についても、意味のない、つまらぬことしか思えるものも多いかもしれない。

しかし、そんなものであろうと、情報は情報、通貨は通貨なのである。もし、苦々しい手触りに囚われて、それらを参加型ジャーナリズムから放逐するなら、メディアそのものが崩壊していくだろう。

現状は悪貨が良貨を駆逐する状態であっても、悪貨がひとりの個性から発せられた一枚のコインであれば、それを認めねばならぬ。それが民主主義だ。

一円を笑うものは一円に泣く。そのことわざが 21 世紀の民主主義にもいえるのではないか。

06_10〔すでに成功した市民記者メディアは存在する。〕

コミュニケーションツールとして無限の可能性を秘めているインターネットといえども、ユーザーは限定された与えられたメニューの中から、自分の好みにあったものを利用してに過ぎない。

インターネットユーザーは、既存のコミュニケーションの枠を越えて自由にふるまっている錯覚に陥るが、極めて限定的な自由度しかもっていない。いまの市民参加型ジャーナリズムの状況も同様で、せいぜい従業員食堂で A 定食か B 定食かの選択がある程度に過ぎない。だから、みんな従業員食堂で食べないで、会社外の店で食べたり、御弁当を持ってきたりする…。個人ブログや各種 BBS で自分の意見を主張しているとうことだ。

そう考えてみると、市民参加型ジャーナリズムの範疇を広げてみることも可能。そして、すでに成功している市民参加型ジャーナリズムは少なからず存在する。

わたしが注目する、無名市民の書き込みが隆盛なサイトの代表的なものは、以下である。

- ・カカクコム
- ・2ちゃんねる
- ・みんなの就職活動日記

それぞれのサイトが、書く人間の心をとらえて書き込みが盛ん。書き込む人の数十倍、数百倍も読むだけの人がいることを考えると、すでに大きなパワーを獲得している。

電気製品などはカカクコムで価格や評判を確認してから購入する習慣が一般的になっている。そのムーブメントを企業の側も無視することができない。一時期は自社へのバッシ

ングを恐れてホームページの掲示板を閉鎖していた企業が、今度は、自社製品のブログでコミュニティを形成して、ユーザー拡大をめざしている。(だが、そういう御手盛り企業ブログは、始まる前から終わっていると、私には感じられる。勿論、解決策はあるのだが、それは、広報のレベルを越えて、会社の経営スタイルまで変革させることを前提とするから、なかなか難しいことだろう。)

2ちゃんねるも賛否両論の掲示板ではあるが、そこに集まった人たちのスケールをはや社会は否定できない。電車男など、もう一時のブームという範疇を超えている。

また、「みんなの就職活動日記」は、就職面接という密室のできごとをオープンにするという画期的な出来事。もちろん、内定を諦めた人たちが書き込むのだろうが、彼らの指摘によって、その会社の評価や評判が落ち、内定辞退者が続出するのでは、企業としても見逃すことはできない。

これらに私が注目する点は、そういうサイトに書き込む動機が、あくまでも私情だということ。組織やビジネスを離れて、自らの価値観と判断力で書き込みをする。そこに確固たる個を感じて誇らしいのだ。

逆に、そういうサイトにやらせや関係者がお世辞めいたコメントが書き込まれると、その匂いをかぎ付けた人たちがいっせいに非難する。きっと、消費動機・消費行動・就職活動を伴っていない人間の無責任な発言に嫌悪しての行為だ。

私は、書き込む人たちの、何物にもとらわれずにいたいという気持ちに、すがすがしささえ感じている。

確かな個が日本には存在する。カクコム、2ちゃんねるなどの隆盛をみると、その数はけっしてマイナーな数字ではない。ならば、そういう確固たる個たちが、参加型ジャーナリズムに加われないのは、参加型ジャーナリズムが、彼らにふさわしいメディアの形を提供できていない。それしか考えられない。

日本ならではの確固たる個たちのダンディズムに、「名乗ることを潔しとしない」ことがある。対価を求めずに、社会を正道に導くことを促す。そういうダンディズムに異論のない人は多いだろう。慈善活動であっても、売名行為と非難される日本の精神的風土の裏側は、そういうこと。だから、匿名、すなわち無責任と蔑むのも早計だろう。

06_11〔和をもって尊しとなす日本人〕

日本人の国民性を、聖徳太子の「和をもって尊しとなす」の十七条の憲法に求め、日本人が議論そのものを嫌う傾向があり、市民参加型ジャーナリズムは成立しないという考え

がある。

最近の歴史研究では、厩戸の皇子は存在したが、聖徳太子はいなかったという説が有力だという。

それはともかく、何故聖徳太子は、「和をもって尊となし」という言葉を残したのだろうか。

答えは明白である。当時の社会にいさかや戦争が続発していたからである。社会に和があふれていたなら、聖徳太子は和のことなど話題にするはずがないのだ。

時代は下るが、板垣退助が「板垣死すとも、自由は死せず」と言ったという。もっとも、これも周りの人のつくり話という説が有力...。まあ、真実として解釈するなら、板垣退助が死んだら、自由民権運動も終わってしまうと思ったから、そういう言葉を残したのだろう。また、5.15事件の犬飼首相は、「話せば分かる」と言って銃弾に倒れた。死者に鞭を打つようだが、話しても分からないから殺されたのだ。

つまり、言葉とは本来、現実を追うものではなく、現実に向かうものなのだ。ペンは剣よりも強しと言ってみたところで、ペンを持って決闘に挑んだ人を見たことはない。「和をもって尊となし」の精神が宿った日本で、戦乱はなかったのか。集団の中で内乱はなかったと考えれば、論理のほころびが見えてくる。

06_12〔日本社会の民族的同質性の高さが原因〕

アメリカなど他民族国家で文化的に同質性の低い社会では、お互いの異質性は当然のことなのであまり気にならない。構成員たちは、お互いの異質性には目をつぶり、お互いの限られた同質性を見つけ出し、共有することによって融和し・親睦を深める。

一方、日本は単一民族国家であり、文化的に同質性の高い社会である。そこではお互いが同じであることは当然のことだから、御互いの些細な違いが気になり、それが構成員同士のわだかまりにつながる。

そういう経験の蓄積から、同質性の高いコミュニティーにおいて、その構成員たちは自らの他者との差異を隠そうとするようになる。

かたやアメリカのような異質性の高い地域では、個が自分の立場を確保しようとするとき、自分の異質性を主張することが必要となる。異質性の高い社会では主張することによってのみ、自己の存在が明らかになるからだ。主張しない個は無視され、あたかも存在しないかのように扱われてしまう。

日本では、個が自分の立場を確保するために、自分の特異性を主張すると、その異質性によって集団から弾き出されてしまう。いわゆる、出る杭は打たれるという奴である。

とはいえ、日本においても個の充実がないわけではないし、特異的な個を社会に反映さ

せたいという無意識も存在するから、「相手の気持ちを察する」とか「あうんの呼吸」などというもので、人事や社会の方向が決められていくのだと思う。

アメリカを国際社会といいかえてもいいが、集団の異質性・同質性は、個のアイデンティティーの確保に関わる大きな問題だ。そして、それは異質性・同質性のそれぞれについてどのように基準を置くかで、まったく変わってしまう。また、現代において、社会はさまざまなカテゴリーや規模のものが重なり合いながら営まれているから、ことは単純ではない。

たとえば、私の属する社会・集団のことを考えても、日本という社会、地域社会、娘の保護者の社会、ビジネスマンとしての社会、性別、年代などさまざまな社会・集団に含まれていると思う。そして、それぞれの中で、集団の異質性と同質性は異なり、個の存在もマジョリティーの側にいたりマイナーな存在だったりする。

つまりは、日本を同質性の高い国家であると決め付けてしまうところに、論の乱暴さがあり、それがひいては「和をもって尊なし」という思い込みにつながっていく。

平均な人間などどこにもいないし、平凡な人間などどこにもいない。そのことをすべての日本人が体験しているはずなのに、教育関係者をはじめとして、十ぱ一からげにして扱っている。

犯罪を犯した卒業生を平凡な生徒と言うのならまだしも、目の前の子どもたちのことを平凡な子などと形容する校長がいたなら、その人は盲目であるばかりでなく、冷血漢でもある。

とても荒っぽい思考が、日本人は同質性の高い社会だという社会通念を高めている。

日本の社会が同質性の高い社会だとしても、それは国際社会や多民族国家に比べての話であって、日本の社会を単独で見れば、貧富の差、地域の差、個性の差、性別の差、宗教の差などがあり、けっして同質性が高いとは言い切れないのだ。

私は、インターネットにおける市民参加型メディアが、多様な異質性を認める方向で運営されるならば、市民参加型ジャーナリズムは成立すると考える。

その場合の障壁の一つは、日本人の行動パターンのひとつとして、安易にまとめや合議・合意を求める性癖だ。

たとえば、ブログにおいて、意見が並立することを念頭に開発されたトラックバックにしても、いつしか当事者同士で論争がはじまってしまう。本来は、それぞれのブログの読み手たちが妥当性を判断すべきなのに、いつしかブログの書き手同士が戦いをはじめてしまう。そして、始まった戦いは勝負がつくまで繰り広げられる。これなどは同質性幻想から日本人が逃げ切れていないことの現われだろう。

煎じ詰めれば、人と人は分かり合えない - - -。そういう諦念のうえにしか、新しい市民参加型ジャーナリズムが成立しないと、私は考えている。

06_13〔肩書きを捨てれば、誰でも市民記者になれる。〕

私が考える市民参加型ジャーナリズムの定義は、「メディアや組織の特権的な地位を背景に個が発信することに、背を向けた行為」である。

たとえば、小泉首相には、総理大臣の立場での発言と私人としての発言がある。彼が、息子の俳優が出演した番組の感想を述べるのは、私人としての発言であって総理大臣としての発言ではない。

発想を転換すれば、いままで無名の市民が発言することが市民参加型ジャーナリズムであるとばかり考えてきたが、すでにメディア発信力を持っている有名人であっても、そのパワーの源泉であるメディアや組織からの決別を表明することで、独立した市民に戻って、市民参加型ジャーナリズムに加わることも、市民参加型ジャーナリズムのひとつの形であると考えられる。そして、それが市民参加型ジャーナリズムを早期に実現するための近道でもある。

ところが、日本の民主主義をあるべき姿に導くべきはずの既存のジャーナリストたちは、いまだどうしたているのか。

彼らのうちのほとんどは無視を決め込んでいたが、その一部は、市民参加型ジャーナリズムにケチをつける。素人の書いた文章にケチをつけることに何の意味があるのか…。

見方を変えると、市民記者たちは既存のジャーナリズムの受け手でもある。だから、既存のジャーナリストたちにとってのお客さんと敵対表明をすることは、長期的にみれば大きなデメリットがあるに違いないのだが。

既存メディアの編集委員である湯川氏は、彼が市民参加型ジャーナリズムに注目したのは、自分の職業が将来もあるのかどうか、そのことを突き詰めた不安感だと、素直に認めている。ならばやるべきことはもっとあるはずだ。

彼らが、自らの特権的に得た能力で、市民記者の援護をすれば、ニュース全体に関する一般の興味も盛りあがるに違いないし、それはけっして悪いことじゃない。

日経新聞(2006.02.06 朝刊「ネットと文明」)によれば、天気予報の民間企業・ウェザー社は、登録会員1万名に観測用ピーカを配布して、3ヶ月に渡って降雨量を測定したことがある。アメダスの設置場所は全国に1300箇所だというのが、インターネットの登場で、僅かな費用でケタ違いのデータが市民から集めることができるのだ。積雪に関して、愛知県では気象庁の観測は名古屋市の一点だが、ある雪の日、ウェザー社には80通のデータが寄せられた。市民の情報は信頼性できないとの意見もあるだろうが、どんなデータにも誤差はつきもので、それは、気象庁のプロフェッショナルが行ったとしても、誤差はゼロに

ならない。

天気予報に起きたことが、一般のジャーナリズムに広がっていかないわけではない。

既存のメディア人たちが、みずからの特権に気づき、その特権にあぐらを書いている自分を反省する。そういう既存のメディア側の行動が、今後の市民参加型ジャーナリズムを成立させるための大きな要因になるのではないだろうか。

06_14〔市民記者は自分の経験を書く〕

何故、私が市民参加型ジャーナリズムにこだわっているのか。

私は映画の学校を卒業してから、テレビ・ラジオ・舞台などの仕事を経て、現在はビジネス関係の映像の制作をしてきた。修行時代は、ドラマなど人間の喜怒哀楽といった感情を扱う仕事だった。だが、ディレクターとなってからは、企業にとって有益な情報をいかに効率的に伝達するか。そして、伝達するだけでなく、それを消費行動などに結びつけるかということを目標に映像をつくってきた。

テレビやラジオでは受け手が感動したり、納得すればそれで成功。だが、ビジネスの世界では、受け手が行動を起こさなければクライアントを満足させない。その意味では、私にとってのコンテンツの意味は、大手メディアの住人たちが考える情報よりも、より実利性・ツール性が高いとあってよいだろう。基本的な感覚として、納得しておしまい。感動しておしまいというメディアのあり方に不満がある。だから、私のホームページやブログや市民記者媒体の記事では、受け手である読者が何かの行動を促すキッカケとなるようなものでない場合には記事を書かない。

ただし、それは理想であって、筆力不足で未完成で掲載された記事もあるし、諸般の事情によって、描写しかできなかったものもある。

さて、私がブログをスタートしたキッカケは次のよう…。

私は娘の公園デビュー以来、さまざまな子育てに接してきた。その経験から、こういう子育てをすべきであるということがなんとなく分かってきたし、こういう子育てをした人は、こういう子どもになるということも明らかになってくる。

ある日、うちの娘があるクラスメートの女の子にいじめられて保育園に行きたくないという。保育園のいじめなんて、どっちが悪いという話ではない。いじめる方もいじめられる方もそれぞれの理由や問題を抱えているはず。そこで、娘の保育園のクラスメートの女の子のお母さんに、相談を持ちかけた。私は、うちの娘がいじめに弱い気持ちも打ち明けたし、そういう争いがこどもの心を育てていくから、双方の親が情報を共有して、まずは静かに見守るべきであるという私の気持ちも訴えた。

だが、結果は最悪。何日かたったお迎えのとき、そのお母さんのご主人が私を睨みつけた。私は、彼に近寄っていき、彼の怒りの理由を聞いた。彼の言い分は、「俺の女房に文句を言うな」そんなことだったと思う。

私は私なりに、自分の経験を披露して、こういうことをすると、こうなりますよ。と提案したつもりだった。だが、私の提案は娘をとりまくコミュニケーションを悪化させることにしかなかった。

同じようなことが、娘の成長にしたがって、さまざまな場所で起きた。その典型は、小学校や児童館…。私はその都度起きている問題を指摘し、進むべき方向を示唆したが、交渉先のほとんどは問題が発生していることすら認めがらなかった。

経験で人の考えが変わる。私はそのことをおもしろいと思う。

たとえば、子育てをする前は、「怒ってはダメ。こどもは叱るの」という教育論が正しいと思っていた。だが、実際に子育てをしてみると、子供を怒らないなんてことはまず無理。そして、叱るという行為は、アルプスの少女ハイジのロッテンマイヤーさんじゃないが、とっても冷たい行為に思えてくる。

勿論、怒るにも程度が必要。怒った場合にはその倍の愛情を注ぐ必要があったり、さまざまな注意が必要。それでもなお、怒るといのは、親の喜怒哀楽を見せることだから、すばらしいこと。もし、親が自分の喜怒哀楽をみせずに子育てをしていたとしたら、そのコミュニケーションは歪んでいるに違いない。

私は、現実社会で、自分のまわりから、口コミ的に情報を発信することが実生活に支障を巻き起こすのなら、インターネットを使って、ある程度距離を持った人たちに情報を伝達することで、少しでも日本の子育てのあり様を変えようと思った。だから、私が子育ての話 personal ブログに書くことはネタ(匿名な事象で事実性は保障されない)ではない。

自分の経験から、他者に助言する。経験は事実であり、意見でないから、口論にはならないはず。でも、現実はそうではなかった。経験から導き出した考えに、相手は不快になったり、反論する。そして、起きている事実さえ、認めない。まさに袋小路に迷い込んだようだった。

もちろん、無名の自分が日本の社会を変えることなんかできるはずはないし、そう思うことは傲慢だ。でも、10年ぐらい続けてみて、俺はやってみたけどダメだったんだ。と、娘に嘆くことはできる。ジョン・レノンだって、世界に平和をもたらすことはできなかったんだから、それでいい。やらない理由にはならない。

そのようにして、ホームページをはじめたし、ブログをはじめた。そして、ブログを書き始めてようやく1年。ブログの記事が700に近づいた頃、なるべく多くの読者と出会いたい。そういう気持ちからライブドアの呼びかけに応じて市民記者に応募したのだ。

06_15〔個人ブログと市民参加型ジャーナリズムの違いは、オーソライズされているかどうかである〕

実は、生活者でありながら記事を書くことは誰でもできる。

問題は、生活者でありながら読者を持つこと。これがなかなかできない。それを可能にするのが、市民参加型ジャーナリズム。

市民参加型メディアがオーソライズすることによって、市民記事を多くの人に読んでもらうことができる。

それが個人ブログと市民参加型ジャーナリズムの違いである。

ホリエモンは安価で記事が集められればいいのか。と、嘯いていたが、それは経営者の論理でしかない。市民の側にとっての論理は別にある。市民にとって一番重要なことは健全な民主主義的な世の中が続くこと。その実践の具体的な手段として、市民参加型ジャーナリズムが重要な地位を占めることは間違いない。

とするならば、プロフェッショナルなブロガー(職能で記事を書く人)を集めるのが市民参加型ジャーナリズムではない。

また、主義主張のとりことなっている活動家たちの主戦場になるのが市民参加型ジャーナリズムでもない。(とはいえ、彼らを拒絶するのも市民参加型ジャーナリズムではないが...)

06_16〔市民記者は妙好人〕

私は、鈴木大拙氏の著作「妙好人」のような市井の叡智を集めたものが、市民参加型ジャーナリズムの理想だと思っている。著作の中での妙好人は、私の祖母と同じ、加賀の農家のおばあさんだったが、平成日本においては、労働者・生活者・消費者だと核心する。

妙好人とは、念仏を唱えることが生活の中の一部となっている市井の人たちとでもいうのだろうか。大拙氏は、経を読み、長年修行した位の高い僧よりも、妙好人の方が仏教の本質を理解していて、魂のグレードも高いことがあると紹介した。

私が市民参加型ジャーナリズムに求めるのは、魚屋のご主人が魚屋の記事を書くこと。ただ、ここが微妙な話なのだが、魚屋のご主人がジャーナリストになるのではない。魚屋のご主人が魚屋のご主人のまま記事を書くことが重要。

勿論、魚屋のご主人が魚屋の商いの傍ら記事を書くのだから、商いに支障がでないとも

限らない。市民参加型ジャーナリズム媒体は、魚屋のご主人が安心して書けるようなシステムを構築すべき。間違っても、ライブドアのように「実名でなければ真実の報道はありえない」などと乱暴に主張してはならない。

私たちは雪印という日本の大企業が瓦解した事件を経験している。社会悪ともいえる一企業の悪事を暴いたのは、西宮冷蔵という独立した倉庫業者の主だった。彼は自分の倉庫で悪事が行われていることを許せなかった。だから勇気を持ってマスコミに顧客の事件を告発した。だが、そのことは、大阪の商い道徳からいえば、違和感があったのだろう。彼の会社は営業がいきづまり、彼の人生は大きく挫折した。

このようなことが頻発するならば、社会正義を貫く人は居なくなり、社会には不正があふれるようになるばかりだ。

たしかに西宮冷蔵の主は短慮であった。だが、彼の勇断をつかって大企業の社会悪を糾弾し、社会をあるべき状態に導いていったマスコミや行政が、彼を見殺しにするのは非情すぎる。せめて市民社会は、彼の勇気を讃えることをすべきではないか。市民参加型ジャーナリズム媒体が知恵を出し合い、工夫することによって、告発者の被害を最小限に留めることができる。告発者が英雄になることを望まないならば、それほど難しいことではない。

06_17〔市民記者はスーパーマンだ〕

世田谷区にはオンブズマン活動に熱心なパン屋さんがある。彼は、熱心なあまり、パン屋さんでありながら地方議員になってしまった。たしかにパン屋のご主人のまま物を言う市民になったともいえるのだが、彼のお店は、物を言うパン屋さんになってしまって、もう市井の市民ではなくなってしまった。いうなればパン屋さんの地方議員。彼の市民オンブズマン活動を尊敬する人たちもいるが、市井の市民感覚とは、距離感ができてしまっている。

私がイメージするのは、サラリーマンのクラーク・ケント氏が背広を脱ぐとスーパーマンに変身すること。さえないクラーク氏を知る人は、仰ぎ見るスーパーマンを彼だと思う人はいない。彼の彼女だけ「おやっ」と首をかしげる。そんな世界 - - -。

そして、クラーク氏本人も有名になること、ヒーローになって、普通人としての生活を乱されることを欲しない。

アメリカ人の人生の目標は英雄になることだというのが、スーパーマンのストーリーを見る限り、そう単純ではないと思えてくる。太平洋無着陸横断で英雄になったリンドバーク

の一家がその後、誘拐事件という悲劇に見舞われた。そういうアメリカ国民の記憶の影響もあるに違いない。

市民が社会悪と戦う場合、その戦いは人生の長い時間から比べればほんの一瞬の出来事だと思う。その一瞬のために、告発者や情報提供者が自分の人生でコツコツと積み上げてきたすべてを失うのだとしたら、誰もそんなことは望まない。だから、それを阻止するシステムが構築されない限り、市民参加型ジャーナリズムは隆盛しない。

思えば、ウルトラマンは3分しか戦わないし、科学特捜隊のハヤタ隊員もさえない若手隊員といった位置づけだった。クラーク氏もハヤタ隊員も、ヒーローという特異な人物ではなく、善良な市民が持つべき当然の資質。悪と戦う勇気を心に秘めていたのだ。

善良な市民であれば、いつでもスーパーマンになれる。人々にそう思わせることができるのが、インターネットの可能性だし、そういう勇気の受け皿が市民参加型ジャーナリズム媒体のあるべき姿なのだ。

06_18〔市民参加型ジャーナリズムのスタイル〕

私が考える市民参加型ジャーナリズムの記事の一般的なタイプは、ニュースショーなどでスタジオと回線からつながれたテレビでの現場からのレポートだ。

現場のレポーターは、客観的な立場から現場をレポートするが、最終的にはスタジオのアンカーマンから感想を聞かれ、自分の意見を述べる。そういう按配が標準であって、新聞の三面記事のような記者の視点はおろか、記者が存在さえしないような記事は興ざめだと思う。そして、記者の中には、木村太郎氏や田原総一朗氏のように自分の意見を大々的に述べる記者もいる。

たんなる感想でも記事としては成立するのだろうが、私は感想だけの記事は書かない。そう読んでもらえなければ自分の筆力を反省するしかないのだが、たとえテレビ番組を取り上げる場合でも、問題点を指摘し、現状の改善を求める取り上げ方をする。反論は恐れず、自分なりの解決策を提出する。

テレビ番組の社会的な影響力を考えれば、問題を指摘することは意味があると思う。ただそれだけでいいのだろうか。解決策の提示でやっと記事の有用性が完結する。そうでなければ、市民が重い腰をあげて参加する意味もない。

足尾鉍毒事件の田中正造をあげるまでもないが、市民が声をあげるとき、なんらかの切実さをはらんでいなければ、浅薄であり、批判も必至。もし、市民記者が自分の感想を述べることだけで終わってしまうのなら、それは有名になりたいという自分の欲望に他者を巻き込むこととでしかない。それを全否定はしないが、そういう記事が横溢したメデ

ィアの有用性は低い。

日本人は四季とともに生活しているから、花鳥風月を記事にすることもいいだろう。また、そういうものは新人市民記者がはじめて記事をあげるには格好の題材だと思う。でも、だからといって、そういうものばかりでメディアを埋め尽くされたら、メディアの価値は地に落ち、無力化するに違いない。

06_19〔匿名は篤志のあらわれ〕

市民参加型ジャーナリズムは、たとえば、駅のホームの階段の下で困っている車椅子の人を、みんなで力を合わせてホームまで持ち上げるようなこと。そんなときに名乗る人なんかいない。誰か人に親切にしたときに名乗るような人は、ちょっとおかしな人。

たしかに、功名心のために動く人も世の中にはいる。でも逆に、立場にしばられて発言できないだけでなく、「目立ちたくないから発言しない」、「売名行為と思われるから発言しない」という人も多い。

匿名にする理由は、名前を知らずことがはばかられる恥知らずのゆえではなく、「名乗るに及ばず」という個人のプライドの現れの場合もあるのだ。

06_20〔マズローの説は疑わしい〕

市民記者は余った時間に記事を書くから、既存のマスコミと対峙するような勢力にはならない。と。マズローの欲望段階説をひきあいに出し、衣食足りた人が市民記事を投稿するのであって、記事数が少ないのは登録者が日々の生活に忙殺されているからだと言う人がいる。

だが、私はそうは思わない。

作詞家・小説家のなかにし礼氏は、「豊かな世の中でしか芸術は必要とされない」という言葉に反発している。彼は著作の中で次のように述べている。満州からの引揚船の中で、りんごの歌を聴いた。何もかも失い茫然自失した彼の心は、その明るい歌詞に反発した。だが、次第に、辛い状況を乗り越えるために、日本中の人たちが必死に歌っていることに気づいたという。りんごの歌が芸術かどうかは分からない。だが、カラオケのCMではないが、辛いときほど歌いたいのだ。

たしかにレーニンは大金持ちだったし、太宰治は東北の金持ちのボンボンだった。だが、

それでも尚、生活が安穩としている人しか書かない、書こうとしないというのは、間違っていると思えてならない。

そして、国民的な歌や文学作品が生まれるときは、そのほとんどが、その国家が存亡の危機にさらされたときということを歴史が証明している。

いまの日本が平和であり、生活に困らない豊かな社会と考える人も多いだろう。だが、それは一部の富裕層に属している人たちの意見に過ぎない。リストラで自殺する人、会社が倒産して自殺する人。そのような社会の現実を知っている若者たちが大人の社会に入っていこうとせず、NEETを決め込むのも当然のことと思える。

外国と比べることも意味はない。否、外国と比べるならば、私たちの国が理想の国とは程遠いことを、出生率の低下が端的にあらわしていると考えすることはできないだろうか。

市民記者とは、誰かに向かって歌いたい人である。カラオケルームで一人歌いたいような人は、個人ブログでかまわない。沢山の人に向かって歌うための訓練として、ブログで修行している人もいるだろう。

勿論、個人ブロガーのままに社会的に意義がある情報発信をしたい人はいるだろうから、それは市民記者媒体とコラボレーションをすればいい。

もしマズローの説にしたがって、市民記者の記事の投稿が、自らの自己実現を第一目標にされるなら、市民参加型ジャーナリズムなど必要ない。

それは、本質的に生活のために収入を得ることをアリバイにして営まれるプロのジャーナリズムと大差ないと考えるからだ。

06_21〔市民は何のために生きるか〕

人間は自分のために生きるものである。そう素直に考えてはいないだろうか。

私が育った昭和 30 年代は、おせっかいでうっとうしいんだけど憎めない近所のおばさんやおじさんがたくさんいました。やれ「スイカを切った」、「赤飯を炊いた」と、近所の子ども集めて振舞うおばさん。子どもが危ない遊びをしているのを見て本気で叱っているおじさん。

昔はそういう、人間の善意に根ざした自然発生的な地域コミュニティがあった。

しかし、昨今では地域コミュニティが崩壊したため、個人がそれぞれの生活の快適さや欲望の充足のことだけを考え始め、自分のためにしか生きることができなくなりました。でも、人のため、地域のため、世間のために何かをしたいという善意は人の心に満ち満ちている。それは、自然災害が起こるたびに自然発生的に起こるボランティアのうねりで実感できる。

では、何故、地域コミュニティが崩壊したのか。

私は、その原因のひとつに「私人のプライバシー権の乱用。および、その拡大解釈」があるのではないかと考えている。

人づきあいが始まれば、摩擦するのは当然のこと。そして、そういう摩擦を乗り越えたときに御互いに対する理解が深まる。しかし、プライバシー権の過度の尊重という概念が、人付き合いへの勇気のなさに言い訳をあたえている。

それは、フラットな人間関係の場合に顕著だ。地域社会や小学校の保護者会など、フラットな横並びの集団では、摩擦が起きても、それが集団全体の問題に発展しない。結果として、摩擦の当事者が集団から隔離されるだけ。これがコミュニティー崩壊の実態だと思う。

横丁から雷親父が消えたと嘆く人がいるが、そういう人たちに限って雷親父を擁護しない。他人の子を叱っても、周囲ら白眼視されるばかりでは、雷親父が地域コミュニティーから放逐されてもあたりまえだ。

現実の日本がそう動いていても、自分の実生活とは遠いところでなら、あるべき姿を模索できる。それが、インターネット上でこそ成立できる市民参加型ジャーナリズムの存在意義だと思っている。

06_22〔市民はニュースを提供できるのか〕

ジャーナリズムが扱う情報を、社会構成員にとっての有価値情報と定義しつつも、それだけではニュースにはならない。何もよりも「新しい」ことが、ニュースである重要な資格である。

だが、実際はどうだろうか。

情報提供者である市民記者が匿名にしたり、ハンドルネームで特定されないようなことをしても、記事の当事者が読めば、「あいつが自分のことが書いている」と分かってしまう。そうなれば、市民記者と記事の当事者である取材対象との良好なコミュニケーションの継続は難しくなる。

例えば、子供を学校に通わせている親が教育問題に直面したとしよう。だが子供を学校に通わせている限り、学校の批判記事は書けない。いくら社会正義を貫いたと胸を張っても、娘が自分の帰属するコミュニティーから異分子としての扱いを受けるのなら、メリットはない。書けるのは、娘が卒業してからである。

市民にとってそれ程までニュースを書くことは難しい。

何年か経って、自分に損害が及ばない頃になってようやくニュースをリリースすることができる。時間を経過しても、その記事にニュースバリューがある情報は、限られるに違いない。

ただし、時間が経過しても、過去の情報が魅力を失わない場合もある。それは、個人という文脈で情報がリリースされる場合だ。

たしかにニュースという意味では価値が薄くなっているのかもしれないが、個人というエッセンスを加えれば数ヵ月後、数年後の情報であったとしても、ニュースバリューはありつづける。何よりも個が個としての文脈を持ち続けてインターネットに存在することが重要だと思えてならない。

06_23〔市民記者は客観的になれない〕

さて、市民記者にとって、ジャーナリストが持つべき矜持である中立性・客観性はどのようなのか。

私は自分のふるまいに対して、誠実で内省的であれば、それでよいと思っている。市民記者の記事そのものがインテグレートされたものである必要はないと思う。市民記者の書く記事は、その個の持つバイアスを元に提出される。それをインテグレートするのは読み手であったり、それを編集・掲載する側だと思う。

市民参加型ジャーナリズムの記事に質を求めるという議論があるが、質の中身について定義をせぬままに論をすすめるのは、私は浅薄だと思う。私が市民記者の記事に求めるのは、旬の記事、鮮度の高い記事である。それは、対象との時間的な距離、心理的な距離の両方においてだ。

もし、批判の尻馬に乗って、市民記者たちが平行取材や資料集めなどを始めてしまったら、記事としての新鮮さは失われてしまうのは勿論、市民記者が市民であることやめ、出来の悪いジャーナリストになるだけ。それこそ、その記事の質が問われてしまう。

市民記者が紡ぐべきは、ローデータとしての輝きのある記事である。市民が市民のまま記事を書くことが、市民参加型ジャーナリズムであって、市民がジャーナリストになることではない。

市民は、自らに謙虚に、自分に起きたことを正直に誠実に語ればそれでいい。情報を発信する市民は、嘘を書かないということさえ守れば主観的であっても許される。ただし、自らの主観の存在を明示したうえでのことだ。

中立や客観はメディアがめざせばいいことで、市民記者にはその必要はない。

市民記者の書く記事は、落語・目黒のさんまのようであってはならないのだ。

06_24〔市民記者は、私怨を公憤に高める〕

私怨を公憤に高めるとは、玉井義臣氏(あしなが育英会会長)が大切にしていた言葉だ。私と公。

Private と Public.

プライベートが個人ブログなら、パブリックは市民参加型ジャーナリズムだと思う。

市民参加型ジャーナリズムで個人的なことを扱うことは問題がないが、その扱いについては、市民記者と市民メディアの両方の「公憤に高める」作業が不可欠であると思われる。

06_25〔市民記者は、巨悪から取り組むことはできない〕

ロッキード事件などを通じて、東京地検の凄腕検事だった堀田力氏は、「まず、巨悪から手をつける」と述懐していたのを覚えている。

世の中に不正や腐敗は数知れずあるから、何をあつかってもいいのかもしれない。だが、東京地検というパブリックな立場では、易きところから手をつけるのでは、悪事をはたらいている側からいえば不公平になる。そこで、より大きな不正や腐敗から手をつけることによって、公平さを保とうということだ。

一方、市民記者は生活者でしかないから、世の中の巨悪から手をつけるなどということとは不可能。だから、自分の身近な出来事で、自分の手に追える範囲の内容を扱うことしかできないくても、仕方のないこと。

逆に言えば、自分の専門外のことは扱わない勇気を持つことが大事だ。イノセントなどといえば体裁はつくのかもしれないが、自分の専門外に首をつっこみ、取材対象の意見を鵜呑みにし、結果として読者を惑わしてしまう可能性もある。

もっとも、市民記者がイノセントで読者を惑わしてしまう場合は仕方がない。だが、市民記者媒体がイノセントという訳にはいかぬ。だから、誤った時点で、訂正や謝罪を行うのが適切な処置だし、そういうことを通じて、市民記者媒体の信頼性・誠実性が築かれていくに違いない。

06_26〔市民記者は「平和の時の平和論」に参加してはならぬ〕

言論人に多くのファンを持った山本夏彦氏は、「平和の時に平和を語ることは、戦争のときに戦争を賛美するのと同じくらい楽なこと」だと指摘していた。

夏彦氏は、与謝野晶子の「君死に給うことなかれ」は反戦歌ではないと書いてもいる。

弟よ。あなたは商家の生まれであり、武士(軍人)ではないのですから、生きて帰ってきなさい。というだけのこと。軍人が戦争で死ぬことの是非は勿論、戦争を否定も肯定もしていない。夏彦氏は、自分は安全なところに隠れていて、自らの主義主張のために他人の作品を捻じ曲げて利用する。反戦歌にしたてあげることの卑怯さに我慢がならなかったのだろう。

平和のために祈ることしかできない人は祈ればいい。だが、平和のために行動できる権力を持った人たちが、その優柔不断さのために責任をまっとうせず、祈りをささげる場合もある。反戦を主張する人は、自分の存在をかけて堂々と自分の言葉で語ればいいと、夏彦氏は言いたかったのだろう。

06_27〔市民記者が書く記事はトリガーである〕

市民記者の書く記事はトリガー。引き鉄である。

さまざまところで、ライブドアのパブリックジャーナリズムの批判が渦巻いている。長野県知事の田中康夫氏は編集者のスキルが上げればすこしはましになると書いている。また、ほとんどのマスコミ人たちは、記事の品質が低いので、まだまだ評価に値しないと断定している。

だが、市民記者が書く記事はトリガーなのである。

雪印を告発した西宮冷蔵の社長は、雪印の企業腐敗を暴露していくトリガーの役目をはたしたのであって、彼の市民ジャーナリズムが企業腐敗を糾弾し、それが成就して、雪印という大企業グループが瓦解したのではない。トリガー。たんなるピストルの引き金の役割を果たしたに過ぎない。

トリガーなのにも関わらず、マスコミは、西宮の社長が雪印に反旗を翻したように報道したし、社長もそのように怒りを露にしたからから、大阪の商人道にもとるといって、社長は人生を台無しにされた。

市民記者の記事はトリガーなのに、である。そのことを心得ないで、旧来の文章の作法に合致しないと糾弾する行為は、自らをアンシャンレージュの一員であるそしりをまぬかれないだろう。

いっそのこと、そのことを明確にあらわすしめすために2ちゃんねるのような文体を成立させるしかないのだろうか。 奇異な文体になるかもしれないが、新しい文体の存在意義はある。国際社会の共通語として英語の役割が増加し、英語を母国語としない人たちのために、文法を簡略化した新しい英語の必要性が指摘されている。市民参加型ジャーナリズムにも、同じようなことが必要なかもしれない。

06_28〔市民記者はジャンヌ・ダルク。彼女を火あぶりにしてはいけない。〕

コンテンツではない、トリガー。

既存のマスコミ人は、コンテンツとして評価に値しないなどしたり顔でいるべきではなく、すくなくともトリガーであることを評価をすべきなのだ。そして、市民記者の側は、トリガーをコンテンツに昇華させるべき努力をすればいいのである。

市民記者運動とは、ピクトル・ユーゴーを見つける作業ではなく、ジャンヌ・ダルクを見つける作業なのです。

そして、西宮冷蔵の社長が人生を台無しにしたように、無名の市民が、ジャンヌ・ダルクのような火あぶりの刑に処せられるのならば、誰も市民記者活動などやろうとしないに決まっている。

市民が記事を書くことが健全な民主主義にとって必要だとするならば、オルレアンの少女が自由の戦士になったような、そんなシステムをつくってあげればいいだけのことなのです。

そして、本物の市民は、ジャンヌのような名声を求めていない。否、名声を求めぬということによってのみ、その市民の本質を押し量ることができるのだ。

07_市民参加型ジャーナリズムを成立させるもの

07_01〔情報格差がマーチャントを成立させる〕

〔写真〕

北前船の奉納絵馬。

北前船主の館・右近家(福井県河野村)の資料より

私の父方の祖先を3代遡ると、北陸の北前貿易の船主にたどり着く。北前貿易とは、北海道や東北地方と上方地方を中心に行われた商品流通のことである。その貿易の繁栄期は江戸後期から明治中期にかけたといわれている。これは憶測でしかないが、私の遠い祖先は、四国の水軍の一派だったが、何らかの事情で瀬戸内海から、北陸の地に本拠地を移したのだろう。そして、太平の世の江戸時代にあっても、船乗りの血は騒ぎ、市民文化が勃興した江戸時代後期に、大きな商いを求めて北前貿易に取り組んだに違いない。

さて、北前貿易で巨万の富を得た我がご先祖のビジネスモデルはどういうことだったのだろうか。

北海道で、昆布や干魚を安く仕入れる。そして、上方で高く売る。灘で酒を仕入れる。それを別の場所で高く売る。当時は、消費地の商人が生産地での仕入れ値を知ることではできなかったから、商才さえ長けていれば、一回の航海での利益は莫大だった。私のご先祖は生産地と消費地の情報格差を利用したビジネスだったといえる。

ただし、「板一枚下は地獄」との言葉もあるように、船商いにはつねに難破の危険と隣りあわせ。そこで、北陸地方の船主たちが声を掛け合い相互扶助のための組織もつくりだしていた。

だが、世の中が変化するのは、百年前も同じこと。明治になると、鉄道も整備されるから、船だけが輸送の手段ではなくなる。明治中期に下降線をたどる北前貿易だから、その原因は鉄道のせいと考える向きもあろうかと思うがそうではない。大量輸送の手段として今でも船便が利用されていることを見ると、それは決定的な理由ではない。

問題は電報である。

船が生産地を離れ消費地に着く前に、仕入れ価格も仕入れ量も消費地に知れ渡っていれば、商売は上がった。消費地の商人や消費者が、生産地での価格を知れば、それまで、自分たちがいかに多額のお金を支払ってきたことが馬鹿らしくなる。その不満は、北前船の船主たちに向けられ、船主たちの利益はじりじりと減っていく。

結果、貿易業だった船主たちは、単なる輸送業としての意味しか事実上もたなくなる。それでも、船主たちは難破のリスクが避けられないから、海運業そのものに魅力がなくなっていく。海運業は、総合商社の一部門としてしかビジネスとしてのうまみがなくなっていく。

情報格差があることで、北前貿易はビジネスとして成立していたのだが、情報格差がなくなったとき、北前貿易はビジネスとしての成立しなくなったのだ。

そこで、私のご先祖たちはどうしたか。明治 29 年、彼らは損害保険業を始めるのである。北陸の船主たちを発起人にして、海上保険の会社を設立することで、家業の存続を図ったのである。その会社は合従連衡を経て現在も存続している。これは、彼らに先見の明があったことを示しているといえよう。

このエピソードは子孫である私にとって重要であるばかりでなく、インターネットを取り巻く今後を考える上でも重要な示唆を果たすと考えている。

思えば、商業とは、個と個の間に何らかの格差がある場合に成立する営みだ。だが、商行為が継続して行われていくと、次第にその格差は減少していき、商いとしてのメリットはなくなる。

その一方で、商人は商行為のためにインフラや人材を整備してきた訳だから、商いが利益を生み出さなくなると、損益だけが残る。

だが、そこで怯んではいけない。機転の利いた我がご祖先是、北前貿易の船主という貿易におけるハードなインフラの提供者であったが、情報格差がなくなったとき、保険とい

うソフトなインフラの提供者として存続を図ったのである。

先に紹介したように、国立情報学研究所の曾根原教授は、インターネットビジネスを成立させる要件として、「消費の競合性」と「所有の排他性」をあげている。

また、インターネットに限らず、情報コンテンツ産業一般に、情報のコモディティー(日用品)化もすすんでいる。

1年前に1500円で劇場公開映画だったものが、半年後にはレンタルビデオ店で400円を出せば借りて見ることができる。劇場公開から1年も経てば、地上波のテレビで無料で見ることができる。ただ、ここで見失っていけないのは、そのことで映画業界が苦しんでいない。逆にユーザーを増やすことで潤っているということだ。

コモディティー化を懸念するのは、旧来のビジネスモデルに昔のままの夢を見ている人たちであって、利益がでているかどうかは分からないが、とりあえずは仕事が回っている。そして、何よりもユーザーはハッピーなのだ。

つまり、情報格差を拡散するスパンが限りなく小さくなっているのが21世紀の日本であり、そこでビジネスを成立させるのは難しいともいえるが、我がご先祖が切り開いたような道はあるし、そういう存在を生み出すことが、広く社会のメリットでもあると考えるのです。

07_02〔市民参加型ジャーナリズムが必要とするシステムは、すべてのインターネット・ユーザーに必要なもの〕

市民参加型ジャーナリズムが、ビジネスであるべきか、そうでないのかは図りかねるが、ビジネスとして成立しなければその繁栄はありえない。勿論、繁栄とは市民記者が記事を書くことである。

私がブログを通じた感覚では、読む人が100人いてもその中で書く人は一人いるかいないかである。だから、書く人を100人集めたかったら、一万人の読む人が母集団として必要だと思う。つまり、それだけのアクセス数が集まらなければ市民参加型ジャーナリズムは成立しない。また、100人の書く人たちにしただって、わが身に危険が及ぶならば継続して書くことはないだろう。

ライブドアのパブリックジャーナリズムは一日2万アクセスと豪語しているが、母集団がその数ならば、登録しようとした人たちが数百人なのは、とても妥当な数字である。そして、その数百人のうち実際に書くことを続けているのは五十人を下る。その原因は、書く意欲を持った人たちが安心して書ける環境を市民記者媒体が容易できていないからだろう。

市民が安心して記事を書ける環境を整えるには、市民記者媒体は何をすればいいのか。

私は、それが、個人情報エージェントと保険制度だと確信している。そして、それは、市民参加型ジャーナリズムに対してのみ言えることではなく、すべてのインターネットユーザーに必要なシステムだと考えている。

個人エージェントは、インターネットに関わる匿名性の不備を補完するもの。そして、インシュランス(保険制度)は、バッシングや損害補償裁判などに個人が対応できるようにするためのものだ。

インターネットの社会への浸透はめざましい、いまやインターネットをバーチャルな世界と揶揄することも死語と化している。

そして、これからはますますインターネット上になんらかの形で個人が存在しなければ社会的に認められない時代が来るだろう。しかし、私が指摘したふたつのシステムが整備されていないと、個たちはインターネットにサイトやブログを立ち上げることは勿論、コメントを書き込むこともできない。

2006年の時点では、mixi や GREE など SNS が限定されたコミュニティーを提供することで、ある程度の成果を得ているが、それが普及すればするほど、いままで内側だと思っていたものが、外側に感じられるようになる。そのようにして、次々に SNS が生まれては使い古されていくというイタチごっこが繰り返されるだけだろう。

とするならば、個人情報エージェントとインシュランスが、市民参加型ジャーナリズムだけでなく、すべてのインターネットユーザーに必要なと思われる。

確かに、勇気は市民記者に求められるもののひとつである。だが、それをメディアを提供する側はけっして言うてはならぬのだ。

07_03〔匿名が必ずしも悪とはいえない〕

インターネットが社会から信頼されない理由のひとつに、匿名での BBS への書き込みがあげられる。スパムメールやアラシにしても、匿名での大量発信がその原因のひとつ、といえるかもしれぬ。でも、本当に匿名は不道徳で悪なのだろうか。

市場は、見えざる手によって動かされていると形容されることがあるが、見えざる手こそ、匿名の大量の個のことだ。日本の民主主義もその根本は、匿名による選挙によって成立していることを忘れてはならない。アンケートなどで匿名にすると、無責任な批判が集まる。かといって、記名にしたのでは本音の意見は集まらない。

国会では記名投票が行われるが、記名投票では国会議員たちは派閥や党利に縛られて自由な投票はできないので、投票結果は歪になる。国民の意見もマスコミの意見も郵政民営化を望んでいたのに、国会だけは違っていた。これなども匿名でないことの弊害といえないだろうか。

勿論、代議制なのだから、自分を選んでくれた選挙民たちのために自分の投票行動を明らかにすることも当然という考え方もあるだろう。だが、野田聖子議員のように、民営化反対で当選したにもかかわらず、選挙民を裏切って、民営化賛成に投票する。そういう輩もいるくらいだから、記名であることよりも、他から影響を受けない匿名のほうが、匿名による無責任になるという危惧よりも、ましであるといえないだろうか。

07_04〔実名は、個の誠実を誘発するか〕

一方、実名とは何を意味するのだろうか。果たして、実名こそが責任ある発言を保障するのだろうか。これもはなはだ疑わしい。

実名は生活と不可分であり、もし発言することによって実生活に影響が出るならば、誰も発言などするはずはない。あるべき姿を目指すべきなのが社会のありようだが、誰も自分の生活への影響を恐れて率直な意見を述べないならば、世の中はあらぬ方向へ進んでしまう。

私は、それをクレームマーケティングと呼んでいる。ステークホルダーたちは、自らの利害のためにしか発言しない。これではクレマーと形容される消費者と根本的に同じだ。関係者の中の良識の分子ではなく、クレマーな分子たちだけで議論がすすめられる。学者といえども、国も財団などから資金を提供してもらっている限り、研究の途中で研究の無価値さが見つかったといっても、その自説を披露する自由はない。そのことで自分の家族は勿論、同僚たちの生活の安定にも影響を及ぼすならば、当然のことだろう。

では、それでも発言をする人。実生活への影響も省みずに発言する人はどういう人なのだろうか。それは正義感がつよく、自分の生活を危うくすることも省みない人たちなのだろうか。

確かにそういう立派な人もいるかもしれない。

だが、私には、そういう人たちの多くは、捨てるものがない人、守るべき人のない人だと思えてならない。また、言うことでしか、自分のアイデンティティーが保てない人。言うことでしか、まわりの人たちを守っていけない人たちではないだろうか。

そういう人たちの言説が、社会全体をあるべき方向にすすめる動因になるのだろうか。私には極めて疑問に思えてならない。

百歩譲って、社会にとって、実名が責任と信頼をうるためのものだとしたら、それは個にとっては、まったくもって厄介なことになる。

余程のことがない限り、日本の戸籍法では、ひとつの名前を一生名乗り続けなければならない。名前を使い続けていけば当然のように毀誉褒貶が生じる。私は、そういうものを乗り越えていくのが人生であるが、乗り越えられない事態に巻き込まれることもないとはいえない。

個人や法人に破産制度があり、やり直しがきくように、情報化社会においても、傷ついた自分の名前というブランドをゼロからやり直す制度があってもいい。だが、それが実名では難しい。

近代以前は、幼名があり、元服して名前を戴き、大家になると、襲名などをした。それは、それぞれの個が過去を清算して生まれ変わることだともいえる。そして、それがとても自然であった。

足軽の日吉丸が、太閤秀吉になる。生き方が新しい名を生み出し、名が人を成長させる。出世魚ではないが、そういうことがあったと思う。

勿論、一生同じ名前と呼ばれ続ける人たちもいた。それらは使用人であったり、身分のない人たち。彼らに共通するのは社会的な責任を果たすような立場や地位になかったことだ。

四民平等の世の中では、社会的な責任から無縁な人など存在しない。9.11事件以降は、すべての人が自分の潔白を証明する義務も責任も負う。そういう時代が訪れている。

我がご先祖の御当主たちは、代々同じ名前を名乗ってきた。だが、明治以降、そういうものが、古臭く感じられたのか、または、古色蒼然たる権左衛門という名前が嫌だったのか、戸籍名を名乗るようになっていった。だが、トレーサビリティが、実名至上主義の理由とするならば、高度情報化社会の実現により、トレーサビリティは確保できるのだから、実名にこだわるのが、時代遅れの考え方になっていると思う。だが、近代以降、トレーサビリティの確保を第一の理由にして改名がほとんど不可能になっている - - -。

少年隊が四十歳を過ぎても少年隊なのはカッコいいことかもしれぬが、卓球の愛ちゃんなどは、そろそろお年頃だし、福原選手や愛さんと呼んであげないと失礼だと思う。何しろ彼女は、芸能人ではなく、こちらの側が知っているとしても、知り合いではないのだから、なれなれしくするのはどうかと思う。とはいえ、広告活動をして活動費を稼いでいる彼女だから、そうもいえないのが現実でもある。

要は、トレーサビリティを確保すればよいのであって、実名である必要はない。トレーサビリティの確保を主な理由として、実名主義を貫くのは、旧態然としている。西洋に見習った制度なのかもしれないが、どうやら日本人の社会風土には合致しないような気がする。

07_05〔トレーサビリティの確保〕

トレーサビリティさえ保持していれば、実名であろうと匿名(ただし固定ハンドルネーム)であろうと、問題はない。

たとえばファミリーレストランが混雑していて、リストに名前を書いて待つ場合を考えてみればいい。ウケを狙って、芸能人や有名人の名前を書く。それでも、ほんの数十分の間トレーサビリティが当事者間で保たれていれば何の問題はない。そもそも実名である必要はないし、実名であることで、そこに行動の記録が残ってしまうことを嫌うなら、ギャグではなく、当然の行動である。

芸能人などは、本名と芸名を使い分けることによって、自分が仕事なのか、プライベートなのかを明確に分けることができる。世田谷のデパートの店内放送で、「蒲池法子さん...」というアナウンスがあったのを憶えているが、芸能人としての松田聖子ではなく、私人としての彼女が買い物をしているのだから、騒めきたってはいけない。そう、自制した記憶がある。

同様に、病院の待合室で薬を待っているとき、有名人の名前が呼ばれると、待合室全体が色めき立つことがある。もちろん、そういうときの殆どは同姓同名の人。実名だから仕方ないと、本人は諦めているのかもしれないが、病院といっても基本的にファミレスで順番を待っているのと同じこと。トレーサビリティさえ確保されていれば、名前などどうでもいいのである。

07_06〔技術に強いられた未来なんていない〕

日経新聞の経済教室というコラムの「通信と放送。融合を探る」(2005.02.09)で、スタンフォード日本センター研究所の中村伊知哉氏は、「コンテンツに関する規律も、通信と放送という単純な区分けより、消費者保護、プライバシー保護などきめ細かい多面的な社会要請にこたえる仕組みが必要だ」と指摘している。中村氏は、日本型の法体系を構築すべきだと訴えている。

私が考えている個人情報エージェントは、中村氏が考えている未来像と同じストーリーボードの上に載っているようだ。

同じコラムの前日では、早稲田大学の亀山渉教授は次のように指摘している。

現代の通信技術は、1830年代のモールの電信機の発明。1870年代のベルによる電話の発明。そして、1890年代のマルコーニによる無線電信の発明によって始まった。

そして、電線の終端間で情報をやり取りするのが通信の基本となり、電波により発信元から同心円上に情報を伝わるのを放送。つまり、一対多の情報通信形態が生まれた。

それがいま、マルチメディア符号化技術によって、パソコンに乗っかる情報も、携帯電話に乗る情報も、テレビ画面に載る情報もほとんど同じ符号でつくられているので、情報コンテンツが、情報メディアの特性に限定されることはなくなった。それぞれのメディアがアナログでつながっていたマルチメディアの時代の次に来た、マルチキャストの時代の真相だ。今後、マルチキャストの意味は、単に同時に発信されるということではなく、

コンテンツがシームレスに各メディアで扱われることを意味していくに違いない。

さて、そのようにコンテンツがメディア特性の括りから開放されたとき、コンテンツのありようはどう変わっていくのか。

亀山教授は、あるべき方向性を明記していないが、こういうテーゼの書き方こそ、技術に導かれた未来ではなく、技術の独走を許さない未来。技術を利用する未来をつくるべき提案だと思える。そして、それはコミュニケーションのあり様の歴史を、電気通信技術の誕生前に戻すことに他ならないと、暗に示していると、私には感じられる。

いまいる時代が現代であり、その前が近代である。近代は技術革新による時代の進化を絶対善とする時代だったと思うが、21世紀の現代が近代と違うものだとするならば、それは技術に流されない時代だと思う。

祖父や父に学んでいけばよい時代は終わった。祖父や遠い祖先に学ぶ時期が来ているのかもしれない。

07_07〔トレーサビリティの確保が重要なのはネットだけではない〕

いま、個のトレーサビリティは何で確保されているのだろうか。それは言うまでもなく、姓名と住所である。生年月日や、電話番号も重要な役割を果たす場合もあるだろう。顔写真もトレーサビリティの役目を果たす。究極のトレーサビリティは、生体認証なのだろうが、これはまた、意味が違ってくる。

その一方で、個人情報保護法の実施により、個人情報がクローズドしていき、何をもってトレーサビリティを確保するのか、混乱していく時期に違いない。なぜなら、個人情報保護法を厳格に施行したら、世の中からすべての固有名詞は消え、検索性はおろか、個別性も失われた、のっぺらぼうな社会になってしまう。

07_08〔守られるべき個は、ネット上にのみ存在するのではない〕

先代貴乃花の死去にともなう、若貴兄弟の取材合戦のことを思い出してほしい。

あのとき、若乃花夫人の美恵子さんは、「つらい立場だな」と呟いたのを憶えている。世田谷の高級住宅地に住み、こどもを有名私立小学校に通わせている彼女の友人たちには、芸能人も多い。彼女の脳裏には、マスコミの取材攻勢に盾になって守ってくれる事務所の不在を嘆いていたに違いない。事務所の不在は貴乃花親方も同じで、彼も自分でコメントせざるをえなかった。

その点、ジャニーズ事務所はすばらしい。圧倒的なファンを持つタレントを多数抱えながら、情報を巧みに操作している。インターネット上に写真がほとんど流布していないことをみても、とらえどころのないインターネットだからといって、何もできないわけではないことを如実に示している。

そのパワーの源泉とは何かといわれれば、視聴率を稼ぐタレントを持つことで、テレビ局よりも有利に立つこと。そして、取材拒否を匂わせることで、芸能マスコミの口も封じていることだと思う。そして、無名の多くのファンたちがそれを支持し、ネット全体を監視していることを忘れてはならない。

これは決して悪いことではなくて、それぞれの個が身を守るためには当然の営みだと思われる。勿論、それは、彼らが独善的でない限りにおいてという但し書きがつくことは言うまでもないが…。

個人がインターネット上に存在したからと言って、すぐにジャニーズ事務所のタレントのような注目度を得ることはないが、基本的には、同じことだ。

ジャニーズ事務所が無名の若者をブレイクさせるためのシステムに過ぎないと見るのは浅薄だ。

「ユー、ステージに乗っちゃいなよ。」そんな誘い言葉で、ジャニー喜多川氏は、素人の男の子たちを芸能人に仕立てていく。それは、素材のままの個が、メディアというフレームの中を与えられることによって魅力を増し、世の中で評価されることを体現している。

もし、ジャニーズの男の子たちが、系統だった訓練の果てにステージや画面に登場していたなら、そういうアーティフィシャルなものを、自然主義を好む日本の大衆は支持しないのではないだろうか。勿論、歌舞伎や落語など長年の訓練を必要として、その上で自己を開放することではじめて芸として成立する分野もある。だが、表層的な大衆芸能のメインストリームはそういうものと対峙しているのではないか。

つまり、あるがままの個があるがままの個としてメディアに登場するためには、ジャニーズ事務所のようなエージェントがどうしても必要なのだ。

別の見方をすれば、ジャニーズ事務所は、個をオーソライズすることで、パッケージ化して商品価値を生み出しているともいえる。じつは、商品化するだけでなく、商品流通の細部にわたって面倒を見ている。だから、人気が出たからといって、タレントが自分の取り分が少ないと不平を言うのは間違っている。独立した彼らが一様に苦境に陥るのは、事務所の嫌がらせが理由ではなく、販路のない商品たちがたどる当然の結果なのだ。

07_09 [インターネットといえども、個は単独で存在できない]

では、それぞれの個たちが自らの文章技術を整え、他者を批判せずに自分の意見を主張するやり方を習得したうえで、インターネットに登場すれば問題はないのだろうか。

だが、そのようなもので形成されたインターネットの世界をイメージするとどうなるだろうか。きっと御世辞や生ぬるい論議ばかりで、フォーカスの鈍い個ばかりが存在することになる。それでは、メディア全体の価値もない。

あるべき自由な多様性を備えたメディアとは、堂々と+100 という個が存在するのと同時に、-100 と宣言する個がいること。メディアの健全性を総和が0になることだとすれば、

0である個が沢山集まったの0ではメディアが存在する意味はない。

賢明なる知の持ち主は、自説の中で+10と-10を作り出し、結果としての0を生み出すかもしれないが、それも、のりつっこみに等しい予定調和であり、個と個が生み出す緊張から紡ぎ出される可能性が無限な未来とは、程遠いものだと感じてならない。

ならば、メディアの健全性を保つためにも個人情報エージェントは必要なのだ。

07_10〔リアルワールドのニーズもある個人情報エージェント〕

実は、個人情報エージェントの必要性は、リアルな世界でも起きている。

いままでは、郵便配達といえば、郵便局だった。いまはそれだけではない。さまざまな業者が郵便局の料金体系よりも安価な価格設定をして郵便配達業務を行っている。だが、ここに問題がある。

5年以上の前のことになるが、我が家は引越しをした、当然のように、郵便局に転居先通知を提出した。万事抜かりのない我が妻であるから、免許証は勿論、何から何まで、住所変更をしたはずである。それでも支障が起きた。

それは、娘が加入していた英語教育教材のバースデープレゼントである。月例の機関紙は定期的に配達されていたし、問題はなかった。だが、年に一度のバースデープレゼントのビデオテープが配達されなかった。娘の誕生日から数ヶ月経ってようやくそのことに気づき、教材会社に連絡をとり、再発送をしてもらったが、そういうことはいたるところで起きているのだろう。

実際問題、我が家にも、転居前の住人あての通信販売のカタログなどが大量に届く。内容は明らかだし、送付元に文句を言う手間も面倒なのでそのままにしておく。そんなものだ。

問題は、情報ターミナルの役割を果たしていた郵便局のパワーが減じてきたこと。そして、今後、個人情報の保護の流れの中で、役所が個人情報の扱いに慎重になると、日常生活に不都合が生まれてくると予想できることだ。

バッシングされた経験のある私が個人情報保護の無意味さを訴えるのは妙な話だが、個人情報漏れていることも悪いことではない。

出産に際しては、ベビー用品のカタログが届き、小学校入学に際しては、学用品のリストが届く。量によっては迷惑だなと感じることもあるけれど、ゴミ捨てが有料ならまだしも、ゴミ箱に捨てる手間ぐらいは許容の範囲ではないか。

07_11〔個人情報エージェントはセキュリティーのためのフィルターではない〕

やはりインターネットは、西洋人たちが拵えたものだと思う。なぜなら、自分たちの価

値観を対象化できない。つまり、自分の属する価値観を絶対視し、その尺度にあわぬものは切り捨てる。フィルターという考えはそういうことだと思う。

フィルタリングされたものは廃棄されるのが基本だ。

一方、日本の篩(ふるい)はどうか。日本固有の「もったいない」精神によって、ふるいとされたものが捨てられることはない。どこまでもリサイクルの時代なのだ。そして、さまざまな立場が共存して、それぞれがそれぞれの生をまっとうするのが日本的な心だと考える。

籠に乗る人、担ぐ人、そのまたわらじをつくる人。捨てたわらじを拾う人。

この俗諺の中で、一番楽ちんな人は、わらじを拾う人であって、籠に乗る人ではない。そういう考えが日本には巢食っている。

頑張っている人に、「精が出ますね」などという。これなども、「頑張ってますね」でも、「ご苦労様」でもない。頑張っている人と自分は別の存在と捉えて、自分は自分でわが道を行く気持ちの現われだろう。

人が頑張っているのを見たら、自分も頑張ろうと思うと思う。人が頑張っているのを見たら、手助けをしてあげようと思う。そういう言葉を吐かせる感情とは、まったく別のものが、かつての日本には横溢していたし、そういうものが日本社会の多様性を維持するために一役買って、のどかな日本の心的風景をつくっていた。

だが、いまの日本は、どこかの方向につっ走っていると感じている…。

冗談で、ウィルスの花火の映像を見たいなどと言う人はいるが、いまのインターネットの世界で、フィルターが排除したものに有用性がある可能性はほとんどないといいだろう。だが今後のいって、それが必ずしもそうかといわれれば疑問符をつけざるを得ない。

ならば、個人エージェントが必要とされる機能は、私書箱のように情報をためる機能だ。ストレージ容量が爆発的に拡大している状況からいえば、情報をためる機能だけで、配信する機能を持たぬのが一番安全である。間違っ捨ててるリスクよりも保存しているほうが、何があっても安心というわけだ。

いままではトレーサビリティを確保することが、トレースする側に主導権をもたれていた。だが、これからは、トレースされる側が主導権を持つ。

それが私の定義する個人情報エージェントの基本的な考え方だ。もちろん、自分の固定アドレスに配信設定をすることもできるし、捉え方はユーザー次第だ。

すると、個人情報エージェントは、フリーメールアドレスとほとんど同じになる。高度な情報分類&検索機能がついたフリーメールアドレス。これならば、クライアントであるユーザーが被害を受けることはないし、端末に依存しないモバイルツールでもある。

ならば、個人情報エージェントなどいらぬ。フリーアドレスでいいじゃないか。とい

う疑問が当然のようにわいてくるだろう。

しかし、決定的に違うことがある。それは、信頼性だ。

思えば、インターネットのすべての問題の根っこは、信頼性。それしかない。メディアの信頼性。コンテンツの信頼性。

発信元の信頼性。発信先の信頼性。そのすべての信頼性が保たれれば、完璧なユートピアな世界が現出する。

だが、よく考えてみると、リアルワールドの住人たちがインターネットに書き込んでいるのだから、インターネットだけが信頼に足る世界になるはずはない。

ならば、どこで折り合いをつけるか。そのさじ加減が重要だ。

フリーアドレスは、固定ハンドルネームと同じものだから、架空の名前でも登録できるし、一人の人間がいくつものアドレスを取得することもできる。だから、ビジネスなどでフリーアドレスを使っていると、信頼されない。

基本的には、自社の名前にドットコムをつけたドメインのアドレスを持っていることが、一番の信頼性を獲得するだろう。だが、スパムメールとは無縁ではない。

その一方で、ホームページやブログでの書き込みなど、アドレスの記入が必要な場合に、フリーアドレスを使えば、ネット上のアドレスから自動的にスパムメールを送るシステムの影響を減らすことができる。危機的な状況に陥ったらアドレスを捨てればよい。

私は、バッシングを受けてから、二種類の名刺をつくっている。ひとつは、ネットのオフ会などで配るフリーアドレスを記入したもの。もうひとつは、ビジネス用のアドレスだ。ほんとうならば、すべてをフリーアドレスにしていればいいようなものだが、フリーアドレスを使っていることが、自分を胡散臭くみせるような気がして、そうしている。

私はモバイルコンピュータを持ち運ぶ生活をしていないので、出張先ではホテルやインターネット喫茶を利用するのだが、フリーアドレスのほうが使い勝手がいい。しかし、信頼性のためにフリーアドレスをビジネスに使うことに躊躇している。

それはフリーアドレスがトレースする側にトレーサビリティを保障しないと印象づけると感じているからだ。

07_12〔フリーアドレスに信頼性を〕

フリーアドレスに信頼性を持たせるたくらみはすでにあって、早稲田大学が卒業生にアドレスを配布する制度などもそのひとつといえるだろう。Waseda-net は、卒業生と在校生のためのコミュニティをつくるとともに「生涯アドレス」を発行している。

これなどは、自分が早稲田の出身であることを顕示したい卒業生たちの気質をうまく利用していると感じる。卒業生というのはリアルな存在だから、信頼性も増す。

勿論、早稲田大学のブランドが信頼感の向上に寄与している。リアルな実体と何ら関連

付けられていないフリーアドレスよりも多くの信頼性を獲得できることは確かだ。

Waseda-net の運営者は、わざわざ生涯アドレスという名をつけているくらいだから、実名と同等のトレーサビリティを期待できる。もし、アドレスの主が所在不明になっても、同級生たちが、その消息を教えてくれる。そういう期待もできる。

とはいえ、早稲田大学のように、卒業生たちがプライドを持ち、自らの出自を明確にする人たちの集まりだけを想定していたのでは、健全なインターネットは成立しない。

そういうある種、選民的な思想は、SNS と同じだから、内なる世界だと思っていたものが、実は外でしかなかったというような季節が順繰りに巡ってくることでしかない。

早稲田大学の学生が起こしたスーパーフリーの事件にしたって、大学の大衆化の流れの中で、大学が学問のためのサクチュアリだった時代が終焉したことをしめしている。同志社大学の学生が小学生を刺殺した事件をみても、早稲田大学に固有な事象ではないことは明らか。大学大衆化の流れで、選民的な思想が崩れていくなら、それはそれでいいのだろう。

否、それよりも、もっと重要な視点として、民主主義を是とするこの世の中で、学問の府の大衆化が悪いと公言できるはずもないということだ。

大学は大衆とともにあるべきであって、大衆のさまざまな視点や問題を呑み込んで大学も運営されるべきである。

だから、学生への規律を厳しくしたり、モラル教育を施すことなどは愚の骨頂だと思われる。何よりも、大学に集まった人たちは、規律やモラルなどを求めて集まった人たちではない。

とすれば問題なのは、そういう大学のありようを無視して、その大学の出身者に一定上の御行儀のよさやモラルを求める企業の人事部や社会の方だといえよう。

大学という集合は、あくまでも入学試験というフィルターで内と外を分けたに過ぎないし、SNS も知り合いという規定で内と外を分けたに過ぎない。それ以上でもそれ以下でもないのだから、そこに何かを求めることも、共同幻想に囚われていることでしかない。

ならば、インターネットという地平に、フィルターという囲いをつくって、内なる世界をつくりあげ、そこに信頼性を構築するという試みは、根本的な解決にはならないと、容易に想像できる。

そして、何よりも、そういう思想が民主主義に背を向ける行為であり、インターネットの理想と相容れないのだ。

07_13〔個の境界領域を拡大するな〕

さて、内なる世界をつくる場合にもうひとつの問題がある。それは、内なる世界が自分の世界だと、その住人たちが錯覚することである。

アイランド現象とでもいうのだろうか、異分子がいない世界での議論は、自分たちの都

合のいい方向にエスカレートする。それが外の世界から歪であればあるほど、その乖離をその住人たちはその内なる世界に興奮を憶えるだろう。

だが、そういう住人たちもリアルな世界の住民でもあるのだから、外の世界と無縁でいられるはずはない。また、自他の境界領域が混濁してしまって、人格障害に陥る場合も否定できない。

その結果、極めて特殊な内なる世界で自己肯定感を深めた個が、外なる世界で暴発する。それは内なる世界と外界との乖離が深いほど、大きな問題に発展する。BBS に犯行予告などをするのは、このタイプ。

集団自殺などはもうひとつのタイプで、内なる世界が外界から閉じこもってしまって、悲劇を迎える。これなども、個が孤独のうちに、その存在の孤独に耐えていれば、悲劇は起こらなかったのではないかと、思えてならない。

悩みや苦しみをともにする人たちとの交流は楽しいし、癒されるのかもしれない。だが、それが癒しばかりに終始して、悩みや苦しみを克服する方向に向かわないのだとしたら、意味はない。悩みや苦しみを増長させていることでしかない。

インターネットの世界をセグメント分けすることは、そのソサエティーにとって最終的な解決策とはいえないし、個にとってもけっしていいこととはいえない。

だが、信頼性とセグメント分けは、表裏一体をなしている。とすれば、自分と他人の間に境界領域を設定することしか、信頼性を獲得する術はないのかれしれぬ。

ただ、ここで読み誤って欲しくないのは、この文章における私の用語の中での「信頼性」とは、善なるもの信頼性に限らないこと。

日常語の「信頼性」という言葉は、現代日本の公序良俗の概念のもとでの信頼性ではない。だから、善悪の判断が違う、宗教や慣習の中では、その信頼性という言葉の現す意味も変わってくる。

たとえば、家長が絶対的な権威を持つ社会では、親や兄弟のために嘘をつくことは悪ではない。一方、「嘘も方便」ということわざもある日本では、正直であることが尊ばれる社会。子や兄弟が正直に白状したことに、親が反発すれば、親のほうから社会から糾弾されるに違いない。家父長制の強い社会では、親兄弟の悪事を白状した子は、嘘をつかなかったことでそのコミュニティから抹殺されるとともに、社会から救済されることもない。

そのように考えた上での、信頼性とは、個が個としての文脈を明確に持ち、それを継続していることが保障されることに他ならない。

信頼度とは、継続性の保証の度合い。

私は、そのように、定義したいと思う。

ただし、個が確かな文脈を持っていたとしても、その文脈が外から見えなければ、その文脈に存在しないに等しい。

個の文脈の見つからないものに、文脈の継続性を保証するなどという概念は成立しないから、信頼などもありえない。

ここが大いなる問題なのである。

分かりやすく言うと次のようなことだ。

海外からのお客さんを東京観光に連れて行くこと場合を考える。だが、その人がどういう人(文脈)が分からない。

普通は、浅草や銀座や秋葉原など、善なる世界に連れて行くのが無難。だが、そのお客さんが悪なる世界やマニアックな世界に興味を持っていたらどうだろう。せっかくの東京滞在を刺激的に過ごしてもらうためには、そのお客さんを歌舞伎町の性風俗店や、中野ブロードウェイのフィギュアやコスプレやコミケのショップに連れて行くのもいい。

その方が、ガイドブックには載っていない東京を紹介できたと、私の満足感も強い。だが、現実にはなかなかそういう個の文脈を知ることはできない。

信頼性などといっても、いまいる自分たちのコミュニティの共同幻想の枠の中で夢想しているだけのことであって、そんなところにインターネットの成否を左右するような重要な議論のよりどころにすることは、はなから見当違いなのだ。

とするならば、健全なるインターネット運営のための基本条件は、次のよう....、

すべての個がしなやかに、たおやかにありながらも、個としての文脈を明確に持ち続けること。

そして、そのために必要なものが、個人情報エージェントが持つべき、もうひとつの機能、インシュランス(保険制度)である。

07_14〔インターネットで必要な保険とは何か〕

インターネット上の保険といっても、その内容は至極簡単なもの。保険会社の人間であれば、簡単に商品構成をパッケージ化できるに違いない。

保険項目のひとつは、インターネット上でバッシングされた場合の損害賠償や脅迫恐喝などをされた場合の警備などの費用の負担。

もうひとつは、インターネット上でバッシングしたと裁判をかけられた場合の裁判費用の負担である。

裁判制度は世の中に公平さを生み出しているのは事実だが、それも経済活動とは無縁ではない。つまり、裁判に関わる経済的・人間的・時間的な余裕がなければ裁判にはならな

い。勿論、それはつまらぬことが裁判になることで、裁判所の仕事を無用に増やさないと
いう効果があるのだが、経済的に余裕のない市民にとっては不公平になっているのは事実
だろう。

新聞や雑誌などが、社会に議論を発しているのも、そういうメディアを支える企業に経
済的な余裕があり、法務部を設け、専門的に対応する体制を整えているからだろう。

そういう後ろ盾がなければ、いかに文章力や分析力があっても、誰も自由にもの
を言うことなどできぬはずだ。

実は、訴訟を起こす側もそのことを分かっていて、言論を主張した個人ではなく、その
媒体そのものを訴える場合が多い。つまり、経済力のない個人ライターを訴訟の相手にし
て裁判に勝ったとしても、個人ライターが発行する不当手形を得るだけで、差し押さえ物
件もないのでは意味がない。だから、経済的に信頼性のある大会社を相手に訴訟を起こす
のだ。

だが、今後のことを考えるとどうだろう。

最近のさまざまなムーブメントを見ると、メディアの成熟を迎え、メディアの機能が分
化される方向にある。つまり、ディストリビューション機能、メディアディーリング機能、コ
ンテンツメイキング機能に分化する。

その場合、メディア自身がオーソライズしたという正確は薄れ、コンテンツの責任の所
在はコンテンツメーカーに集まっていく。その一方でコンテンツ制作の現場は、集団的な
制作から個人的な発信に近いへと移行していく。

これに企業などの営利や利害が絡んでいけば、トカゲの尻尾切りの、メディアが責任
を個に転嫁していくという傾向がすすむだろう。

だとするならば、個の互助会・協同組合としてのインシュランスがどうしても必要だと
考えるのです。

07_15〔個人情報エージェントの必要性〕

そして、個人情報エージェントの存在によって、インターネット上にひとつのセグメン
トが生まれる。

セグメントを切ることに疑問を呈してきた論理からいえば矛盾するのかもしれないが、
それこそ、無限のインターネットの有用性をあげるための唯一の方策だと思うのです。

個人情報エージェントのある世界では、個が文脈を持ち、提示することが、個の信頼性
のもとともなるし、コミュニティー全体の信頼にもつながる。

確かに、すべての個が独創的な存在であることは難しいのかもしれない。しかし、僅か
ながらの差分を意識し、自らのアイデンティティーの根拠とすることで、より多くの人が

ハッピーでいられる社会が構築できるのだと思うのです。

と同時に、そのことは、コピー&ペーストによって大量の複製物が流通してしまい、それが結果としてノイズとなっている弊害をも、乗り越えることにつながる。

オリジナルがあれば、それをどこかにストレージしておけばいい。極論をいえば、アクセスさえ確保されていれば、コピーなどは必要ない。そして、差分がないのなら、存在する意義もない。今後、多言語間の翻訳技術の向上を伴って、言語の表面的な解析を越えた、文章把握能力は高まっていくだろう。つまり、情報処理能力の極みでは、シンタクスやコンテキストを越えた、文章の伝えたいことそのものの相違にたどりつくことになるだろう。そして、その場合の差分とは何かと問われると、表現者にとって、極めて厳しい時代が訪れると思えてならない。

そう考えると、固有名詞の復活であり、実名の復権などという思わぬ結論も呼ぶのであるが、まずは、それは先のこととして捨象しておくべきことだろう。

08_コミュニケーション時代の終焉

08_01 [コミュニケーションの世代]

私は昭和34年の生まれだが、幼い頃、親戚連中が集まる法事などがあると、あのおじいさんは明治の男だ。とか、あいつは大正の生まれだから…。などという言葉聞いてきたような気がする。不幸か幸か、明治も大正もほとんどが鬼籍に去られた今となっては、そんなこともなつかしい昔話だ。

私が覚えている明治生まれの人の気質は、かくしゃくとしていて、独立自尊。容易に自分の意見を曲げない信念を持っていること。それに対して、大正生まれの人は、明治と昭和というふたつの時代には生まれたのが理由でもあるまいにどっちつかずであり、あまり信用がおけない感じ。大正生まれの政治家・中曽根康弘氏が風見鶏というニックネームをもらっていたのを憶えているが、そういうこと。

それに対して、明治人の典型とすることができる乃木希典は、生まれは嘉永年間の1849年だが、自分の信念を貫く明治の男のイメージがある。

市井の輩は武士道の範ともいえる彼のような責任のまっとうの仕方ができるはずもないが、彼の生き方を理想としていた時代が明治であり、その時代を生きた人たちであることは間違いない。勿論、戦中派である大正世代が戦争によって自己のアイデンティティを見失い、戦後においても自分たちの居所を見つけることに苦労したのだから、容易に大正世代を批判することもできない。

さて、そう考えてきたとき、いまの大多数を占める昭和の世代はどういう特質を持っているのだろうか。昭和一桁世代はすでにリタイアし、いま団塊の世代がリタイア目前にある。昭和一桁世代は戦時下で物資に貧しい幼少時代を経て、高度成長時代にイケイケドンドンを経験した。社会の成長期は実力がものを言う時代だから、努力が報われる時代でもあったろう。その後の団塊の世代もポスト不足に苦しめられた時代でもあるが、自らの消費活動によって大量消費を生み出した時代でもある。アメリカの置き土産である民主主義を日本にローカライズさせる時期は、さまざまな言論も許容されていたと思う。そういうムーブメントの中で学生運動が生まれ、もっとも過激な部分が非合法活動に発展し、警察が介入するとともに、社会的反発を生み出して、結果として許される言論や活動の範囲が自己規制されていったのではないか。

では、「もう戦後ではない」と首相が発言した1956年以降の世代はいかなる世代的な特徴を持っているのだろうか。

歴史は振り返ることではしか成立しないし、自分の姿を鏡で見たところで、客観的であることは不可能だから、虚しい分析ではしかないのかもしれないが、私は「世の中で一番大切なものは、コミュニケーションだ」と、刷り込まれた世代だと感じてならない。

そして、それは、平成の今も続いている。

08_02〔コミュニケーションの基本は挨拶なのか〕

挨拶がコミュニケーションの基本であることは誰もが納得するところである。

そういう社会通念にしたがって、小学校の国語の時間は勿論、朝礼での校長のお話やホームルームでも、挨拶の重要性が生徒たちに向かって繰り返し説かれる。だが、その主張の裏に、教員たちの個別の事情があると、私には思えてならない。

生徒が教員に挨拶することは、教員に対する従順さを示すことに他ならない。つまり、

生徒に挨拶を強いることは、教員への服従の強制であり、そういう生徒たちの従順さが、教員たちの第一目標である学級の円滑な運営のために不可欠といえるからだ。

たとえば、生徒たちの尊敬を集められない学校長が、「挨拶をしなければいけません」と主張する。だが、それは挨拶を求めているのではなく、自分への尊敬を求めているに過ぎない。

学校長は、自らのすべての言動によって生徒からの尊敬を獲得すればいいのだが、そういう資質のない輩はかりそめの尊敬である挨拶を求めるのだ。

挨拶とは、する方、される方、双方向のコミュニケーション。だから、私がしなくても、先方がすればいいし、こっちからしむければ、応えればいい。だが、私は、ある問題で対立関係にあった学校長と小学校の廊下ですれ違ったが、彼は私に挨拶をするどころか、見て見ぬふりをした。これなどは、挨拶が基本と説く教育者がやるべきことではないし、挨拶の意味とはその程度のことだと自らが証明していることだとも思える。

そういえば、グッチ裕三のコントに、芸能界の挨拶というのがあったと思う。

芸能界に入りたての新人は、スタジオ入りすると、先輩たちに明るく元気に「おはようございます」と挨拶をする。だが、数年もたつと新人は中堅になる。すると、タレントの挨拶も少し変化して、「おはようっす」となる。自分は挨拶をされる側ではないけれど、単純に挨拶する側じゃないとの抵抗の意志が表れたセリフ…。

そして、数十年のベテラン大御所は、挨拶もせず、新人から挨拶をされても「誰?」と応えるだけ。挨拶とは、そのコミュニティーにおける帰属意識や主従関係を示すためのものでしかないのである。

集団への帰属意識も相手への尊敬もない状況で挨拶を強いられる。こどもたちが理不尽さに耐えていることを私は理解する。

小学校の英語授業では、まず最初に習うことは、How do you do. や Hello がなどの挨拶が定番だろう。

だが、挨拶の常套句と自分の名前を教えること。そして、自分の趣味や好きな食べ物を相手に伝えることだけで、コミュニケーションといえるのだろうか。

勿論、初対面の相手と、こみ入った話題について議論することは危険だし、世の中の渡り方としては当然なのかもしれないが、それだけでいいとはどうしても思えない。

それに、もし挨拶がなかったらコミュニケーションはしないのかと考えると、答えは明白だ。挨拶がなくてもコミュニケーションは成立する。

では何が無かったらコミュニケーションは成立しないのかと言われたら、それはコミュニケーションの核ともいえる個の存在だ。挨拶には情報的な価値はないという結論になるのではないか。週刊誌の対談記事でも、「こんにちは」などという文面に会ったことはない。

08_03〔日本語は意味の含有率は低い〕

「三色ボールペンで読む日本語」や「声で出して読みたい日本語」で有名な斎藤孝氏は、日本語の文章には意味の含有率が低いと指摘している。問題は挨拶だけの問題ではない。「時下ますますご清栄のことお喜びもうしあげます」などという常套句も、字数はついやすが、英語で言えば、文頭の文字が大文字ぐらいの役目しかないのではないか。

私はメールを書くとき、手紙の本文は日常の些細などでもいいことを書き、伝えたいことを追伸にしたためることをよくする。この場合、私にとっても相手にとっても、手紙の本文自体にまったく意味がないことでもある。情報伝達でいえば、丁寧な挨拶であり、近況報告である。だが、近況報告に意味があるかといえば、それはあたりさわりのないことであって、送り手にとっても、受け手にとっても価値は薄い。

考えてみれば、そのような内容の薄い文章というのは、世の中に横溢している。読者の興味をひくことが条件のプロの文章はそれほどでもないが、そうでない世界では90%以上がその種の文章だといえるのではないだろうか。

小学校の広報誌に保護者が書いたこの一年の感想。具体的なエピソードに触れられることもなく、ちょっぴり頑張った自分へのわずかな賛美と、助けてくれたメンバーへの感謝の言葉で御茶を濁す。

小学校の保護者会活動は、子どもたちの安全で安心な生活のための潤滑油であって、そこから何かを生み出して、子どもたちの生活に波風が立つのなら、それは避けるべきだ。そういう文章を綴る側の気持ちは分かる。だが、そういうもので埋め尽くされた広報誌を読ませられる側はたまったものではない。

だが、原稿を依頼された場合、まず殆どの人がは当たり障りのない内容で字数を埋めることを目標にするだろう。また、世話になっている人たちの御世辞で字数を稼ぐ人も多い。これは、有名人がメディアに原稿を依頼された場合も散見する。

プロの文章家であっても、独自の意見を主張するのではなく、まわりの意見をいくつか紹介し、体よくまとめることでマス目を埋めている例も珍しいことではない。だが、それでは読まれるほうは、無駄な時間を消費させられるだけだ。

インターネットなら、いつでもオリジナルにあたるから、差分のない情報に意味はない。情報のインデックスとしては意味があるのかもしれないが、その場合でも、インデックスを引く意味を明確にすべきだ。

世の中には、情報を総合するばかりで差分を明確に主張しない文章があまりに多いのではないか。多くの人たちはそういう文章を書く事が、処世として当然のことだし、社会人として尊ばれると思っている。

でも、情報イノベーションが爆発的にすすむ21世紀。それでいいのでしょうか。

最近では、Semalyze(セマライズ) 日本語意味解析ソフトなどというものが存在する。そのサイトを覗くと次のように書いてある。

【意味や意図、文章の目的までも抽出可能】

・文章の目的が抽出できるので、リコメンドシステムにおいて「適切な商品斡旋」を行えます。

・文章の意図・目的が分かるので、文書管理システムにおいて「内容に即した文章管理」を行えます。

・意味、意図を解析できるので、「精度の高い要約」を行えます。

いままでの技術では、単語単位の解析しかできなかったが、今後は、文章単位・文脈単位の解析を自動的に行えるようになるということなのだろう。

これは、読み手にとってはとてもうれしいことだが、果たして書き手にとってはどういう意味を持つことなのだろうか。

この自動解析ソフトが、挨拶や季節の事柄を意味や意図として価値を認めるのだろうか。

Thank you very much.がTNXと略されるのがインターネットだ。字数を連ねなくても、顔文字の(^o^)マークだけで親しさを伝えることのできるのだ。ならば、今後は文章の質も大いに変わってくるに違いない。

08_04 [挨拶なんてくそくらえ]

娘の小学校では、校長が子どもたちにコミュニケーションの基本が挨拶などと、自慢げに語っている。だが、暢気に言っている時代なのだろうか。

確かにコミュニケーションにおいて波風が立たぬほうがいいに決まっている。だが、コミュニケーションの手触りのよさばかり求めている問題は解決しない。

たとえば拉致家族に関わる日朝交渉。日本政府はかの国の代表に挨拶をしたのでしょうか。私は、随員たちが挨拶するのはかまわないが、代表は挨拶をする必要はないと考えている。それは、弔意を表す手紙に時節の挨拶がいらぬのと同様の理由から。挨拶には丁寧や優しさの表現であることは勿論ですが、相手への服従の意味も少なからずある。だとするならば、挨拶に慎重になるべきときはある。

国際社会では、語学だけが堪能で内容のない人材が占める場所はなくなってしまった。挨拶だけが達者で、雑談はできるものの、確固たる自己を持ち、自説を主張し、他者の意見を聞き、交渉し、すすむべき道を探る。そういうことができなければ人間としての価値はない。そういう時代がやってきている。

日本人は、プリーズとサンキューを言い過ぎるとの批判があるが、原因は自己の尊厳を

放棄して挨拶を強いられる小学校での痛恨事にあるのではないかと推論することもできるのだ。

子どもたちが学ぶべきは、挨拶なしのコミュニケーションの持つ違和感に耐えながら、相手をいつくしむこと。そして、たとえ相手が自分と違う意見を述べたとしても、その相手を尊重し、耳を傾けること。そして、相手の語気がいかに荒くとも、自説を披露することを躊躇しないこと。そして、お互いの乖離がいかに果てしなくとも、継続した対話を続ける努力を惜しまないことである。

コミュニケーションにおいて小さな違和感に負けない勇気を持つこと。コミュニケーションにともなう恥ずかしさと戦うこと。そのことを子どもたちは学ぶべきであって、コミュニケーションの表面の手触りの良さだけを求めて挨拶の習得にやっきになってはいけないと思うのです。

十年も経てば、憎らしい先生が書いた原稿を、日本語意味解析ソフトにかけて、その先生の空虚さをあざ笑う生徒が出てくるのは間違いないでしょう。

そのときに、挨拶の意味はどうなっているのだろうか。きっと御互いが個として充実し、充実した個をコミュニケーションさせるための重要なツールとして、挨拶が再評価されているかもしれない。すくなくとも、今のような挨拶を重視するあまり、個を捨て去るようなまちがった教育が是正されていることは確かだろう。

08_05〔オタクとは、個とコミュニケーションを両立させた文化である〕

自分の意見を言うことは、少なからず自説に反対するものを生じてしまう。一方、反対するものがない意見ならば、意見を言う価値はない。ならば、波風を立ててまで自説を主張することは、個にとって価値はない。

だから、「ビミョー」と、訳の分からぬことを言ってやりすごす。だが、それでも尚、自分の意見を主張したい気持ちは残っているから、仕方なく、「私的にいえば…」などと口を濁す。

自分の口から出るものは、私の意見以外にはありえないのに、そのように言う。それは、私はこう思うと主張したいのではなく、これは私の世界の中の私の考えであって、私はその考えをあなたに強いることはしませんよ。という宣言なのです。

最近、電車男のメジャー展開により、認知されたオタク文化もその発生は同じこと。マニアの世界では、それぞれの個がマイ・ブームの住人である。それぞれが自分の熱狂の中にいるんだけど、自分の熱狂と周囲との温度差に絶望している。そういう彼らがイベントやオフ会で同じ領域のマニアと出会う。だが、彼らはお互いに自分のブームが自分中のものでしかないことを痛感しているし、その熱狂を自分の境界領域の外で共感することはうれしいけれど、境界領域の中に土足で踏み入れられて、その熱狂を台無しにされるの

は許すことができない。そういう複雑な思いが「おたく」と、同行の士でありながら、よそよそしく呼び合うコミュニケーションを誘発したのではないか。

俺様キングダムという個人ブログをやっている人がいるが、まさにそれぞれの個が独立国であって、絶対王政をひいている。でも、ここで勘違いしてはならないのは、彼らがコミュニケーションを望んでいないわけではけっしてないこと。

オタクと呼び合い、自らを俺様キングダムと自虐してみせるのは、コミュニケーションを求めている人たちの所作なのです。

08_06〔ディスコミュニケーションを理由に、個の対立を隠してはいけない〕

コミュニケーションをしようと思立ち、コミュニケーションを果たした結果、悲しいかな、意見の対立を見てしまった。そういう場合、私がどうするかと言えば、「なかなか意志の疎通が上手くいきませんで…」などと、論点をずらすことで事態の收拾をめざすこと。

意見の乖離が厳しく、折り合いがつかない場合は、コミュニケーションの不足のせいにする。それが単なる言い訳に過ぎないのは分かっているから、その後もコミュニケーションの向上を図らない。そこで仕方なく、議論も合意もせず、独断で結論を下すことになる。

別段、これは何も私に限ったことではなくて、世の中全般で行われていることではないでしょうか。

自分と他者の間に意見の乖離を見ると、すわ対立とってしまう。それがそもそも悪い。

顔かたちを見れば自分と他人は違うのだから、意見も違っていておかしいはずはない。逆にいえば、生まれも立場も違うのに意見が同じことに驚くべきなのだ。

そして、意見が異なる場合もそれはひとつの対立軸の上で、プラスとマイナスに別れているのではなく、無限の選択肢の中で並置されている。それが実際だと思うのです。

ゲシュタルト論理学ではありませんが、人間の頭とはどうしても単純化して、パターン化して物を考える習性があるようです。しかし、人間関係を円滑にするために考え方を変えることができれば、もっと楽に生きることができるのではないのでしょうか。

実は、それは一神教的な二元論から隔絶する八百万の神の国、日本ならではの考え方・多神教的多元論。

だから、日本人だったら、素直に自分の心に耳を澄ませば、自ずからそのような思いにいたるはずだと思えてならないのです。

08_07〔コミュニケーションの場を開いていれば、個の意見を尊重しているとするのは、メディア提供者の欺瞞である。〕

さて、21世紀は個の時代という論調も多いし、ベストセラーを予感させる梅田望夫氏の「ウェブ進化論」(ちくま書房)でも、総表現社会、脱エスタブリッシュメントなどとの

用語を使って、これからの時代は個が社会をひっぱっていくと論じている。だが本当にそうなのだろうか。

ブログが隆盛だが、そこに確固たる個はいるのだろうか。そう考えてみるとさびしい限りだ。

人気ブログの主だったホリエモンは退場してしまったが、マスコミのさまざまな論調を鵜呑みにすれば、はたして確固たる個だったかどうかとも疑わしい。

プロ野球改革で芯の強さを見せてくれた、古田敦也ヤクルト新監督は、ブログを書こうが書くまいが、すばらしい個である。だが、真鍋かおりはどうなのか。彼女のブログは営業ブログだから個人ブログではない。彼女のブログを日本語意味解析ソフトにかけてみれば、そのネット上の存在価値がかりそめなこととも分かるかもしれない。

また、アルファブロガーと呼ばれる人たちにしても、ほとんどはエバンジェリスト(業界擁護論者)であって、独立した個であるかどうかはきわめて疑わしい。

このような状況の中で、ムーブメントとしてのブログだけが注目され、企業がセールスプロモーションとして活用しはじめている。

BBS 上でバッシングされ、自サイトに消費者の掲示板ばかりか、問合せ先のアドレスさえ記載しようとしてこなかった企業が、ブログのコミュニティを使ってセールスプロモーションをしようとしている。

だが、それは企業が仕掛け、企業が金を払ってブログをつくっているだけのことから、いつかはそこからくりがバれてしまい、早晚陳腐化するだろう。

勿論、もし、企業がブログでのリアルなコミュニティを構築して、ブログで交わされる情報に真摯に耳を傾け、商品をカスタマイズしていくなら、ブログは陳腐化しない。だが、そういう経営そのもののシステムさえ脅かすような構造変革を既存の企業ができるのかといえば、それはなかなか難しいことといえるのではないだろうか。

ユニクロのようなワントップの経営ならできる。だが、巨大化し、分業化した大企業ではなかなか難しいのではないか。

結果として、ブログをつくっても、企業にとって耳の痛い話は削除される。それでは個人に発言の場を提供していることにはならないし、そういうブログの意味に情報としての価値はない。

憂うべき問題は、そのように個人のために向けられた窓があたかも存在するような論調で社会が進んでいき、結果として、個人の意見が社会に反映されているような錯覚に、社会全体が陥ることだ。

言論の自由などと声高に叫んでいる人がいるうちは、市井の個は団結することもできたが、問題が深層に潜んでしまうと、問題は個々の問題に落としこめられてしまい、無名の個たちが共同戦線を張ることもできない。

そのようにして21世紀に多くの人が予想した個の時代は、はじまる前に終焉するのではないか。

08_08〔ベルリンの壁崩壊後、歴史は繰り返されるでいいのか〕

無名の個たちが時代の推進力になるという希望を持たれた時代がかつてあった。ロシア帝政の崩壊期である。

だが、帝政という一部の人たちが幸福な時代に続いて現れたのは、労働者という社会の大多数を占める人たちが幸福な時代ではなくて、労働者を語ることによって大多数の幸福が実現するかのような幻想を流布した一部の人たちの時代だった。

どうせ一部の人しか幸福になれないのなら、市場の原理で、一部の人たちが番狂わせに逢ったり、没落したり、時のめぐり合わせで幸福にたどり着ける可能性がないともいえない時代の方がいい。

思うに、自由主義と社会主義はそんな違いしかない。間違っても、自由主義が社会主義や共産主義よりも優れた思想だということではない。

同じような嫌な感じを、私は、これからは「個の時代」だと喧伝する人たちに感じる。「個の時代」の旗を振ってメディアを泳いでいる人たちが、個のために尽力しているのか…。彼らの姿にレーニンやスターリンの影を思うのは、私の見当外れなのだろうか。

08_09〔情報の結節点の存在意義〕

ホリエモンの言葉だったか、石原東京都知事の本音だったか忘れてしまったが、殺到する取材陣に対して、「君たちはいつまで経っても、取材される側にはならない」と、毒ついたのを憶えている。売り言葉に買い言葉で、取材する方も、取材される側などという厄介な役回りは御免こうむりたいと言かもしれない。

だが、考えて欲しい。報道が情報の結節点であることで価値を見出す時代は終わろうとしているのだ。情報のハブであることはひとつの価値の源泉でもあるが、それは報道というメディアに関してであって、それぞれの記者がハブになることはできない。

だとすれば、それぞれの記者は特異点であったり、ターニングポイントであることで、唯一存在価値が見出されるのではないか。

自動検索エンジンのバリエーションが増える昨今、特異点でない記者は意味を持たないばかりか、特異点としてのバイアスを明らかにしない記者は卑怯だし、受け手の情報メディアリテラシーの障害にもなる。情報のターミナル(終点であり始点)になることが記者が今後とも存在価値を失わない唯一のあり方だろう。

テレビを見ていたら、お宅訪問のような番組で高名な女性プロデューサーをとりあげて

いた。日本の女性参政権の歴史に名を残した傑物のお嬢さんといえれば分かるだろう。

彼女は英語で身を立てることを志し、海外の有名俳優たちをCMにキャスティングすることで有名になるとともに仕事をしてきた。彼女はいま、亡きオードリー・ヘップバーンの遺志を継ぎ、慈善団体の役員をつとめ、奉仕活動を行っている。もちろん、彼女のような仕事をする人がいなければ仕事を動いていかないし、CMも慈善事業も頓挫してしまっただけに違いない。だが、メディアで仄聞する限り、どこまで彼女はコーディネイターでしかなく、平易な結節点に過ぎないと感じてしまう。

私もオードリー・ヘップバーンが親友だったらいいなと思うし、そういう仲間を沢山もった彼女のような人生が格好いいと思うし、あこがれもする。だが、そういう生き方が今後は価値のないものになっていくと思えてならない。

同じ慈善事業でも、黒柳徹子氏がやっていることは、その賛否はともかくも、情報の終端を形成していることは揺ぎない。そういうものの価値が増大していくのが21世紀であって、異質なものをオリジナルな感覚で組み合わせることで新しいものを生み出すプロデューサーは価値観を失わないにしても、コミュニケーションのためだけに存在理由があるような分子の存在意義は極小化するに違いない。

08_10 [すべての個がゆるぎない個であり、それがひとつの角として成立することが重要]

あるべきは、他者のために個が存在するのではなく、個が個の存在のために個として存在することである。すべては、個が他者のために存在できるという妄想が変容していくなから、社会の行き詰まりが始まっているとは考えられないだろうか。

ホリエモン騒動のとき、会社は誰のものかという議論が盛んに行われた。経営陣は、会社は社員のものであって、株主のものではないと主張した。では、社員は自らのために社員でいられるのだろうか。そんなことは土台無理な話で、社員は消費者の満足を得る商品を作り出すことでのみ、社員としての存在を継続することができる。もし、社員が社員固有の事情によって、社員としての存続を図るならば、それは消費者不在の製品を生み出すことになり、それは長期的に見れば消費者の生み出す市場の論理から、挫折を経験することになる。雪印などはその典型で、官僚的な社員風土が、市場以前の欠陥商品を生み出すことになり、企業は解体した。

だが、電波法という寡占の論理が幅を利かせ、広告代理店の利益の法則から、消費者と出会うことなしに社業をすすめている地上波のテレビ業界は、構造的欠陥を温存し、表面的な繁栄を続けている。しかし、21世紀になり、その軋みは無視できぬほどになり、業界再編の波に揺れているのは確かだ。

商品流通が、商品を介したひとつのコミュニケーションだと解釈すれば、資本家・経営者・技術者・労働者と消費者はコミュニケーションのそれぞれが構成要素となる。そして、

表面上は経営者が主導権を握っているが、それは傀儡的なものであって、最終的なクライアントは消費者であることは疑いようもない。

ドイツの自動車メーカーBMW社は、役員会議に労働者の代表も参加するというが、そういうことをもってしてはじめて、会社は社員のためのものでもあると宣言できるのではないだろうか。

もし、経営者が株主たちに向かって、「会社は社員のものだ」と嘯いたところで、それは他者を盾にした自己弁護に過ぎないわけで、その浅薄さを世間の良識は見破らぬはずもない。

08_11〔企業ブログは、商品にまつわるコミュニケーションがコミュニティーであることを露呈させた〕

いま企業がブログを商品プロモーションに活用するムーブメントが起きている。それは、商品流通にもコミュニケーションであり、コミュニケーションのまわりにコミュニティーがあることに企業たちが気づいた結果ともいえる。

だが、そうは言っても、不満分子の株主の意見や商品に不満を持った消費者の意見は、そのコミュニティーの中で流通することはない。

私は、そこが一番問題なのであって、そこにこそ、ネットが個を抹殺する。社会が個を抹殺する、その実体があると感じている。

見過ごすと大変なことになるのは、不満を持った株主や商品やサービスに不満を持った消費者たちも、確実にコミュニティーの構成員だということ。これを見過ごせば第二、第三の雪印が登場することになる。

コミュニティーというのは、何らかのアイランド現象を引き起こすのは無理からぬこと。だが、それを見逃して放っておくと、そのいきつく先は、独善と停滞でしかない。そして、そういう状況を切り開いていこうという意志を、経営者の側は持ち合わせていないことはおろか、最初から異分子の排除からはじまっているのでは話にならない。

結果、企業ブログでは、くさいものには蓋的な論理が幅をきかせて、アイランド化をすすめる。意見を封じられた個の側もそれこそ腐ってしまって、口を閉じるか、暴発するほかはない。

商品をめぐるコミュニティーが、異分子や不満分子を内包しながら漸進的に進歩していくことが叶わないならば、革命がないと世の中が進んでいけないような近代に逆戻りだ。

精度の高い情報革新技術は、米粒程度の不満分子とて、見逃さないようになり、コミュニティーの純化はすすんでいこうから、早いうちに手を打たないととんでもないことになる。

08_12〔プロフェッショナルの時代の終焉〕

さまざまな要素が複雑に絡まりあうそのような時代において、何か一番信頼できるかというかといえば、個の視点。何物にも左右されない消費者の視点ということになるだろう。

つまり、人はプロフェッショナルになることによって、当事者になってしまい、独立した判断を下すことができなくなる。飛行機事故がおきる度に、飛行機オタクでしかない航空評論家たちの言説がマスコミを横溢する。それはそれで仕方のないことだけれど、それでいいのだろうか。

あるべきは、プロフェッショナルである個が、自らの社会的立場とは独立したフェイズで存在することを可能にすること。そして、その立場で社会に対してコメントすることを可能にすればいい。そういう人間を微分するともいうようなことができれば、もっとクールな社会でできあがると思うのだ。

そのようにして社会のあらゆるフェイズで、プロフェッショナルたちが、それぞれのユーザー視点でコメントを発するようになる。生産者、行政、法律、学者、それらのプロフェッショナルな鑑識眼がユーザーの立場で発言をはじめたら、世の中はパラダイムシフトともいえるような大転換時代を迎えるのではないだろうか。

だが、いまは、個は実名という首輪によって、鎖に縛られたままなのである。

そして、そういう鎖から個を開放する役目が期待できるのが、インターネットであり、そのための手段が、本著で紹介した個人情報エージェントであり、保険制度なのだ。

08_13〔エッジの立った多角形の未来...〕

一神教的二元論では線分しかできない。多神教の多元論の世界では、個が三つあれば三角形ができる。個が4つあれば四角形だ。そして、そのような確かな個が無数に増えていけば、限りなく丸に近づいていく。

インターネットによってそのような、まあいい世界が出来上がっていくのが私の望みである。

ただ、いまはまだ個の数が少ないので、私の言説はとてもとがって見える。だが、インターネットで、個が安心して発言できる環境が用意されていけば、私の言説など取るに足らない鈍角の一つになってみえるようになるだろう。

私はそういう時代を思ってやまない。

〔了〕

合計 354 枚程度